

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第315集

比企郡川島町

白井沼遺跡 I

安藤川河川改修事業関係埋蔵文化財発掘調査報告

2005

埼玉県

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団



白井沼遺跡第2次調査区全景



大廓式土器（口縁部、底部）



第8号井戸跡出土木製品（蓋）

序

川島町は地名が表すように四方を荒川、越辺川などの大小河川に囲まれた、のどかな田園風景の広がる県内でも有数な穀倉地帯です。現在、町内を横断する首都圏中央連絡自動車道の建設が進められており、一般国道254号との合流地点にはインターチェンジが設置されるなど、今後の更なる発展が期待されております。

川島町は荒川低地に立地し、川に挟まれているという条件から、明治以降においても幾多の水害に悩まされてきました。かつての洪水対策として町内に数多く残る水塚は、水害との歴史を物語っているといえます。町内のほぼ中心を南北に流れる安藤川は、川越北西部の市境で入間川と合流する小河川です。この安藤川は、流域に建設された排水機場の能力向上のために昭和52年6月から河川改修工事が着手され、現在も順次工事が進められているところであります。

今回の安藤川の河川改修工事に当たり、予定地内に埋蔵文化財包蔵地（白井沼遺跡）の所在が明らかとなり、その埋蔵文化財の取扱いについては、関係機関が慎重に協議を重ねてまいりました。その結果、埼玉県教育局生涯学習部生涯学習文化財課の調整により、やむを得ず現状での保存が困難となる範囲について、当事業団が埼玉県県土整備部の委託を受け、発掘調査を行うこととなりました。

発掘調査の結果、遺跡は今から約1,700年前の古墳時代前期に営まれた集落跡であることが判明いたしました。竪穴住居跡、掘立柱建物跡、周溝、井戸跡などの多数の遺構が発見され、当地域で生活した先人の足跡を明らかにすることができるなど、多大な成果を収めることができました。

本書は、これらの発掘調査成果をまとめたものであります。埋蔵文化財の保護や学術研究の基礎資料として、また、普及・啓発及び学校教育、生涯学習の参考資料として広く活用していただければ幸いです。

本報告書の刊行にあたり、発掘調査に関する諸調整に御尽力いただきました埼玉県教育局生涯学習部生涯学習文化財課をはじめ、埼玉県県土整備部河川砂防課、川島町教育委員会並びに地元関係者各位に対し、深く感謝申し上げます。

平成17年9月

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
理事長 福田陽充

例 言

1. 本書は、埼玉県比企郡川島町に所在する白井沼遺跡（第2次）の発掘調査報告書である。
2. 遺跡の略号と代表地番及び発掘調査届に対する指示通知は、以下のとおりである。
白井沼遺跡第2次（略号SRINM2次 遺跡番号37-008）
埼玉県比企郡川島町大字白井沼字関ヶ谷戸271他
平成17年2月22日付け教文第2-73号
3. 発掘調査は、安藤川河川改修事業に伴う事前調査であり、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課が調整し、埼玉県県土整備部河川砂防課の委託を受け、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。
4. 発掘調査事業は、I-3に示す組織により実施した。発掘調査は、平成17年1月6日から3月24日まで剣持和夫、細田勝、清水慎也が担当し、渡辺慎太郎の協力を得た。
整理・報告書作成事業は、平成17年4月1日から6月30日まで磯崎一、中山浩彦が担当し、大和田瞳の協力を得た。
5. 遺跡の基準点測量は、精進測量設計株式会社に委託した。空中写真撮影は、株式会社東京航業研究所に委託した。
6. 発掘調査時の写真撮影は発掘担当者が、遺物の写真撮影は大屋道則が行った。
7. 出土品の整理・図版の作成は中山が行い、土器・木製品・土製品の実測に関しては大和田が行い、土器の実測に関しては兵ゆり子、石器の実測に関しては山北美穂の協力を得た。
8. 本書の執筆は、I-1を埼玉県教育局生涯学習部生涯学習文化財課が、IV-8b・c、V-2を大和田が、IV-8aを山北が、その他を中山が行なった。
9. 本書の編集は、中山が行った。
10. 本書にかかる資料は、平成18年度以降、埼玉県立埋蔵文化財センターで管理・保管する。
12. 発掘調査から報告書の刊行までに下記の方々・機関から御教示、御協力を賜った。記して感謝の意を表します。（敬省略）
柿沼幹夫 小出輝雄 酒巻忠史 鈴木敏弘
川島町教育委員会

凡 例

1. 遺跡全体におけるX・Yの数値は、国土標準平面直角座標第IX系（原点：北緯36° 00′ 00″、東経139° 00′ 00″）に基づく座標値を示す。また、各挿図における方位はすべて座標北を示す。
2. 遺跡におけるグリッドの設定は、国土標準平面直角座標に基づいて設置した、10 m×10 m方眼を基本グリッドとしている。
3. グリッドの名称は、北西杭を基準として、東西方向は西から東へA、B、C……とアルファベツトを付し、南北方向は北から南へ1、2、3……と算用数字を付した。
4. 調査区は東西方向に貫く水路によって分断されていたため、北側の調査区をA区、南側をB区と便宜上に呼称した。
5. 本報告書における遺構番号は、原則として発掘調査時に付した番号のまま掲載している。但し、本書掲載にさいして番号を変更した遺構については、新旧の番号表示を明記した。
6. 本書における本文・挿図・表に示す遺構の略号は以下のとおりである。

S J…竪穴住居跡	S B…掘立柱建物跡
S E…井戸跡	S K…土壇
S D…溝跡	S X…周溝
P…ピット	
7. 本書における挿図の縮尺は原則として以下のとおりである。

遺構	遺構図	1/60
	遺物出土状況図	1/30
遺物	土器・木製品	1/4
	土器拓影図・石器	1/3
	土製品	1/2
8. 遺構断面図に表記した水準数値は、海拔標高を示す。
9. 遺物分布図におけるドットの記号の指示は以下のとおりである。

●…土師器	○…陶磁器・瓦
■…土製品	▲…木製品
10. 遺物観察表の表記方法は、以下のとおりである。
 - ・法量の（ ）付き数値は復元推定値を、[]付きは残存高を表す。単位は全てcmである。
 - ・胎土は土器に含まれる鉱物等のうち、肉眼で観察できる特徴的なものを示した。

A—雲母	B—片岩	C—角閃石	D—長石
E—石英	F—砂粒子	G—赤色粒子	
H—白色粒子	I—灰白色粒子（土器の碎片を混入したものを一括して呼称した）		
J—白色針状物質	K—小礫		
 - ・焼成は、良好・普通・不良の3段階で表示した。
 - ・色調は、『新版標準土色帖』2002年度版（農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色標監修）を基に通用表記とした。
 - ・残存率は、図示上に示した範囲を5%単位で表示した。あくまでも目安としての大まかな全体表示である。
11. 遺物のうち、土器実測図の網掛けは20%が赤彩範囲を示す。
12. 本報告書に掲載した地形図は、国土地理院発行の1/25,000、川島町都市計画図1/2,500を使用した。

目次

口 絵
序
例 言
凡 例
目 次

I 発掘調査の概要	1	3. 周溝	13
1. 発掘調査に至る経過	1	4. 井戸跡	26
2. 発掘調査・報告書作成の経過	2	5. 土壌	29
3. 発掘調査・整理・報告書刊行の組織	3	6. 溝跡	53
II 遺跡の立地と環境	4	7. ピット	66
III 遺跡の概要	7	8. その他の出土遺物	67
IV 遺構と遺物	10	9. 遺構に伴わない出土遺物	70
1. 竪穴住居跡	10	V まとめ	73
2. 掘立柱建物跡	12	写真図版	

挿図目次

第1図 埼玉県の地形	4	第18図 第4号周溝	23
第2図 周辺の遺跡	6	第19図 第4号周溝出土遺物	24
第3図 遺跡周辺の地形図	8	第20図 第5号周溝	25
第4図 調査区全体図	9	第21図 第5号周溝出土遺物	25
第5図 第1号住居跡	10	第22図 井戸跡	27
第6図 第1号住居跡出土遺物	11	第23図 井戸跡出土遺物	28
第7図 第2号住居跡	11	第24図 土壌(1)	30
第8図 第1号掘立柱建物跡・出土遺物	12	第25図 土壌(2)	32
第9図 第1号周溝(1)	13	第26図 土壌(3)	34
第10図 第1号周溝(2)	14	第27図 土壌(4)	36
第11図 第1号周溝出土遺物(1)	15	第28図 土壌(5)	38
第12図 第1号周溝出土遺物(2)	16	第29図 土壌遺物出土状況	40
第13図 第1号周溝出土遺物(3)	17	第30図 土壌出土遺物(1)	41
第14図 第2号周溝	19	第31図 土壌出土遺物(2)	42
第15図 第2号周溝出土遺物	20	第32図 土壌出土遺物(3)	43
第16図 第3号周溝	22	第33図 土壌出土遺物(4)	44
第17図 第3号周溝出土遺物	22	第34図 土壌出土遺物(5)	45

第35図	土壙出土遺物（6）	46	第45図	溝跡出土遺物（3）	63
第36図	土壙出土遺物（7）	47	第46図	溝跡出土遺物（4）	64
第37図	土壙出土遺物（8）	48	第47図	石製品	67
第38図	土壙出土遺物（9）	49	第48図	土製品	68
第39図	A区溝跡・ピット	54	第49図	木製品	69
第40図	B区溝跡・ピット（1）	56	第50図	遺構に伴わない出土遺物（1）	70
第41図	B区溝跡・ピット（2）	57	第51図	遺構に伴わない出土遺物（2）	71
第42図	溝跡遺物出土状況	60	第52図	尾崎遺跡全測図	74
第43図	溝跡出土遺物（1）	61	第53図	木製蓋の類例	75
第44図	溝跡出土遺物（2）	62			

表 目 次

第1表	第1号住居跡出土遺物観察表	11	第13表	土壙出土遺物観察表（2）	50
第2表	S B 1ピット一覧表	12	第14表	土壙出土遺物観察表（3）	51
第3表	第1号掘立柱建物跡出土遺物観察表	12	第15表	土壙出土遺物観察表（4）	52
第4表	第1号周溝出土遺物観察表	18	第16表	土壙出土遺物観察表（5）	53
第5表	第2号周溝出土遺物観察表	21	第17表	溝跡一覧表	59
第6表	第3号周溝出土遺物観察表	22	第18表	溝跡出土遺物観察表（1）	64
第7表	第4号周溝出土遺物観察表	24	第19表	溝跡出土遺物観察表（2）	65
第8表	第5号周溝出土遺物観察表	25	第20表	溝跡出土遺物観察表（3）	66
第9表	井戸跡一覧表	26	第21表	ピット一覧表	67
第10表	井戸跡出土遺物観察表	28	第22表	遺構に伴わない出土遺物観察表	72
第11表	土壙一覧表	39	第23表	白井沼遺跡第2次周溝一覧表	73
第12表	土壙出土遺物観察表（1）	49			

図版目次

- 口絵1 白井沼遺跡第2次調査区全景
口絵2 大廓式土器（口縁部、底部）
第8号井戸跡出土木製品（蓋）
図版1 遺跡遠景
遺跡近景
図版2 第1号住居跡
第1号掘立柱建物跡
図版3 第1号周溝（1）・（2）
第1号周溝遺物出土状況（1）～（3）
図版4 第2号周溝
第3号周溝
図版5 第4号周溝
第5号周溝
図版6 第3号井戸跡
第8号井戸跡
第1号土壙、第6号溝跡遺物出土状況
第4号土壙遺物出土状況
第5号土壙遺物出土状況
第6号土壙遺物出土状況
第11号土壙
第14・20号土壙
図版7 第15号土壙、第23号溝跡遺物出土状況
第28号土壙遺物出土状況
第41～43号土壙
第4・5号溝跡
第7号溝跡遺物出土状況
第9号溝跡
第33号溝跡
第39号溝跡
図版8 第1号住居跡出土遺物
第1号周溝出土遺物（1）
図版9 第1号周溝出土遺物（2）
図版10 第1号周溝出土遺物（3）
図版11 第2号周溝出土遺物
図版12 第3号周溝出土遺物
第4号周溝出土遺物
第8号井戸跡出土遺物
図版13 第2号土壙出土遺物（1）
図版14 第2号土壙出土遺物（2）
第3号土壙出土遺物
第4号土壙出土遺物（1）
図版15 第4号土壙出土遺物（2）
図版16 第4号土壙出土遺物（3）
第5号土壙出土遺物（1）
図版17 第5号土壙出土遺物（2）
第6号土壙出土遺物（1）
図版18 第6号土壙出土遺物（2）
図版19 第6号土壙出土遺物（3）
第9号土壙出土遺物
第14号土壙出土遺物（1）
図版20 第14号土壙出土遺物（2）
第15号土壙出土遺物
第28号土壙出土遺物（1）
図版21 第28号土壙出土遺物（2）
図版22 第35号土壙出土遺物
第36号土壙出土遺物
第37号土壙出土遺物
第39号土壙出土遺物
図版23 第3号溝跡出土遺物
第6a号溝跡出土遺物
第7号溝跡出土遺物
図版24 第7a号溝跡出土遺物
第7b号溝跡出土遺物（1）
図版25 第7b号溝跡出土遺物（2）
図版26 第10号溝跡出土遺物
第23号溝跡出土遺物
第33号溝跡出土遺物
第37号溝跡出土遺物
図版27 破片遺物（壺口縁部）
破片遺物（壺胴部）

図版28	破片遺物 (壺底部)	石製品
	破片遺物 (甌底部)	土製品
図版29	破片遺物 (S字状口縁台付甕口縁部)	木製品
	破片遺物 (甕口縁部)	図版31 遺構に伴わない出土遺物 (1)
図版30	縄文土器	図版32 遺構に伴わない出土遺物 (2)

I 発掘調査の概要

1. 発掘調査に至る経過

埼玉県では、『彩の国5か年計画21』における基本目標「災害に強い県土をつくる」の施策の一つ「氾濫を防ぐ治水対策の推進」として、河道改修や調節池の整備などを推進してきた。市野川河川改修事業は、こうした施策の一環として、計画されたものである。

このような施策の推進に伴う文化財の保護について、県教育局生涯学習部文化財保護課では、関係部局との事前協議を重ね、調整を図っている。

本事業にかかる埋蔵文化財の所在及び取扱いについては、平成15年10月27日付け河砂第2341号で県土整備部河川砂防課から文化財保護課長あてに照会があった。

文化財保護課では確認調査を実施し、その結果をもとに、平成16年1月9日付け教文第3186号で、白井沼遺跡（No.37-008遺跡）の取扱いについて次のように回答した。

1 埋蔵文化財の所在

工事予定地には以下の埋蔵文化財が所在する。

名称 (No.)	種別	時代	所在地
白井沼遺跡 (No.37-008)	集落跡	古墳時代	川島町白井沼地内

2 取扱いについて

上記の埋蔵文化財は現状保存することが望ましいが、工事計画上やむを得ず上記の埋蔵文化財包蔵地の現状を変更する場合には、事前に文化財保護法第57条の3の規定に基づく発掘通知を埼玉県教育委員会教育長あてに提出し、記録保存のための発掘調査を実施すること。

発掘調査については、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施機関としてあたることとし、事業団、東松山県土整備事務所、文化財保護課の三者により調査方法、期間、経費などの問題を中心に協議が行われた。

その結果、調査は平成17年1月6日から平成17年3月24日まで実施された。

なお、文化財保護法第57条の3の規定による埋蔵文化財発掘通知が埼玉県知事から平成16年12月17日付け東整第1876号で提出され、それに対する保護法上必要な勧告は、平成16年2月22日付け教文第3-890号で行った。

また、文化財保護法第57条第1項の規定による発掘調査届が財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団理事長から提出された。

発掘調査の届出に対する指示通知番号は次のとおりである。

平成17年2月22日付け 教文第2-73号

(埼玉県教育局生涯学習部生涯学習文化財課)

2. 発掘調査・報告書作成の経過

(1) 発掘調査

白井沼遺跡第2次調査は、平成17年1月6日から平成17年3月24日まで実施した。調査面積は、2,000㎡であった。

平成16年12月中に事務手続き、事務所設置を終了し、重機による表土掘削に着手した。

年明けの1月から補助員を投入し、本格的な調査を開始した。調査は、北側のA区から着手し、人力での遺構確認・遺構精査を順次行っていった。13日からは基準点測量を実施した。中旬から下旬にかけてB区の調査にも着手した。B区はA区と比べ、遺構の重複が著しく、作業は困難を極めることが予測された。

2月は、B区の遺構の重複が激しいため、土層観察のためのベルトを多く設定して、遺構精査を進めていった。掘り上がった遺構から、遺物の出土状況、完掘状況の写真撮影、遺構断面図・平面図等の作成を行った。

3月も遺構の精査を引き続き行った。16日には、空中写真撮影を実施し、残った図面の作成を行った。遺構精査、図面作成が終了した後、安全確保のため重機により調査区の埋め戻しを行い、24日に全ての作業を終了した。

調査の結果、竪穴住居跡2軒、掘立柱建物跡1棟、周溝5基、井戸跡8基、土壇51基、溝跡36条、ピット76本を検出した。遺物は、古墳時代前期の土師器が主体で、石器・土製品や木製品が少量出土した。遺物量は、コンテナで総数65箱であった。

(2) 整理・報告書の作成

整理・報告書作成は、平成17年4月1日から開始し、9月30日まで実施した。

4月は、遺跡から出土した遺物の水洗、注記を行い、順次、接合・復原作業に着手した。中旬からは、接合が終了した遺構から分類を行った後、土器・木製品の実測を開始した。遺物の作業と並行して、全体図、遺構の二次原図の作成を行なった。遺構の二次原図を終了したものについてはイラストレーターでトレースを開始した。また、各遺構の土層注記の入力も行った。

5月は、土器の実測と並行して、破片資料の拓本作業を行った。実測作業が進んだところで、中旬からはトレースも開始した。また、遺物の観察表の入力も同時に行った。上旬までに遺構の二次原図の作業を終わらせ、イラストレーターでのトレースを進めた。遺物の出土している遺構については分布図を作成し、トレースを行った。

6月上旬に遺物の実測が終了したところで、遺物の写真撮影を行った。また、トレースが終了したものについては図版作成を行った。下旬からは遺構・遺物の各種表の作成を行いながら、原稿の執筆を開始する。末には作業が終了した図面、写真、遺物等を整理・分類し、収納作業を行なった。

7月上旬までに遺構・遺物の版組を終了した。下旬に原稿執筆を終了し、割付も行った。

8・9月は、入札後、3回の校正を経て、報告書を印刷、刊行した。

3. 発掘調査・整理・報告書刊行の組織

主体者 財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

(1) 発掘調査 (平成16年度)

理事長	福田 陽 充
副理事長	飯塚 誠一郎
常務理事兼管理部長	中村 英 樹
管理部	
副部長	村田 健 二
主席	田中 由 夫
主任	長滝 美智子
主任	福田 昭 美
主任	菊池 久
主任	海老名 健
主任	石原 良子
調査部	
調査部長	宮崎 朝 雄
調査副部長	坂野 和 信
主席調査員 (調査第二担当)	劔持 和 夫
統括調査員	細田 勝
調査員	清水 慎也

(2) 整理・報告書刊行 (平成17年度)

理事長	福田 陽 充
副理事長	飯塚 誠一郎
常務理事兼管理部長	保永 清 光
管理部	
副部長	村田 健 二
主席	高橋 義 和
主席	宮井 英 一
主任 (~8月5日)	長滝 美智子
主任	福田 昭 美
主任	菊池 久
主任	海老名 健
主任 事 (8月1日~)	岩上 浩子
調査部	
調査部長	今泉 泰之
調査部副部長	坂野 和 信
主席調査員 (資料整理第一担当)	礒崎 一
主任調査員	中山 浩彦

II 遺跡の立地と環境

白井沼遺跡は、埼玉県比企郡川島町大字白井沼字関ヶ谷戸 271 番地ほかに所在する。遺跡は、川島町役場の北東約 800 m の地点に位置する。

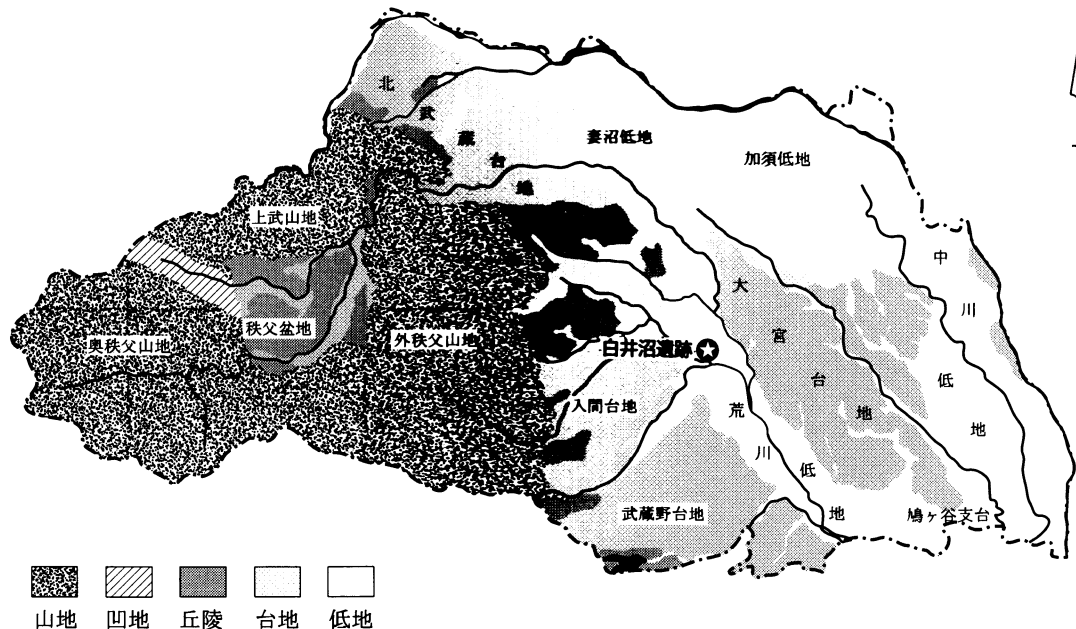
川島町は埼玉県のほぼ中央の荒川低地に位置し、四周を大小河川に取り囲まれている。北側を市野川、南側を入間川、東側を荒川、西には越辺川・都幾川が流れる。川島町域でそれらの河川が合流し、荒川と入間川の 2 本となり、さらに南下した上尾・さいたま市との境界地点では荒川と入間川が合流する。町全体の平均標高は 14.5 m、遺跡の標高が約 11 m で、大宮台地や入間台地との比高差は約 4～5 m になる。このような立地条件により、土壌が畑作には適さないため、稲作が主体となる。周囲の河川から水を取り込むことが容易なため水利には全く困らないという利点がある。しかし、一旦集中豪雨が続くと県西部で降った雨水が町域に集中し、頻繁に水害が起こりやすいということになる。当地域は水害との歴史を抜きにしては語れないのである。中・近世以降では文献によりかつての水害の歴史を知ることができるが、古代においても堂地遺跡で洪水により遺跡が一気に埋没したことが判明している。

遺跡周辺の字名には、平沼、浮沼、江ノ島、鶴舞、鶴巻、曲師などの低湿地・自然堤防などの地形や河川の状態を表した地名が数多く残っている。遺跡名である白井沼という地名も、本遺跡周辺にかつて沼が存在していたことを伺わせ、その沼については旧河川の流路跡と考えられている。

遺跡が所在する三保谷地区の航空写真を見ると、町内の発達した自然堤防の様相が明瞭である。現在では自然堤防上に集落が営まれ、周囲に水田が広がる風景により、旧河川が乱流していた有様が容易に想像できる。

これらの自然堤防がいつの時代に形成されたのかは不明である。従来の発掘調査の成果から、縄文時代前期頃と考えられている。ただ、これまでに弥生時代以前の遺跡や遺物がほとんど発見されていないことから本格的に自然堤防上の開発が進むのは古墳時代前期前後の時期と考えられる。

今回の調査原因ともなった安藤川は、町の北西部に大正末期頃まで存在した安藤沼を源とする。町の中心部に向けて東流し、遺跡付近で流れを南に変え、川越市北部の境界で入間川と合流している。



第 1 図 埼玉県の地形

これまでに川島町域で実施された遺跡の発掘調査は数少ない。加えて、その大半が自然堤防上に立地するという条件から、表面採集での情報にも限界があり、各遺跡の詳細が明らかになっていないのが現状である。また、現在知られている埋蔵文化財包蔵地の他にも、今後更に多くの未知の遺跡が発見される可能性が高い。

町内において一番古い遺跡は、荒川左岸の堤外に位置する芝沼堤外遺跡(3)である。縄文時代前期後葉の住居跡3軒、土壇20基、ピットなどが地表下5mの地点で検出されている。(註1) また、数枚の文化層が確認されていることから、周辺にも地表下深くに縄文の遺跡が眠っている可能性が考えられる。他にも、縄文土器が出土した遺跡が数箇所知られているが、各遺跡で数点しか出土しておらず、洪水等で流されてきたものと考えられる。

弥生時代には、村並遺跡(9)の調査トレンチから中期の条痕文系土器片が採集されているが、当該期の集落跡の存在については不明である。

古墳時代前期になると、町内の北側の自然堤防上を中心に遺跡数が大幅に増加する。西から極楽寺遺跡(4)、宮ヶ谷戸遺跡(5)、柳町遺跡B区(7)、村並遺跡、尾崎遺跡(10)、元宿遺跡(13)などが知られている。

尾崎遺跡は、平成9年に調査が実施され、古墳時代前期の周溝5基、土壇1基、古墳時代後期の住居跡4軒、土壇4基、奈良時代の井戸跡1基、中世の堀1条、井戸跡3基などが検出された。(註2) 調査範囲が狭かったため、全体を調査できた遺構が少なく、周溝の全容も不明である。第4・5号周溝と報告されたものについては、現段階ではその形態から周溝ではなく溝として理解した方が良いかと思われる。第1～3号周溝は重複が著しく、「周溝を有する建物跡」とされているが、中央の平坦部に居住施設に関する遺構は検出されていない。

古墳時代後期になると、さらに遺跡数は増加し、集落跡としては前述の遺跡の他に、柳町遺跡A区(6)

などがある。また、町内南西部には工事により偶発的に発見された玉造遺跡の正直遺跡があり、管玉・釧の未製品や砥石などが出土している。(註3)

同一の自然堤防上には集落跡とは別に、6世紀中葉以降に古墳が築造される。前方後円墳の稻荷塚古墳(2)、円墳の大塚古墳(8)、富士浅間塚(11)、愛宕塚(12)、広徳寺古墳(15)、森谷稻荷塚(16)など数基が現存している。荒川下流域にも前方後円墳と考えられている白山古墳が現存しており、径約20m級の小～中規模の古墳が点在する。大塚古墳は、平成3年に緊急調査が実施され、墳丘部分から周堀にかけて調査が行われた。墳丘の残存状態が悪いが、径約36m、高さ5.5mの円墳で、埋葬施設は組合せ式箱式石棺であることが判明している。(註4)

奈良・平安時代になると遺跡は減少し、尾崎遺跡、極楽寺遺跡、堂地遺跡などが知られるのみである。

中世以降では、極楽寺遺跡、尾崎遺跡、美尾谷十郎廣得館跡(14)、堂地遺跡などがある。堂地遺跡は、平成12年に調査が実施され、古墳時代前期の井戸跡1基、奈良・平安時代の住居跡11軒、井戸跡4基、中世の掘立柱建物跡8棟、溝37条などが検出された。13世紀前葉の居館跡であった可能性が言われている。(註5) 中世になると、新田開発とともに多くの寺院が町内に建立されるようになるのである。

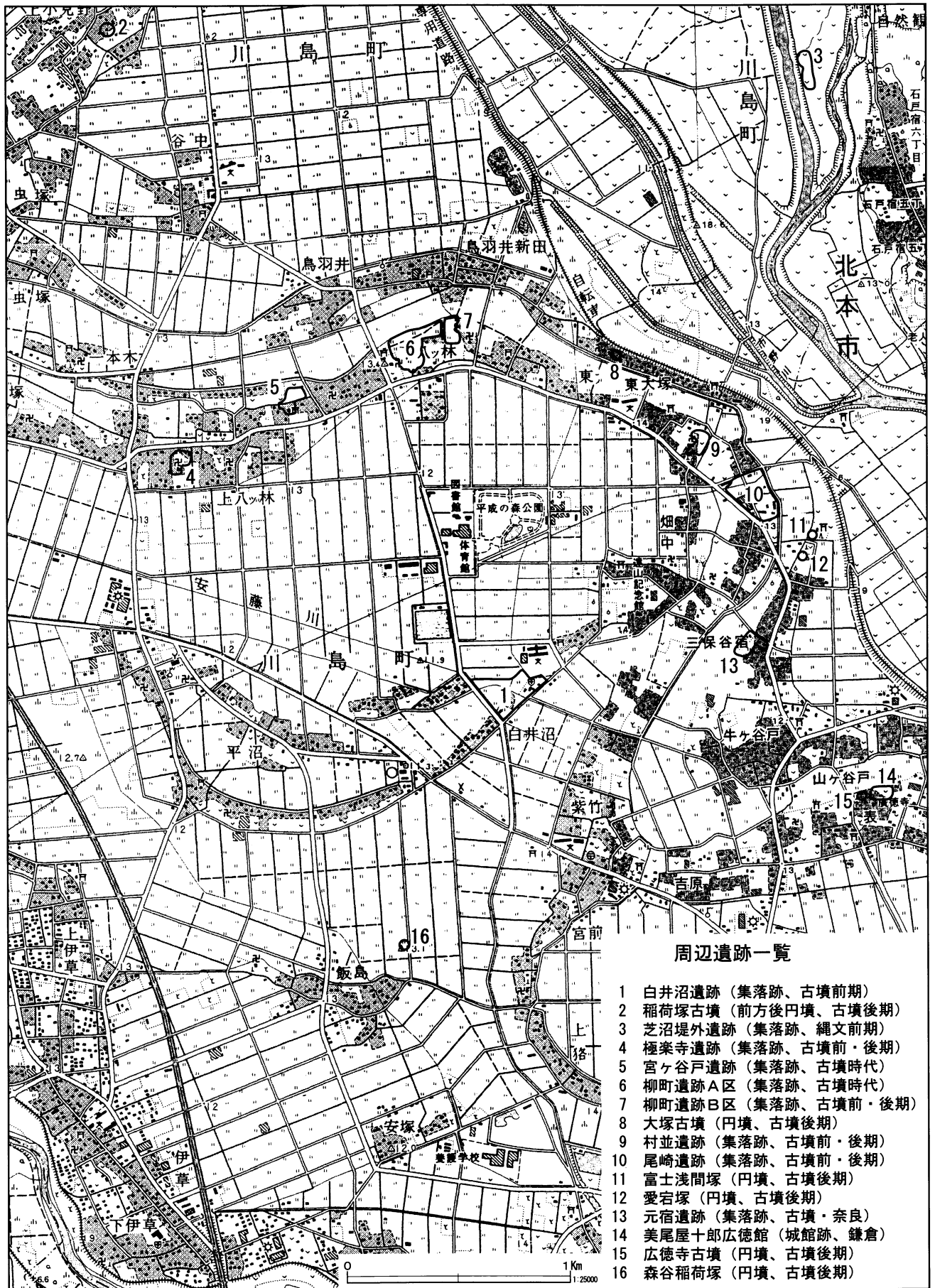
註1 金子直行 2004 『芝沼堤外遺跡』川島町遺跡発掘調査報告書第2集 川島町教育委員会

註2 金子直行・馬橋泰雄ほか 2002 『尾崎遺跡』川島町遺跡発掘調査報告書第1集 川島町教育委員会

註3 石岡憲雄 1980 「北武蔵の玉作遺跡」『研究紀要』第2号 埼玉県立歴史資料館

註4 津田福治 1992 『大塚古墳緊急発掘調査報告』川島町の文化財11 川島町教育委員会

註5 若松良一 2000 『堂地遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第266集



第2図 周辺の遺跡

III 遺跡の概要

白井沼遺跡は、東西に半円を描くような形の自然堤防上の東端に立地する。この自然堤防は、遺跡のすぐ西側で安藤川によって分断されているが、もとは同一の自然堤防と考えられる。

第1次調査地点は北東約80mの場所で、東西にトレンチを入れた格好になる。その結果、古墳時代前期の住居跡3軒、掘立柱建物跡4棟、周溝5基、井戸跡3基、土壇38基、溝34条などが検出された。

第2次調査は、調査区のほぼ中央を用水路が流れていたことから、北側をA区、南側をB区と呼称し調査を進行した。A区では遺構の密度が薄かったが、B区は宅地であったため攪乱が著しく、遺構も激しく重複していたため、遺構の調査は困難を極めた。

調査区は南北に長く、遺跡範囲の南西端に当たる。検出された遺構は、古墳時代前期の住居跡2軒、掘立柱建物跡1棟、周溝5基、井戸跡2基、土壇38基、溝跡24条、近世以降或いは時期不詳の井戸跡6基、土壇13基、溝跡11条であった。第5号溝の北側には浅い谷が入り込んでおり、第1次調査でも同様の谷が検出されていることから、現在は水田となっている範囲は谷部になると推測される。埋土は、遺構の覆土と相似の黒色土であり、古式土師器が少量出土していることから、谷部は古墳時代前期にほぼ埋没していたものと考えられる。

住居跡は、調査区の中で標高が一番高い範囲から検出された。他の遺構との重複や攪乱のため遺存状態が悪く、住居跡とするには疑わしい点もあったが、炉跡や貼り床などが確認できたことから住居跡と認定した。第1号住居跡は、土層断面で周溝や土壇よりも古いことが観察できたことから、今回検出された遺構の中で最も古い遺構の一つと考えられる。

掘立柱建物跡も遺構の重複が著しく、全ての柱穴を検出できなかったが、2×2間の建物跡となる。

周溝は、確実なものが5基検出されたが、調査区が狭長のため全容が不明の溝がまだ多数あることか

ら、それ以上の周溝の存在が予想される。

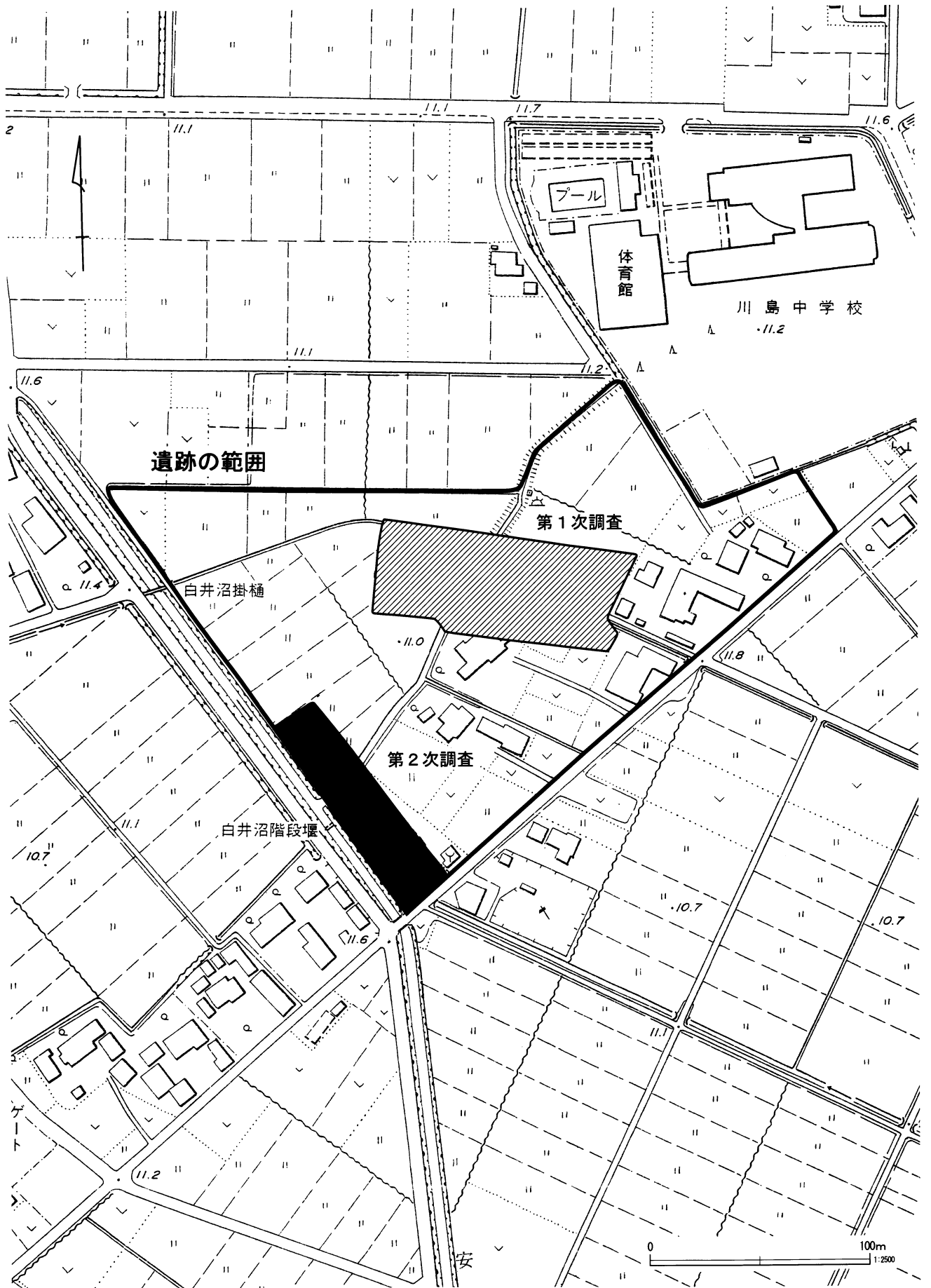
それぞれの周溝同士に重複関係は認められず、第1号周溝を除いた第2～5号周溝は、軸をほぼ同一に向けていた。第1号周溝は、方形の溝が2重に巡り、平坦部には住居跡の支柱穴を思わせる規則的に配置された4本のピットが検出された。2重に巡る溝は、土層観察や出土遺物などから、内側から外側へ拡張したものと考えられた。第2号周溝は、北西に開口部を設けていたが、他の周溝については形態が不明である。規模は、第3号周溝が最大で17.2m、最小が第4号周溝の10.6mであった。遺物は、第1号周溝の外側の溝から多量の古式土師器が底面から浮いた状態で出土したが、他の遺構は全体的に遺物量が少なかった。

井戸跡は、第8号井戸跡から古式土師器の壺と共伴して、ほぼ完形の蓋形木製品が出土している。

土壇は、第2～6・9・28号土壇で多量の遺物が出土した。第5号土壇では、現存高が約70cmある大型壺が据え置かれた状態で出土している。第28号土壇からは、大廓式壺の口縁部片が出土している。色調は浅黄橙色を呈し、胎土が他の土器と全く異質であることから、搬入品である可能性が高い。同グリッドからも底部が出土しており、同一個体の破片と思われる。加えて、第5・9・28号土壇の埋土には、多量の炭化物が包含されていることから、祭祀に関連した遺構と考えられる。

周溝以外の溝跡は、全体的に浅く短いものが多く、第9・38号溝跡は住居跡の壁溝の可能性もある。

近世以降の遺構では、第21a・30号溝から羽口や鉢滓などが廃棄された状態で出土している。当該期の溝の大半は、区画や排水の機能を有していたと考えられる。第6号井戸跡などからは、鉢や内耳鍋、漆塗りの木製椀などが出土している。報告書では、掲載スペース等の関係から木製品以外の遺物については掲載を割愛した。



第3図 遺跡周辺の地形図

A-1 B C D E F G H
 X=-2020

2

3

4

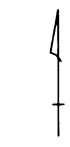
5

6

7

8

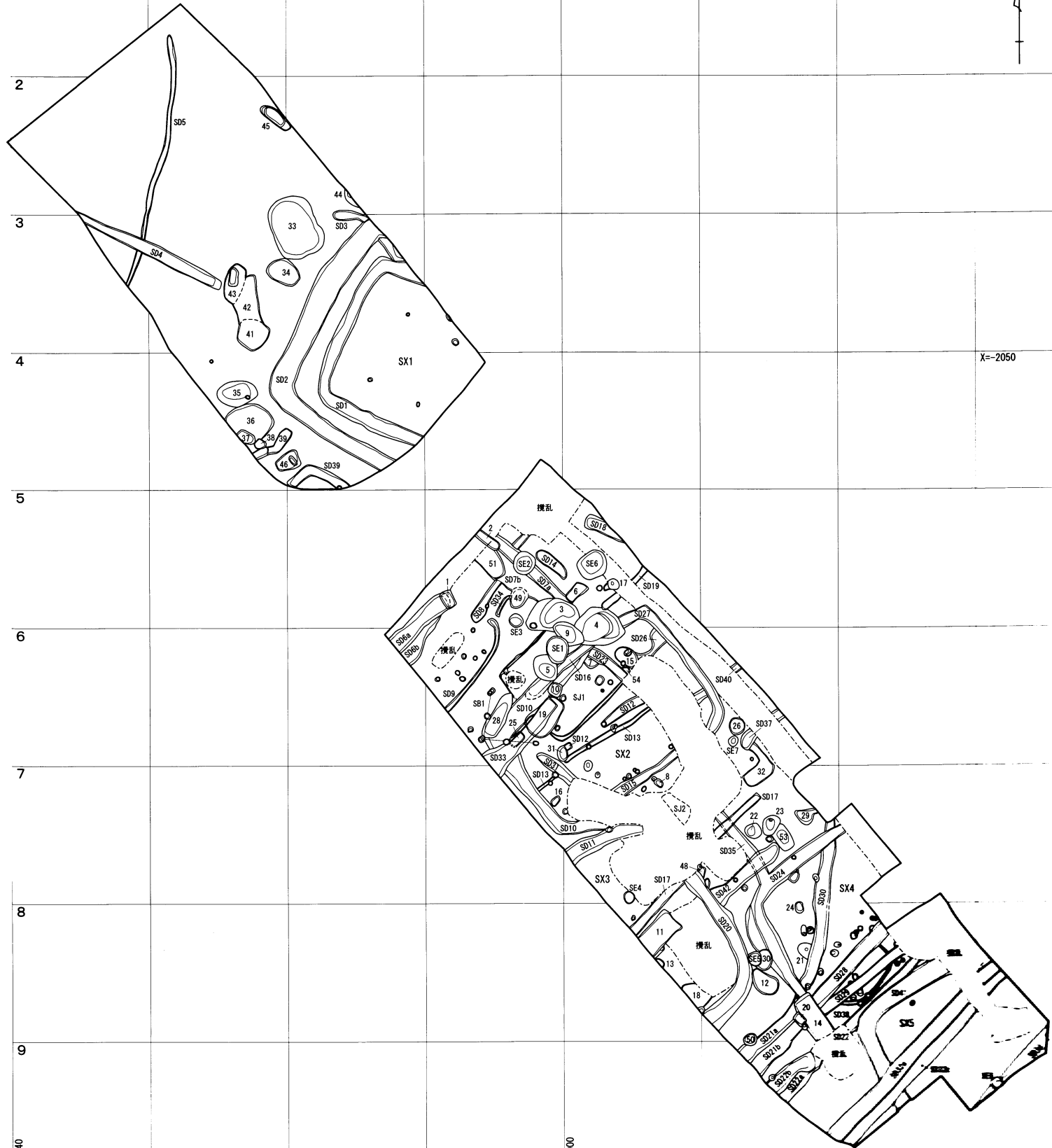
9



X=-2050

Y=31040

Y=31000



第4図 調査区全体図

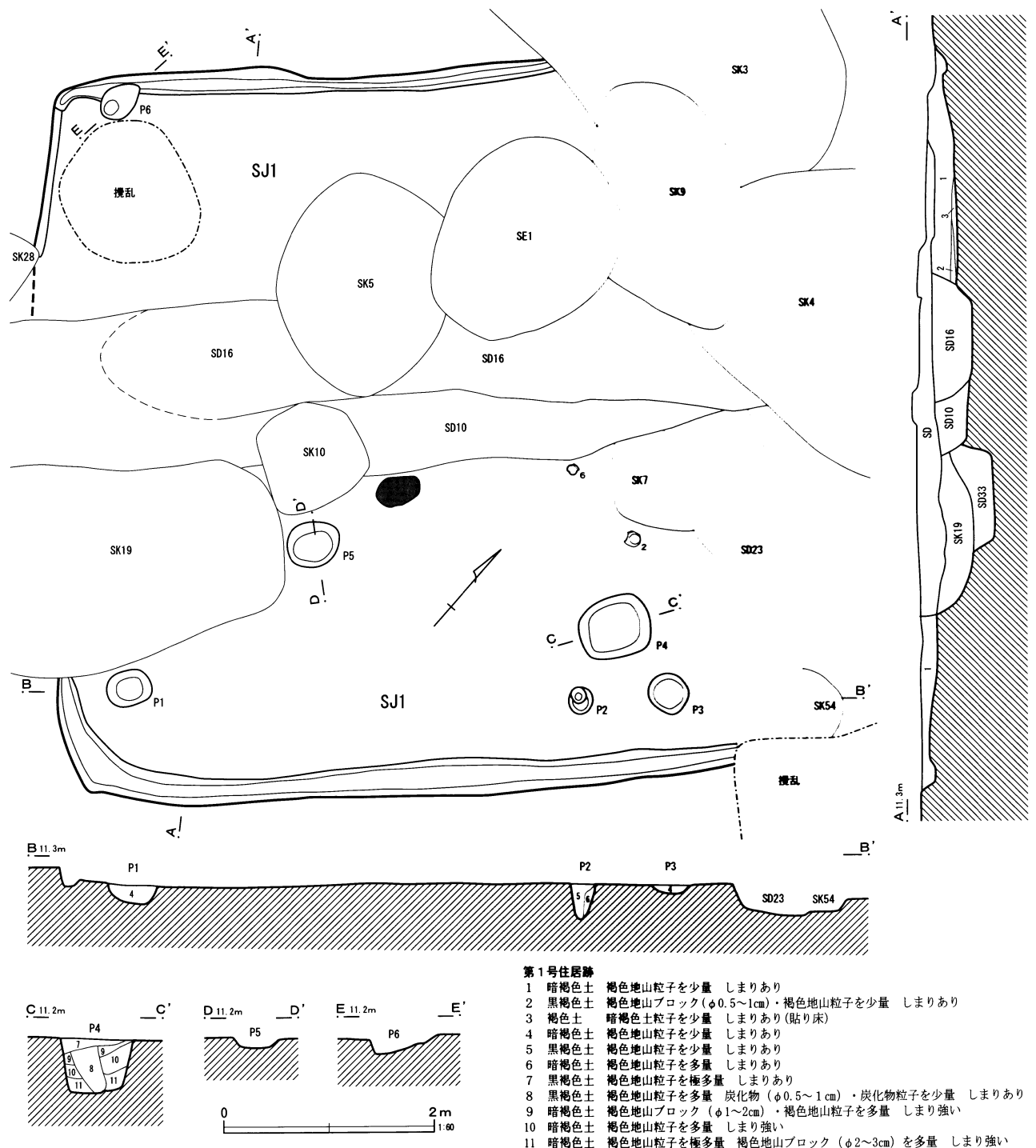
VI 遺構と遺物

1. 竪穴住居跡

第1号住居跡 (第5図)

D・E-6グリッドにかけて検出された。第2号周溝、第1号井戸跡、第3・4・5・7・9・10・19・28号土壌、第10・23号溝跡と複数の遺構と重複し

ていたうえに、北西・南東コーナー部に攪乱があったため残存状態が悪かった。新旧関係は、重複する全ての遺構より本遺構の方が古かった。東壁は重複する遺構により検出できなかったが、第23号溝跡



第5図 第1号住居跡

の東側に床面が確認できなかったことから、第23号溝跡より東側には延びていなかったと推測できる。

規模は、南北6.86 m、東西6.36 m以上、深さが0.08～0.15 mで、平面形態は方形であったと考えられる。主軸方位はN-43°-Wであった。

床面は、平坦ではなく、中央部分が周囲よりやや低くなっていた。第5号土壇の周辺では、掘り方が確認できた。

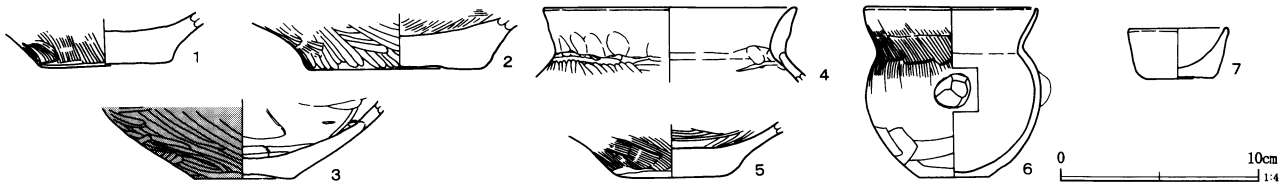
炉跡は、住居跡の中央西よりで検出された。南北0.42 m、東西0.26 mの楕円形で、掘り込みがなく、床面がやや赤く被熱した状態であった。

壁溝は、北西コーナー部を除き、全周していた。

幅0.13～0.37 m、深さが0.08～0.18 mで、壁は緩やかに立ち上がっていた。

柱穴は本遺構内で計6本が検出されたが、住居跡に確実に伴うと考えられるのはP4だけで、その他のピットは浅いものが多く、柱穴でない可能性が高い。P4からは、直径約20 cmの柱材を抜いた痕跡が土層断面で確認できた。貯蔵穴は確認できなかった。

遺物は、埋土から少量の古式土師器が出土しており、床面に近い高さから2の壺底部と6の小型甕が出土した。2の底部には、木葉痕の一部が僅かに認められる。6は、胴部中位の1箇所にはボタン状の浮文が貼付されている。

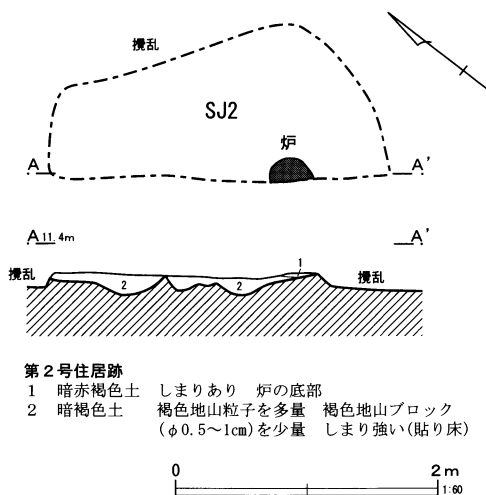


第6図 第1号住居跡出土遺物

第1表 第1号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	壺	—	[2.4]	6.9	CEFH	普通	にぶい黄橙	95%	d区
2	壺	—	[2.9]	5.3	CEFK	普通	にぶい黄橙	95%	底部に木葉痕が僅かに残る
3	壺	—	[4.0]	5.2	EFK	良好	淡黄	75%	外面に赤彩
4	甕	(12.8)	[3.8]	—	CEF	普通	にぶい黄橙	20%	a区 外面に煤付着
5	甕	—	[2.7]	5.8	CEFK	普通	にぶい黄橙	80%	内外面に煤付着
6	小型甕	8.8	8.6	3.6	DEFK	普通	橙	80%	No.1
7	ミニチュア	(4.9)	2.4	(3.6)	EFH	普通	橙	70%	c区

第2号住居跡 (第7図)



第7図 第2号住居跡

E-7グリッドで検出された。大半を攪乱により壊されており、埋土が全く残っていなかったが、炉跡と貼り床の一部が残存していたことから、住居跡と認定した。攪乱の外側に貼り床と考えられる部分が検出できなかったことから、4 m弱の小型の住居跡と考えられる。検出した範囲は、南北2.60 m、東西1.19 mで、壁溝や柱穴は確認できなかった。主軸方位はN-45°-Wであった。

炉跡は、地床炉で、攪乱により南半部を壊されていた。検出した範囲は、南北0.33 m、東西0.17 m、深さが0.02 mで、底面がやや赤く被熱していた。

遺物は、古式土師器が微量出土したが、図示できるものがなかった。

2. 掘立柱建物跡

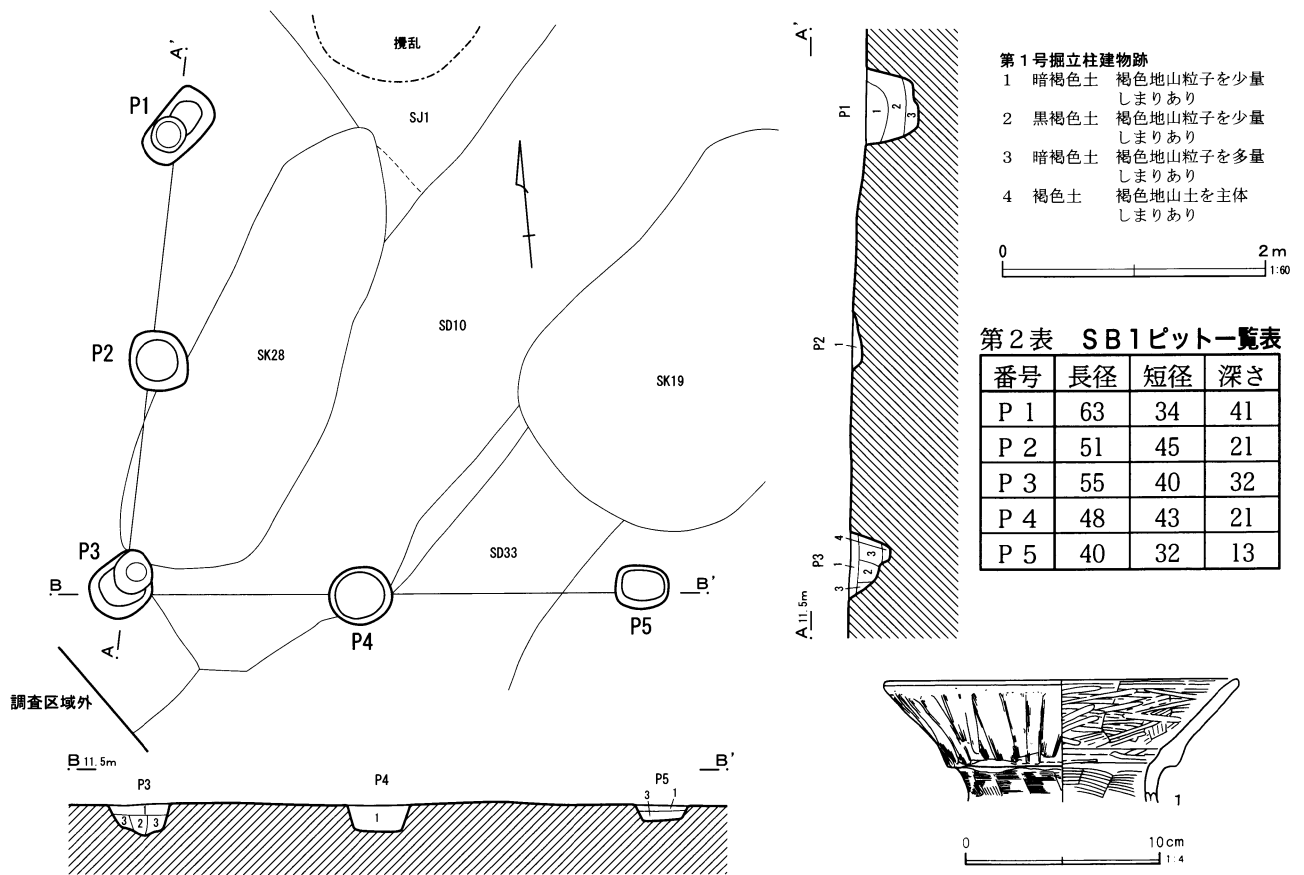
第1号掘立柱建物跡 (第8図)

D-6グリッドで検出された。第1号住居跡、第25・28号土壇、第10・33号溝跡と重複していた。新旧関係は、本遺構の方が重複する全ての遺構よりも新しい。P1の東側にも柱穴を1本検出したが、他の遺構を精査した際に、一緒に掘り下げてしまったことから図化できなかった。そのため、図面では5本しか柱穴がないが、計6本を確認している。北東部の2本については、遺構の重複が著しく、柱穴を確認することができなかった。

規模は、桁行2間×梁行2間で、桁行3.35m、梁行が3.92mの、ほぼ方形を呈していた。主軸方位はN-12°-Eであった。各柱穴の計測値は、第2表に記した。

土層断面では柱穴の痕跡を確認できなかったが、完掘した段階でP1・3の底面に痕跡を確認することができた。平面形態は、円形または楕円形をしていた。各柱穴間の距離は、P1とP2間が1.63m、P2とP3間が1.63m、P3とP4間が1.72m、P4とP5間が2.22mと、それほどばらつきが認められなかった。

遺物は、P1・3・4から古式土師器が少量出土している。遺物が出土した層位については2層からのものが多かった。P1からは1の壺口縁部のほかに、台付甕の胴部片などが出土している。遺物量が少ないため帰属時期を明確にすることが難しいが、本遺跡では他の時期の遺構・遺物が皆無に等しいことから、古墳時代前期と考えてよいと思われる。



第8図 第1号掘立柱建物跡・出土遺物

第3表 第1号掘立柱建物跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	壺	(18.0)	[5.8]	—	FG	良好	にぶい赤褐	20%	P 1

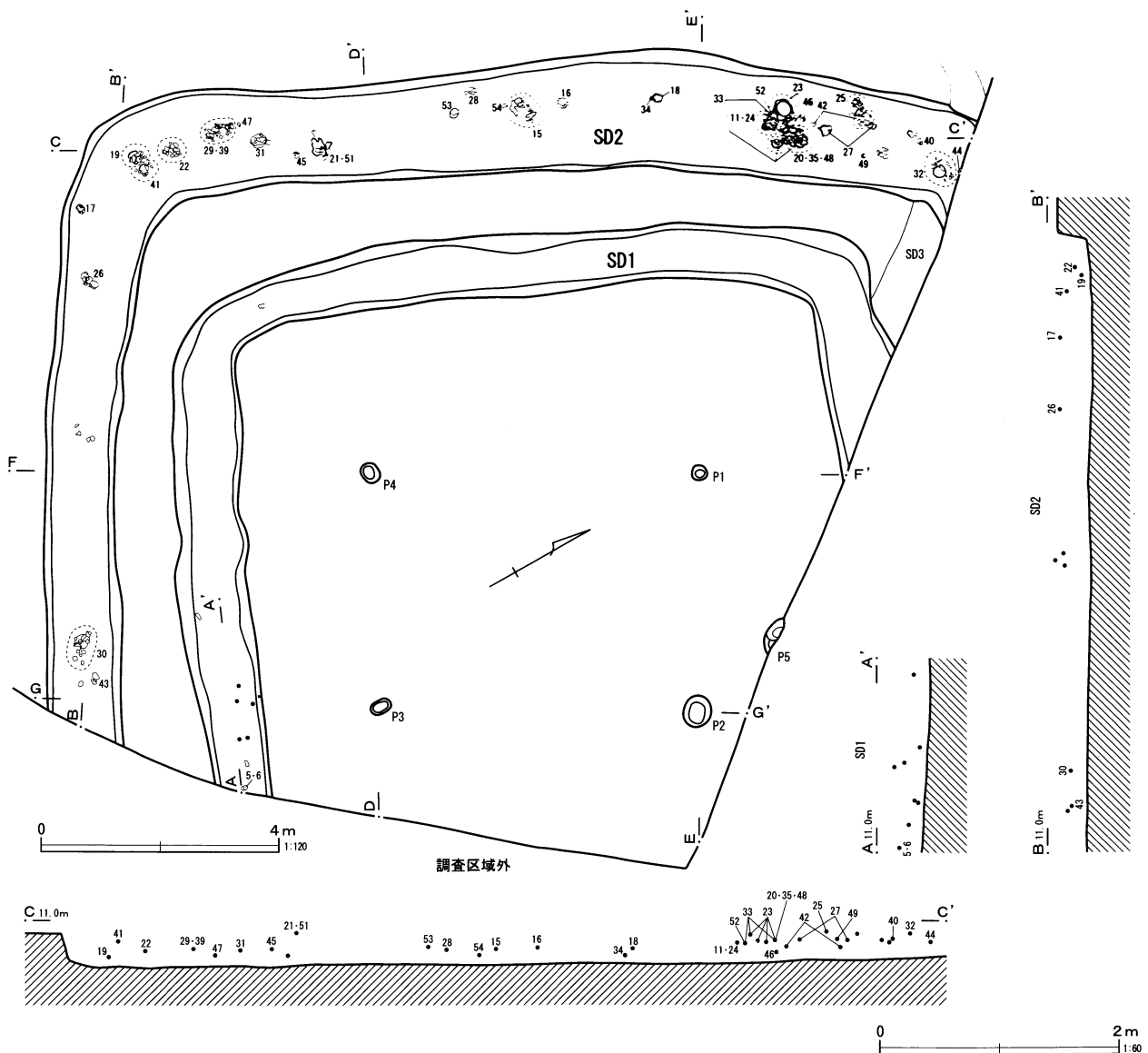
3. 周溝

本遺跡では、一辺が10 m前後の方形に巡る遺構が5基検出された。調査区が狭小であったため、部分的な検出にとどまり、土壌や単独の溝跡として調査しているものもあるので、第1次調査分を含めると同様の遺構が10基以上は構築されていたと推測できる。周溝同士は、近接して構築されていたが、重複するものはなかった。第1号周溝だけ主軸方位がずれていたが、第2～5号周溝については整然と規則的に配置された様相が伺える。規模は、最小のものが第4号周溝で一辺10.8 m、最大が第3号周溝で17.3 mであった。

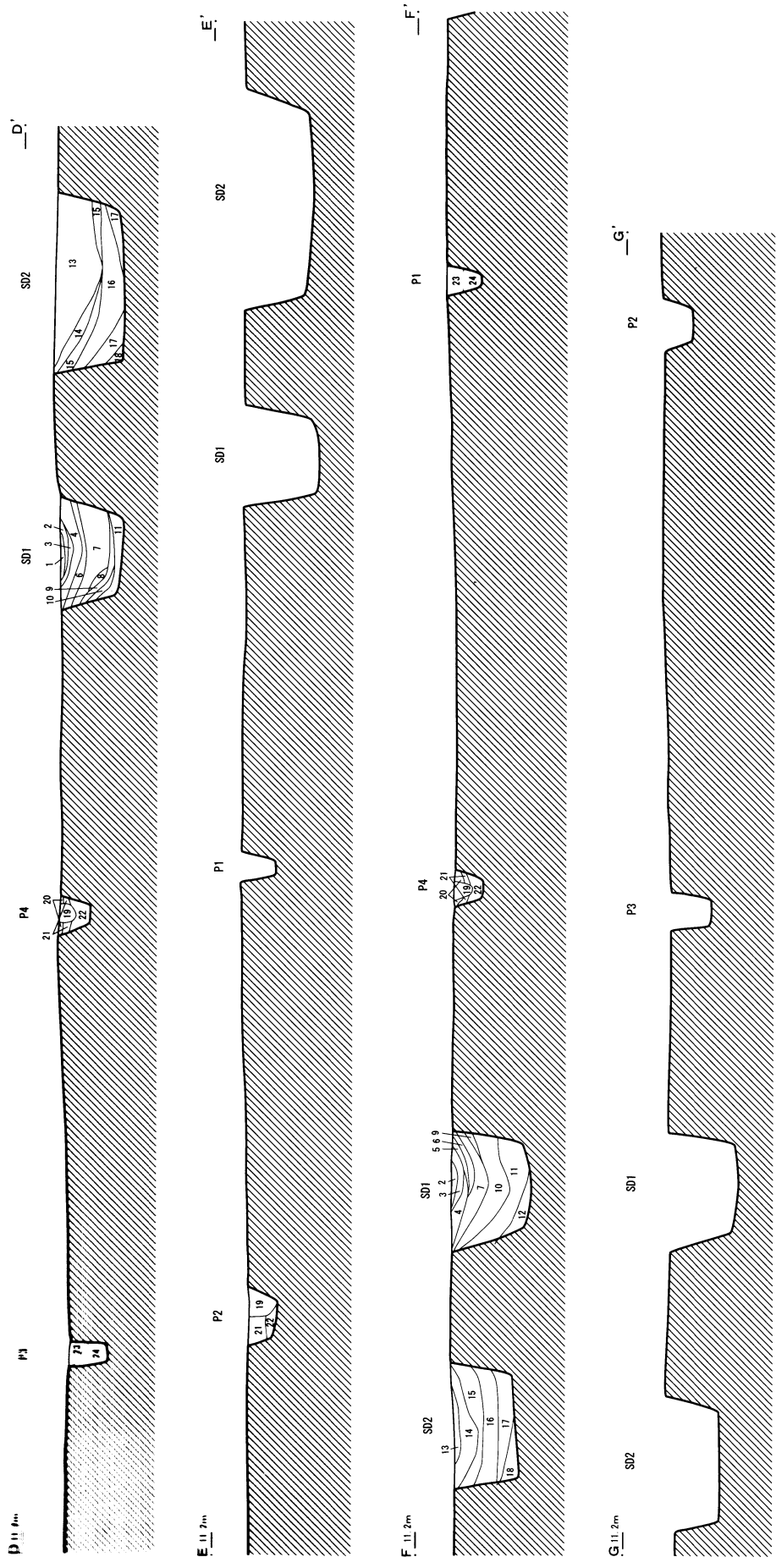
第1号周溝 (第9・10図)

B・C・D-3・4グリッドにかけて検出された。北と東側は調査区域外に延びていたため、全体を調査することができなかった。第3号溝跡と重複していたが、新旧関係は不明である。

本遺構は、第1号溝跡を取り囲むように第2号溝跡が構築されていた。第1号溝跡と第2号溝跡は直接切り合っていなかったため、遺構同士の新旧関係を判別することができなかったが、埋土の堆積状況と出土遺物の量や出方などから、第2号溝跡の方が新しいと考えられた。そのことから、本遺構は第1号溝跡から第2号溝跡へ拡張したものと考えられる。

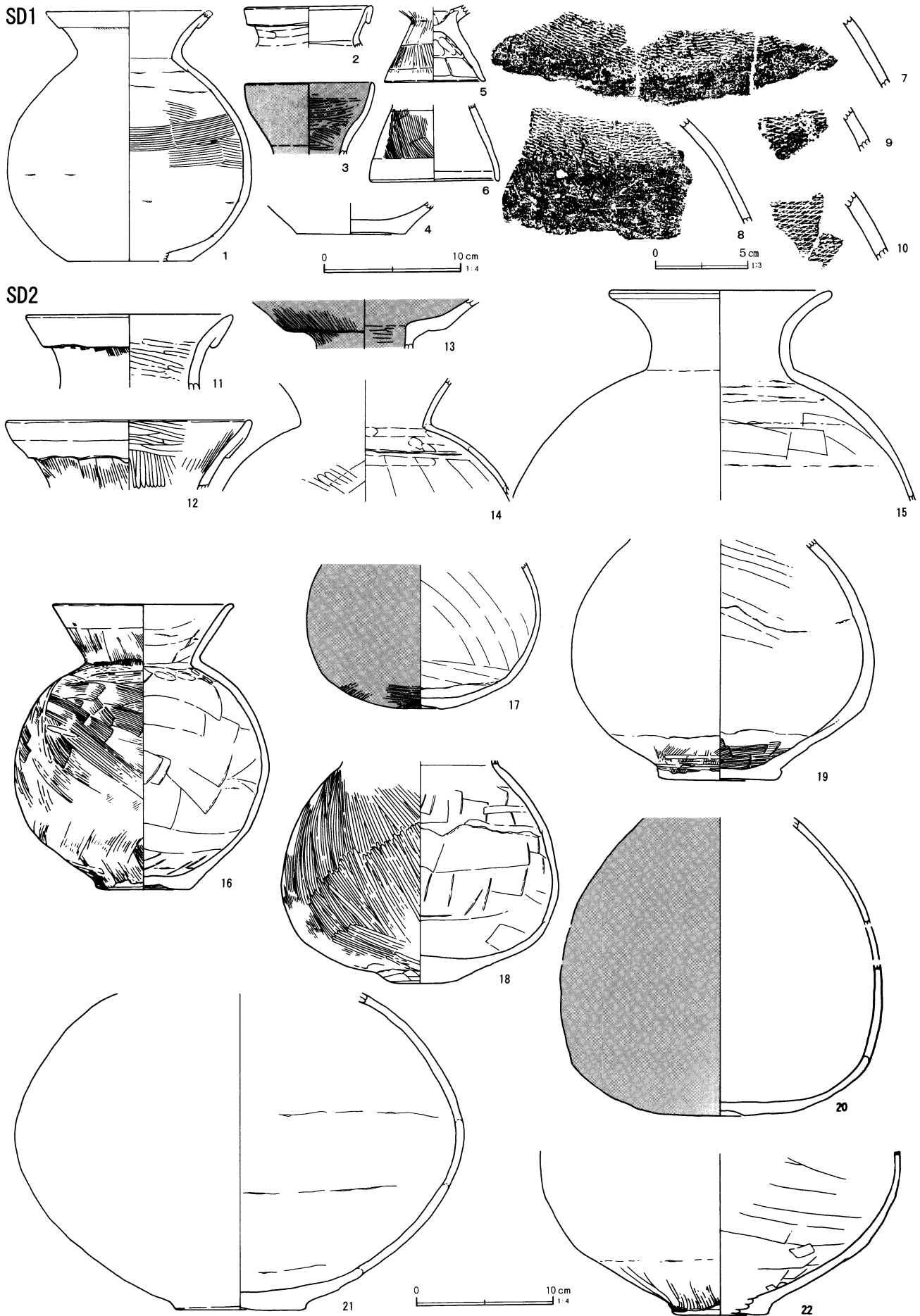


第9図 第1号周溝 (1)

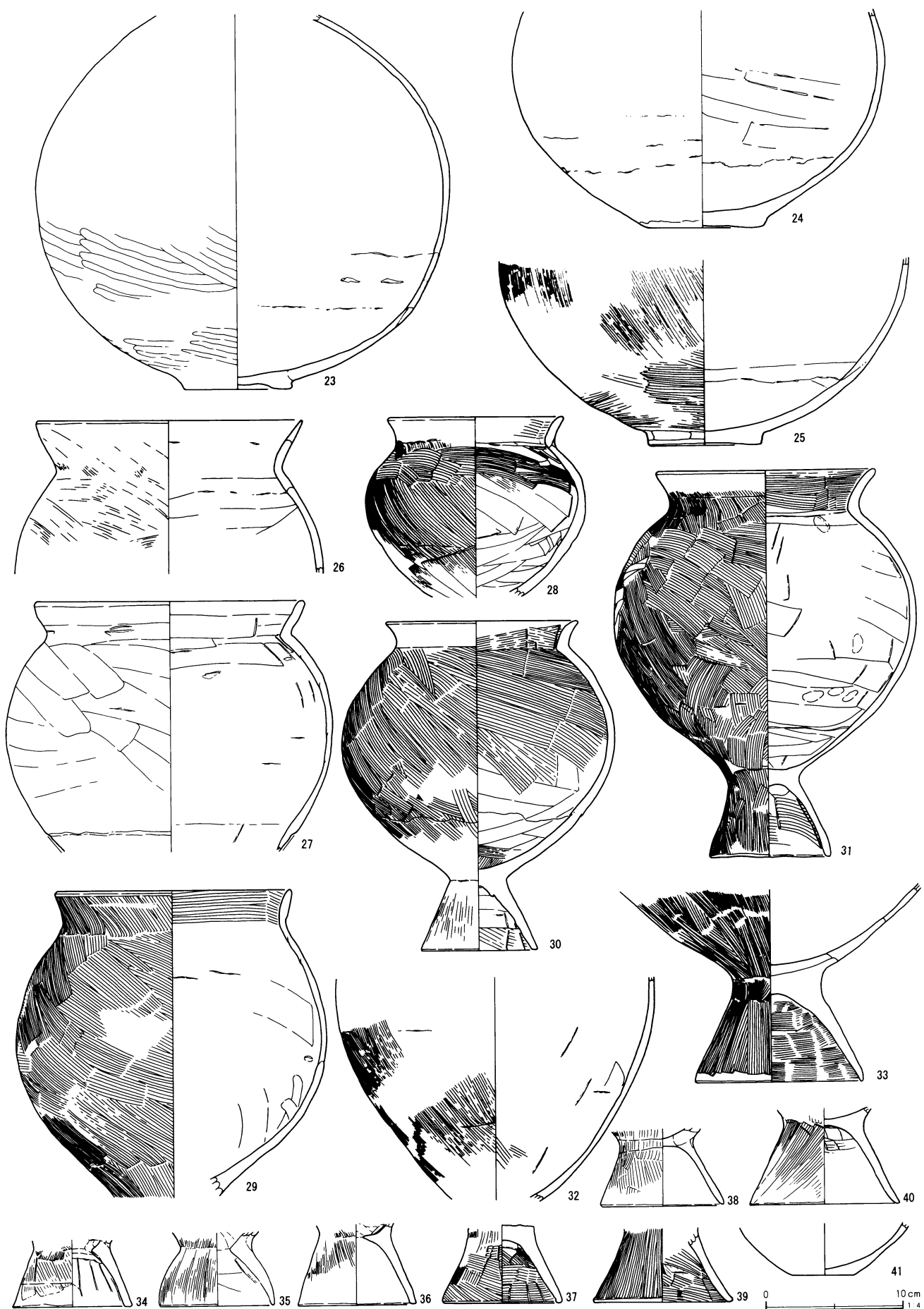


- 第1号周溝**
- | | | | | | | | | | |
|----------|--------|-----------|------------|---|---------------|---------|------|-----------|------------|
| 1 褐色土 | 褐色土を主体 | 黒褐色土粒子を少量 | しまりあり(SD1) | 灰白色地山ブロック(φ0.5~1cm)・灰白色地山粒(φ<small>0.5</small>~1cm) | 少量 | 19 黒色土 | 黒褐色土 | 褐色地山粒子を少量 | しまりあり(Pit) |
| 2 黒褐色土 | 褐色土を主体 | 黒褐色土粒子を少量 | しまりあり(SD1) | 灰白色地山粒子を極微量 | しまり・粘性あり(SD1) | 20 褐色土 | 褐色土 | 褐色地山粒子を少量 | しまり強い(Pit) |
| 3 褐色土 | 褐色土を主体 | 黒褐色土粒子を少量 | 焼土粒子を極微量 | しまり・粘性あり(SD1) | 褐色地山粒子を少量 | 21 暗褐色土 | 暗褐色土 | 褐色地山粒子を少量 | しまり強い(Pit) |
| 4 暗褐色土 | 褐色土を主体 | 黒褐色土粒子を少量 | 焼土粒子を極微量 | しまり・粘性あり(SD1) | 褐色地山粒子を少量 | 22 褐色土 | 褐色土 | 褐色地山粒子を少量 | しまり強い(Pit) |
| 5 灰白色粘土 | 褐色土を主体 | 黒褐色土粒子を少量 | 焼土粒子を極微量 | しまり・粘性あり(SD1) | 褐色地山粒子を少量 | 23 褐色土 | 褐色土 | 褐色地山粒子を少量 | しまり強い(Pit) |
| 6 暗褐色土 | 褐色土を主体 | 黒褐色土粒子を少量 | 焼土粒子を極微量 | しまり・粘性あり(SD1) | 褐色地山粒子を少量 | 24 黒褐色土 | 黒褐色土 | 褐色地山粒子を少量 | しまり強い(Pit) |
| 7 黒褐色土 | 褐色土を主体 | 黒褐色土粒子を少量 | 焼土粒子を極微量 | しまり・粘性あり(SD1) | 褐色地山粒子を少量 | | | | |
| 8 灰白色粘土 | 褐色土を主体 | 黒褐色土粒子を少量 | 焼土粒子を極微量 | しまり・粘性あり(SD1) | 褐色地山粒子を少量 | | | | |
| 9 黒色粘土 | 褐色土を主体 | 黒褐色土粒子を少量 | 焼土粒子を極微量 | しまり・粘性あり(SD1) | 褐色地山粒子を少量 | | | | |
| 10 灰白色粘土 | 褐色土を主体 | 黒褐色土粒子を少量 | 焼土粒子を極微量 | しまり・粘性あり(SD1) | 褐色地山粒子を少量 | | | | |
| 11 暗灰色粘土 | 褐色土を主体 | 黒褐色土粒子を少量 | 焼土粒子を極微量 | しまり・粘性あり(SD1) | 褐色地山粒子を少量 | | | | |
| 12 黒色粘土 | 褐色土を主体 | 黒褐色土粒子を少量 | 焼土粒子を極微量 | しまり・粘性あり(SD1) | 褐色地山粒子を少量 | | | | |
| 13 黒褐色土 | 褐色土を主体 | 黒褐色土粒子を少量 | 焼土粒子を極微量 | しまり・粘性あり(SD1) | 褐色地山粒子を少量 | | | | |
| 14 暗灰色粘土 | 褐色土を主体 | 黒褐色土粒子を少量 | 焼土粒子を極微量 | しまり・粘性あり(SD1) | 褐色地山粒子を少量 | | | | |
| 15 灰白色粘土 | 褐色土を主体 | 黒褐色土粒子を少量 | 焼土粒子を極微量 | しまり・粘性あり(SD1) | 褐色地山粒子を少量 | | | | |
| 16 暗灰色粘土 | 褐色土を主体 | 黒褐色土粒子を少量 | 焼土粒子を極微量 | しまり・粘性あり(SD1) | 褐色地山粒子を少量 | | | | |
| 17 灰白色粘土 | 褐色土を主体 | 黒褐色土粒子を少量 | 焼土粒子を極微量 | しまり・粘性あり(SD1) | 褐色地山粒子を少量 | | | | |

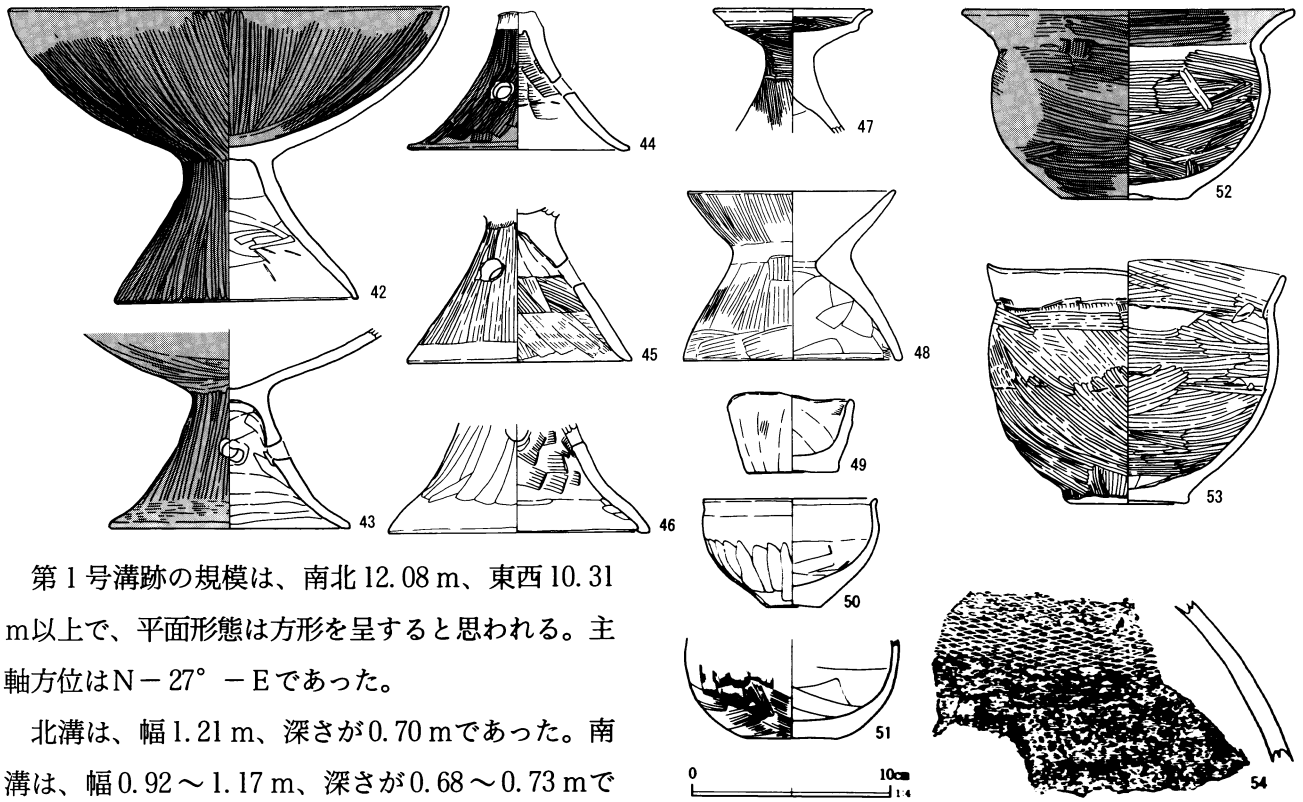
第10図 第1号周溝(2)



第11图 第1号周沟出土遗物(1)



第12图 第1号周溝出土遺物(2)

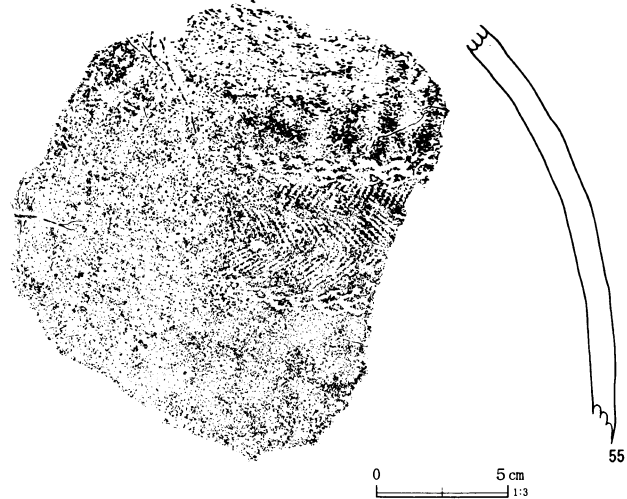


第1号溝跡の規模は、南北12.08 m、東西10.31 m以上で、平面形態は方形を呈すると思われる。主軸方位はN-27°-Eであった。

北溝は、幅1.21 m、深さが0.70 mであった。南溝は、幅0.92~1.17 m、深さが0.68~0.73 mであった。西溝は、幅0.89~1.05 m、深さが0.66~0.70 mで、底面は各溝ともほぼ同じ深さであった。溝の内側の平坦部は、南北10.13 m、東西9.30 m以上であった。

第2号溝跡の規模は、南北15.12 m以上、東西13.31 m以上であった。南溝は、幅1.13~1.37 m、深さが0.50~0.62 mで、底面は東から西へ緩やかに傾斜していた。西溝は、幅1.58~2.03 m、深さが0.49~0.66 mで、北側の底面が若干浅めで、外辺の中央部は僅かに膨れていた。溝の内側の平坦部は、南北13.03 m、東西が11.40 m以上であった。

平坦部には、5本のピットが検出された。平坦部に規則的に配置されていることから、P1~4は、周溝に伴うものと考えてよいと思われる。北壁際に検出されたP5は、本遺構に伴うかどうかは不明である。各ピットの大きさは、P1が27×26×32 cm、P2が52×45×27 cm、P3が35×23×36 cm、P4が36×27×24 cm、P5が63×(21)×23 cmであった。P2とP4の土層断面では、柱穴の痕跡が確認できたが、P1・3では確認できなかった。ピットの心心距離は、南北が約5.5 m、東西が約4 mで、



第13図 第1号周溝出土遺物(3)

南北に長い長方形を呈する。実際に建物跡が建てられていたかを、調査で判断することはできなかった。

第1号溝跡の埋土は、人為的に埋め戻された状況をしめしており、このことから本遺構が拡張したものであると判断した。

遺物は、第1号溝跡からは少量の、第2号溝跡からは多量の古式土師器片が出土している。特に第2号溝跡の西溝に集中しており、上層から中層にかけて多量に土器が廃棄されていた。出土遺物は、壺や甕などを主体にさまざまな器形の土器がみられる。

第4表 第1号周溝出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	壺	—	[17.9]	(9.0)	CI	普通	灰白	45%	SD 1 赤彩? 外面は摩滅が著しい
2	壺	(9.0)	[2.9]	—	CEGH	普通	にぶい褐	25%	SD 1
3	壺	(9.2)	[5.2]	—	FHI	普通	にぶい黄橙	25%	SD 1 内外面に赤彩 摩滅が著しい
4	壺	—	[2.3]	(7.8)	CEG	普通	浅黄橙	35%	SD 1 摩滅が著しい
5	台付甕	—	[5.4]	7.2	CFHI	普通	にぶい橙	95%	SD 1 No. 2 外面に煤附着
6	台付甕	—	[5.5]	(9.1)	CGHI	普通	にぶい黄褐	15%	SD 1 No. 2 内外面に煤附着
7	壺	—	—	—	EFHI	普通	にぶい橙	—	SD 1 網目状燃糸文 外面下半に赤彩
8	壺	—	—	—	CEFI	普通	明灰黄	—	SD 1 網目状燃糸文 外面下半に赤彩
9	壺	—	—	—	EFH	普通	黒褐	—	SD 1 網目状燃糸文 外面下半に赤彩
10	壺	—	—	—	FH	普通	黒褐	—	SD 1 網目状燃糸文
11	壺	(14.8)	[5.3]	—	FG	普通	橙	35%	SD 2 No. 30
12	壺	(17.4)	[5.1]	—	CEFK	普通	にぶい黄橙	20%	SD 2
13	壺	—	[3.6]	—	CEFH	普通	にぶい赤褐	15%	SD 2 内外面に赤彩
14	壺	—	[8.8]	—	CFIK	普通	にぶい黄橙	30%	SD 2 外面に黒斑 摩滅が著しい
15	壺	16.0	[15.0]	—	FK	普通	橙	70%	SD 2 No. 27 口縁部外面に黒斑 摩滅が著しい
16	壺	12.9	20.5	6.8	ACEGHK	普通	にぶい黄橙	75%	SD 2 No. 25 胴部外面に黒斑 ドーナツ状底部
17	壺	—	[10.4]	2.7	EFGIK	普通	にぶい黄橙	50%	SD 2 No. 15 外面に赤彩 摩滅が著しい
18	壺	—	[16.0]	5.0	CEFGH	普通	にぶい黄橙	50%	SD 2 No. 29 胴部外面に黒斑
19	壺	—	[17.3]	8.8	AEFH	普通	にぶい黄橙	75%	SD 2 No. 17 摩滅が著しい
20	壺	—	[21.5]	3.2	GH	普通	淡黄	45%	SD 2 No. 35 外面に赤彩 底部は上げ底
21	壺	—	[22.7]	(9.4)	DEFK	普通	黄橙	30%	SD 2 No. 22 胴部下半外面に黒斑
22	壺	—	[11.7]	(7.0)	AEFGK	普通	にぶい褐	20%	SD 2 No. 18 摩滅が著しい
23	壺	—	[26.9]	7.8	DEFIK	普通	黄橙	90%	SD 2 No. 31・32・34・35 胴部下半外面に黒斑
24	壺	—	[15.6]	(8.6)	FG	普通	にぶい褐	30%	SD 2 No. 30 摩滅が著しい
25	壺	—	[13.3]	8.1	AEK	普通	にぶい橙	50%	SD 2 No. 39 外面に黒斑 器面の風化が進み不明瞭
26	甕	(19.2)	[11.0]	—	DFK	普通	橙	30%	SD 2 No. 7 摩滅が著しい
27	甕	19.3	[18.0]	—	AEFG	普通	にぶい褐	50%	SD 2 No. 38・41 内外面に煤附着
28	甕	(12.5)	[12.9]	—	CEFHI	良好	にぶい褐	40%	SD 2 No. 23 内外面に煤附着
29	台付甕	16.6	[22.0]	—	EF	良好	灰褐	75%	SD 2 No. 19 内外面に煤附着
30	台付甕	13.8	23.6	8.3	EFGI	良好	暗灰黄	90%	SD 2 No. 3 胴部内外面に煤附着
31	台付甕	15.6	27.8	8.7	CFHJK	普通	にぶい黄橙	80%	SD 2 No. 9 胴部内外面に煤附着
32	台付甕	—	[16.0]	—	EFGI	普通	灰黄褐	50%	SD 2 No. 13 外面に煤附着 摩滅が著しい
33	台付甕	—	[14.2]	12.0	AEG	普通	褐	50%	SD 2 No. 33・34・35 胴部外面に煤附着
34	台付甕	—	[4.8]	(8.5)	AEF	普通	明黄褐	70%	SD 2 No. 28 外面に煤附着
35	台付甕	—	[5.3]	8.2	CEF	普通	橙	90%	SD 2 No. 35
36	台付甕	—	[5.8]	8.4	FHK	普通	橙	85%	SD 2 摩滅が著しい
37	台付甕	—	[5.6]	8.5	CEGHK	普通	橙	95%	SD 2
38	台付甕	—	[5.6]	8.7	EHK	普通	明黄褐	80%	SD 2 胴部内面に煤附着
39	台付甕	—	[5.3]	10.0	EFGH	普通	明赤褐	95%	SD 2 No. 19
40	台付甕	—	[7.0]	10.7	EFGK	普通	橙	100%	SD 2 No. 14 摩滅が著しい
41	甕	—	[3.7]	4.5	EFHK	普通	にぶい黄橙	80%	SD 2 No. 16 摩滅が著しい
42	高坏	22.1	15.0	12.3	AFHK	普通	にぶい橙	85%	SD 2 No. 37・40 赤彩 坏部・脚部外面に黒斑
43	高坏	—	[10.2]	(12.1)	CFHI	普通	にぶい黄橙	65%	SD 2 No. 1 外面に赤彩・煤附着 透孔4
44	高坏	—	[7.0]	11.4	CEFGHK	普通	橙	95%	SD 2 No. 12 外面に赤彩 透孔3
45	高坏	—	[7.8]	11.3	EFGHI	普通	灰黄褐	100%	SD 2 No. 8 透孔3 外面に煤附着
46	高坏	—	[5.5]	12.8	AGH	普通	にぶい黄橙	50%	SD 2 No. 36 透孔4?
47	器台	(8.0)	[6.2]	—	CEGH	普通	にぶい黄橙	50%	SD 2 No. 20
48	器台	(10.4)	8.6	(11.0)	EFHK	普通	にぶい黄橙	50%	SD 2 No. 35 外面に煤附着
49	鉢	(6.4)	4.1	4.6	EFHK	普通	橙	75%	SD 2 No. 42 外面に黒斑
50	鉢	(8.8)	5.4	2.7	CEGHK	普通	灰黄	60%	SD 2 内面に黒斑
51	鉢	—	[5.1]	4.6	CFH	普通	橙	75%	SD 2 No. 22
52	鉢	(16.7)	9.6	6.4	ABEFGH	良好	にぶい黄橙	80%	SD 2 No. 33 内外面に赤彩 底部はドーナツ状
53	鉢	14.9	12.3	6.3	ADEFG	普通	にぶい橙	95%	SD 2 No. 24 外面に黒斑
54	壺	—	—	—	EI	普通	橙	—	SD 2 No. 26 網目状燃糸文 胴部下半外面に赤彩
55	壺	—	—	—	CEFK	普通	淡黄	—	SD 2 結節文の間に羽状縄文 外面は摩滅

第2号周溝 (第14図)

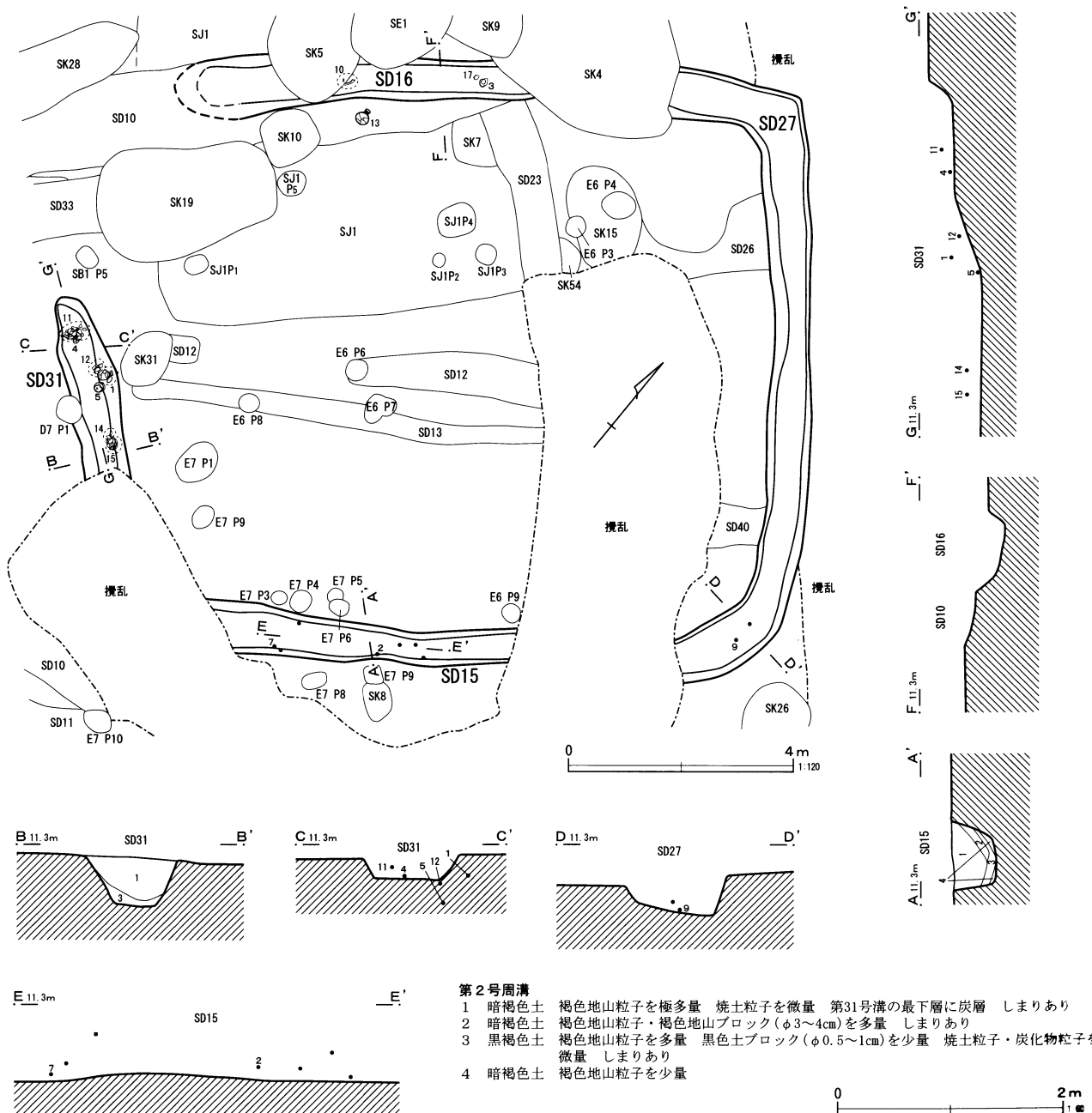
D-6・7、E-5~7、F-6グリッドにかけて検出された。確認時において、第15・16・27・31号溝跡とそれぞれ別名称を付して調査を実施したが、溝跡の走行方向や埋土等がほぼ一致していたことから、同一遺構として扱うことにした。第15号と第31号溝跡は、南西コーナー部にある攪乱により分断されているため、別遺構の可能性も考えられる。

本遺構は、南と東側が攪乱で壊され、また遺構土の重複も著しいことから、遺存状態は悪かった。

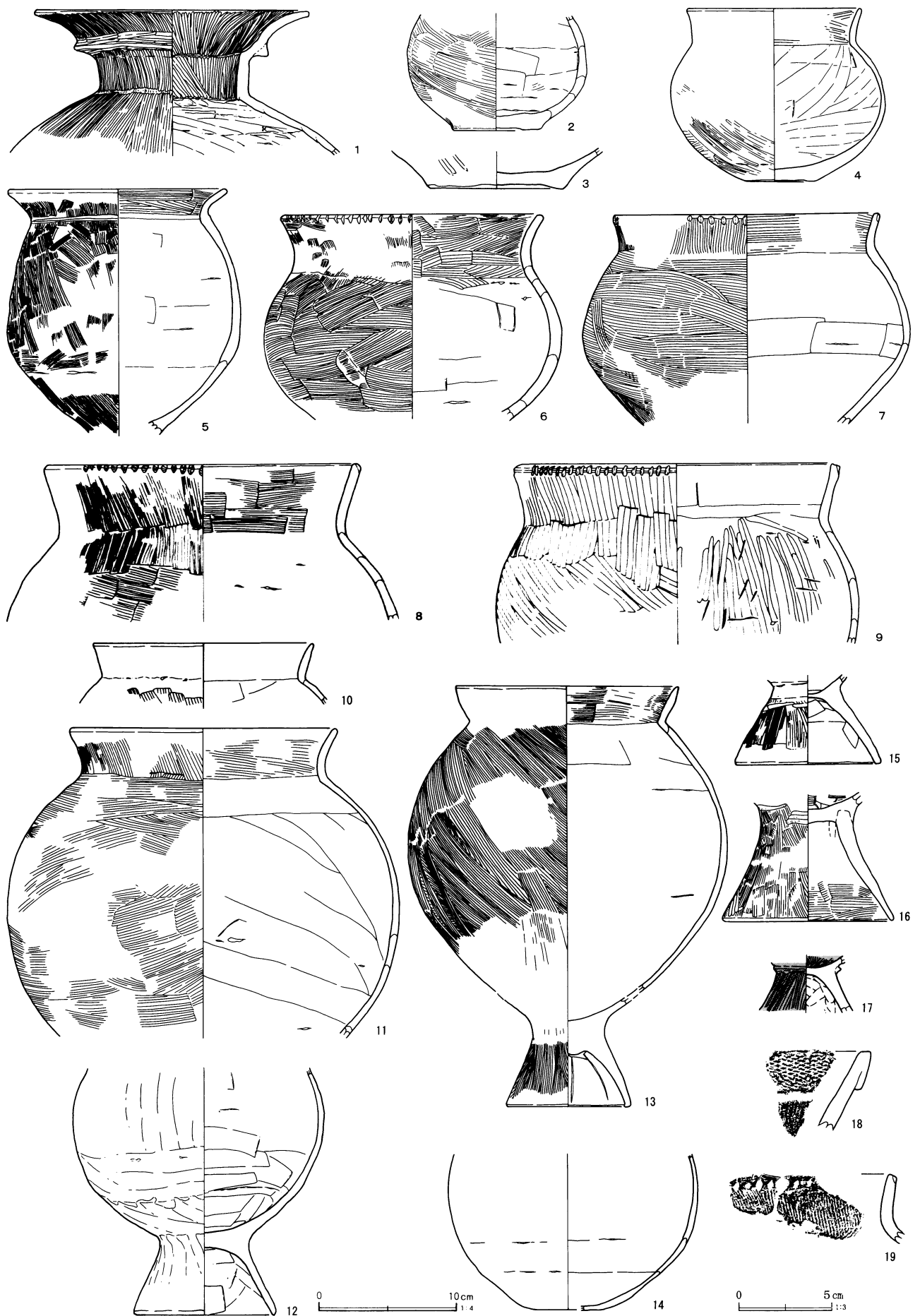
新旧関係は、第1号住居跡、第10号溝跡より新しく、第1号井戸跡、第4・5号土壌、第26号溝跡よりも古かった。

規模は、南北10.86m、東西13.19mであった。平面形態は方形を呈し、北西部に幅約4mの開口部をもつ。主軸方位はN-51°-Eであった。

北溝は、幅0.74~1.09m、深さが0.45~0.54mで、西側の立ち上がり部は第10号溝跡と重複していたため明確にできなかった。南溝は、幅0.59~0.92m、深さが0.38~0.47mで、底面はほぼ平坦であった。



第14図 第2号周溝



第15图 第2号周沟出土遗物

第5表 第2号周溝出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	壺	(19.5)	[10.5]	—	GHK	普通	橙	75%	SD31No.3
2	壺	—	[8.3]	5.4	FI	普通	浅黄	95%	SD15No.3 外面に黒斑 底部はドーナツ状
3	壺	—	[2.7]	10.2	CEFI	普通	浅黄橙	75%	SD16No.1
4	甕	12.4	12.4	5.0	ACEGK	普通	にぶい橙	95%	SD31No.1・2 外面に黒斑 底部はドーナツ状
5	台付甕	15.6	[17.7]	—	AEG	普通	褐	85%	SD31No.7 内外面に煤付着
6	甕	(18.3)	[14.8]	—	FHK	良好	灰黄褐	30%	SD15 外面に煤付着
7	甕	(19.0)	[15.0]	—	FH	良好	浅黄橙	35%	SD15No.2 外面に煤付着
8	甕	(21.6)	[11.3]	—	FI	普通	にぶい橙	20%	SD15
9	甕	22.3	[13.0]	—	CEF	普通	淡黄	65%	SD27No.1・2 外面に煤付着
10	甕	(15.6)	[4.3]	—	AEFGH	普通	にぶい黄褐	60%	SK 5 No.33 外面に煤付着
11	甕	(19.0)	[22.2]	—	CFK	普通	橙	35%	SD31No.1 胴部外面に黒斑
12	台付甕	—	[17.8]	10.0	ACGHK	普通	にぶい黄橙	60%	SD31No.4 外面に煤付着 器面が剥落
13	台付甕	(16.0)	[30.3]	9.0	AEFHK	良好	橙	45%	SD16No.2 外面に煤付着
14	甕	—	[11.2]	4.8	DEFGK	普通	橙	70%	SD31No.5 外面に煤付着 摩滅が著しい
15	台付甕	—	[6.4]	10.3	ACGK	普通	にぶい黄橙	90%	SD31No.6 外面に煤付着
16	台付甕	—	[9.2]	12.0	EFHK	普通	にぶい黄橙	75%	SD27 外面・胴部内面に煤付着
17	高坏	—	[4.1]	—	AEFK	良好	暗赤褐	75%	SD16No.1 内外面に赤彩 接合部に突帯
18	壺	—	[4.3]	—	EFI	普通	淡黄	—	SD15 口縁部に網目状燃糸文 外面に赤彩
19	甕	—	[3.8]	—	FH	普通	にぶい黄橙	—	SD27 外面に煤付着

東溝は、幅0.78 mで、深さが0.37～0.47 mで、内と外の深さが一定でない所が多く、外側に向けて傾斜が付けられていた。西溝は、幅0.59～0.84 m、深さが0.17～0.50 mで、先端部が一段高くなっていた。

溝の内側の平坦部は、南北9.48 m、東西11.55 mで、土壌やピットが数基確認されたが、本遺構に伴うかどうかは不明である。

第3号周溝 (第16図)

E・F-7・8グリッドにかけて検出された。調査時は、第11号溝跡、第20号溝跡と別名称を付して発掘を行ったが、溝跡の走行方向や埋土等が一致することから、同一遺構として報告することにした。南側は、調査区域外に延びていた。北側の範囲は、攪乱が全体に及んでおり、遺存状態があまり良くなかった。第5号井戸跡、第12・48号土壌、第10・17・42号溝跡と重複しており、本遺構の方が第5号井戸跡、第12号土壌、第42号溝跡より古い。

規模は、南北6.60 m以上、東西17.26 m、平面形態は不明である。主軸方位はN-36°-Wであった。

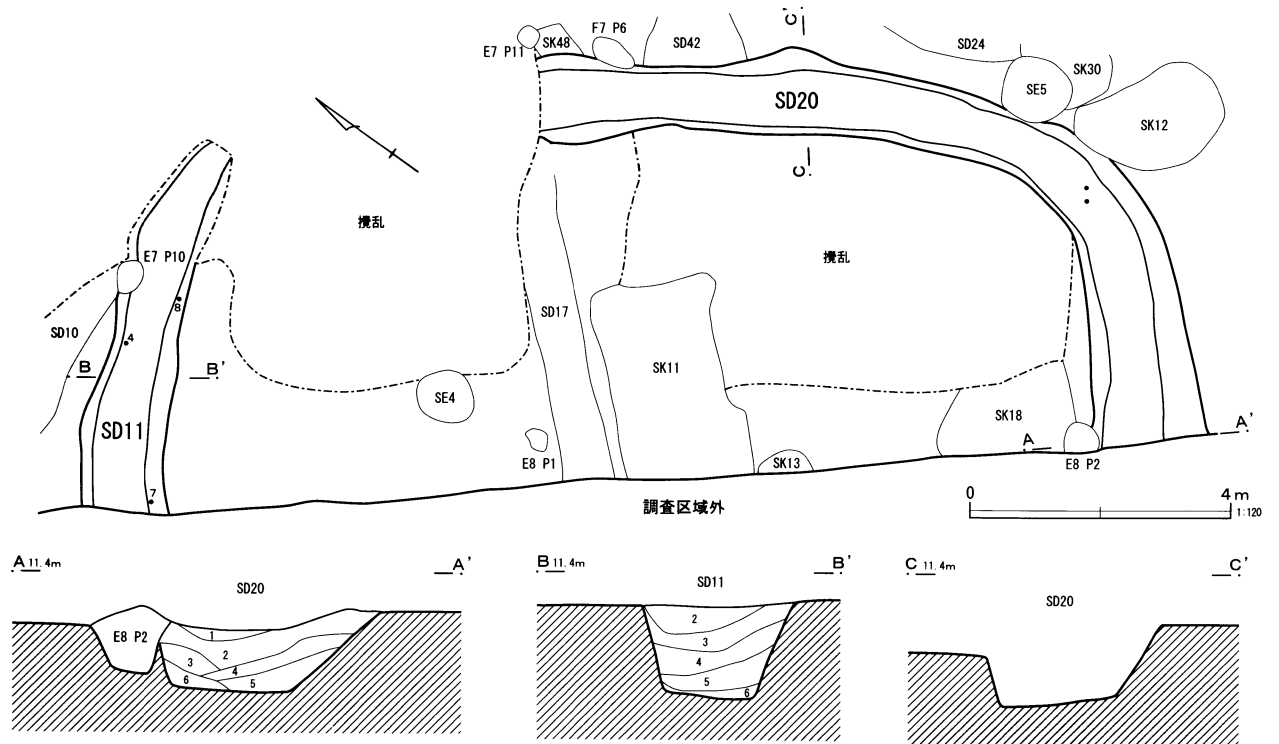
北溝は、幅1.02～1.42 m、深さが0.60～0.66 mで、底面はほぼ平坦であった。東溝は、幅1.38～1.68 mで、深さが0.94 mと北溝に比べ一段深く掘り込まれていた。西溝は、幅0.96～1.23 m、深

遺物は、各溝跡から古式土師器片が多量に出土した。なかでも第31号溝跡では、炭層のやや上層から廃棄された台付甕などがまとまって出土した。土器以外には、第15号溝跡から土玉が1点出土している。本遺構で特筆されることは、甕の出土量が他の器種に比べ際立って多いことである。このことから、本遺構は墓である可能性は低いと思われる。

さが0.65～0.75 mとほぼ平坦であった。

溝の内側の平坦部は、南北5.24 m以上、東西14.16 mで、本遺構に伴うと思われる遺構は確認できなかった。中心部分には埋葬施設を髣髴させるような古墳時代前期の第11号土壌が位置していたが、出土遺物も少なく、本周溝との関係を判断する材料を得ることができなかった。

遺物は、古式土師器片が少量出土している。2・6・11の3点が第20号溝跡からで、それ以外の8点が第11号溝跡からの出土である。1の壺は、複合口縁部外面と口唇部に網目状燃糸文が施文され、無文部に赤彩を施す。10はパレス壺の胴部破片で、4条からなる横線文の間に山形文を巡らしている。山形文部分には、赤彩が施されていたと思われる。他に、第20号溝跡からは、用途不明の板状の加工材が1点出土している。

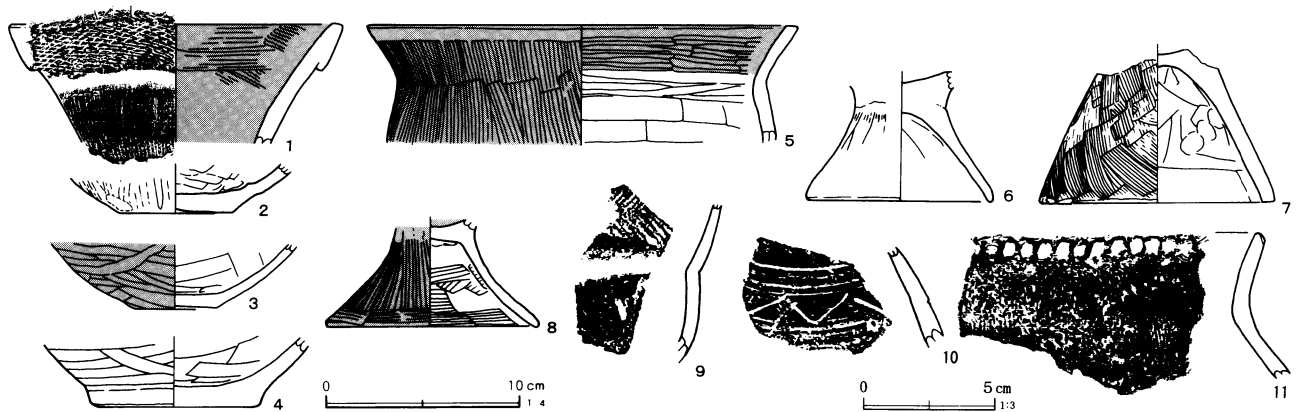


第3号周溝

- 1 黒褐色土 褐色地山粒子を少量 炭化物粒子を微量 最下層に炭層 しまりあり
- 2 黒褐色土 褐色地山粒子を少量 褐色地山ブロック(φ0.5~1cm)・炭化物粒子・焼土粒子を微量 しまりあり
- 3 暗褐色土 褐色地山粒子・褐色地山ブロック(φ2~3cm)を少量 しまりあり
- 4 黒褐色土 褐色地山粒子を少量 炭化物粒子を微量 しまりあり
- 5 暗褐色土 褐色地山粒子・褐色地山ブロック(φ0.5~1cm)を極多量 しまりあり
- 6 黒褐色土 褐色地山粒子を少量 炭化物粒子を微量 しまりあり



第16図 第3号周溝



第17図 第3号周溝出土遺物

第6表 第3号周溝出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	壺	(15.7)	[6.0]	—	EFI	普通	灰白	20%	SD11No.4 頸部外面・口縁部内面に赤彩
2	壺	—	[2.5]	5.7	DEFGH	普通	褐色	80%	SD20
3	壺	—	[3.0]	4.0	CG	良好	赤褐	35%	SD11 外面に赤彩・黒斑
4	壺	—	[3.5]	(9.0)	FK	普通	灰白	25%	SD11No.2
5	甕	(22.0)	[6.0]	—	H	良好	にぶい赤褐	10%	SD11 外面・口縁部内面に赤彩
6	台付甕	—	[6.5]	(9.4)	CEFG	普通	灰白	70%	SD20 摩滅が著しい 11と同一個体か?
7	台付甕	—	[7.7]	12.0	F	普通	にぶい橙	100%	SD11No.1 外面に煤付着
8	高坏	—	[5.5]	10.8	FGI	普通	にぶい赤褐	100%	SD11No.3 外面・坏部内面に赤彩
9	壺	—	—	—	EF	普通	淡黄	—	SD11 口縁部に羽状縄文 胴部外面・内面に赤彩
10	壺	—	—	—	ACEF	普通	淡黄	—	SD11 横線文+山形文(赤彩?)+横線文
11	甕	—	[5.4]	—	FHIK	普通	灰白	—	SD20 外面に煤付着 6と同一個体か?

第4号周溝 (第18図)

F・G-7・8グリッドにかけて検出された。調査時は、第24号、第29号溝跡と別名称を付して発掘を行ったが、溝跡の走行方向や埋土等が一致することから、周溝として報告することにした。北溝と南溝の東側は、攪乱に壊され、調査区域外に延びていたため、全容は不明である。第5号井戸跡、第14・30号土壇、第21 a・30・35・38号溝跡などと重複していた。新旧関係は、第5号井戸跡、第14・30号土壇、第21 a・28・30号溝跡より本遺構の方が古い。

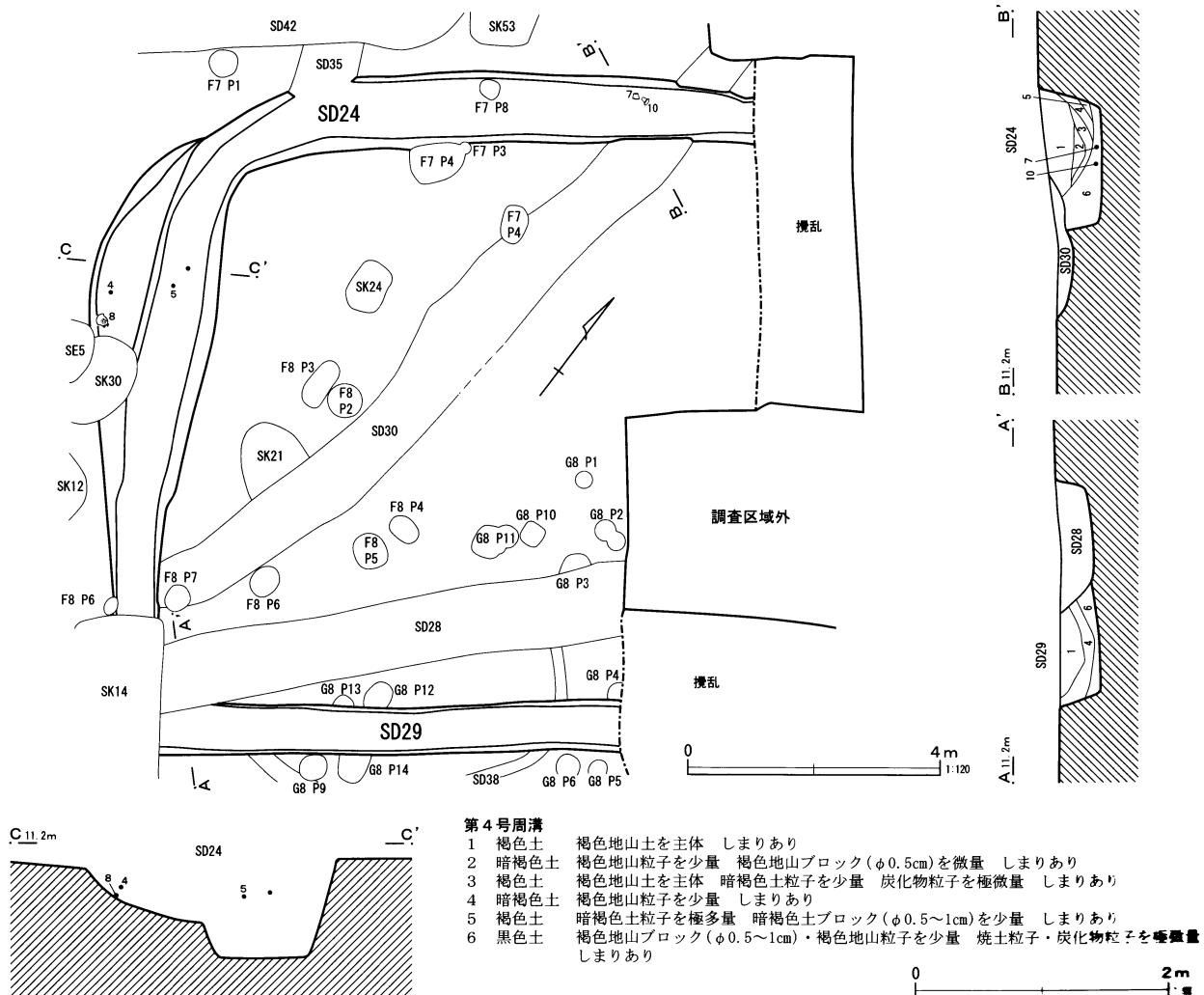
規模は、南北10.76 m、東西10.44 m以上で、平面形態は正方形を呈していた。主軸方位はN-41°-Wであった。

北溝は、幅0.90~1.14 m、深さが0.32~0.74 mで、東から西に向けて大きく傾斜していた。南溝

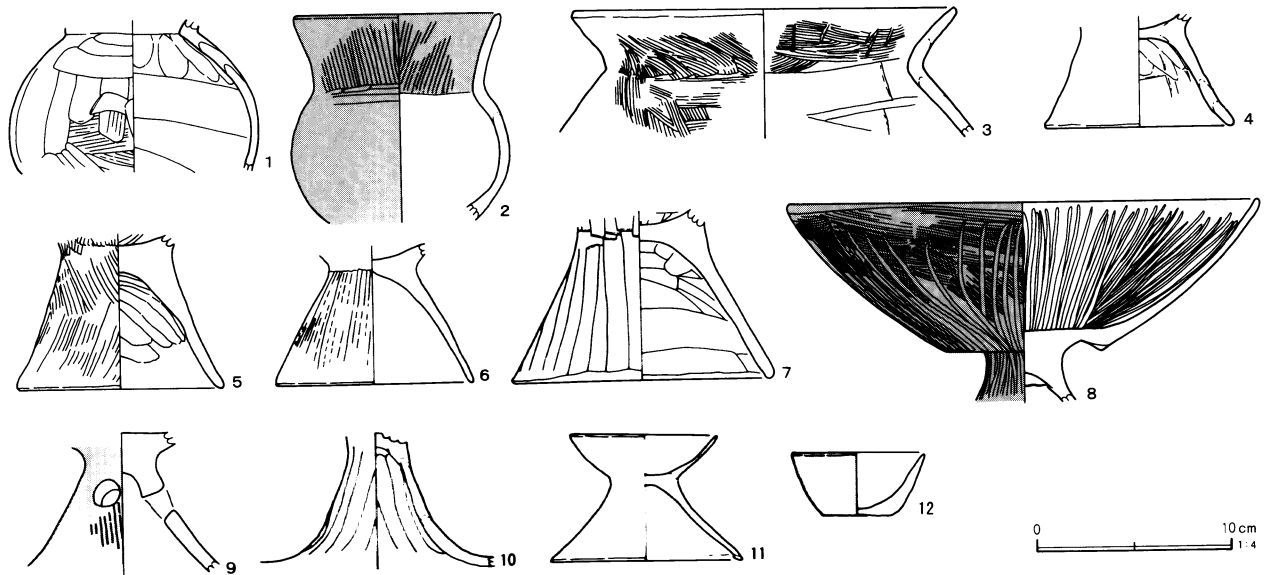
は、幅0.71 m、深さが0.27~0.35 mと、直線的で、底面はほぼ平坦であった。西溝は、北西コーナー部分が大きく膨らみ、テラス状の浅い段をもっていた。幅0.69~2.00 m、深さが0.69~0.77 mであった。

溝の内側の平坦部は、南北8.91 m、東西8.96 m以上で、本遺構に確実に伴う遺構は確認できなかった。平坦部に径30~50 cmの小ピットが多数検出されており、本遺構が建物跡と仮定すると、それらの一部は柱穴である可能性も考えられる。

遺物は、古式土師器が埋土の中層から下層にかけて少量出土している。6の台付甕と11の器台の2点が第29号溝跡で、それ以外の10点は第24号溝跡からの出土である。8は、坏部が大きく開く大型の高坏で、外面全体に赤彩が施される。11の器台は、受部と脚部間の貫通孔や透穴が開けられていない。



第18図 第4号周溝



第19図 第4号周溝出土遺物

第7表 第4号周溝出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	壺	—	[7.6]	—	A EFG	普通	にぶい黄橙	70%	SD24
2	壺	(10.2)	[10.5]	—	EGH	普通	明赤褐	35%	SD24 外面・口縁部内面に赤彩
3	甕	(19.2)	[6.5]	—	AEG	普通	橙	15%	SD24 内外面に煤付着
4	台付甕	—	[5.7]	9.5	EH	普通	にぶい黄橙	95%	SD24No.2 脚台部内面に煤付着
5	台付甕	—	[7.8]	10.5	EGI	普通	明赤褐	70%	SD24No.3 胴部内面に煤付着
6	台付甕	—	[7.0]	(9.8)	BEFG	普通	淡橙	55%	SD29 摩滅が著しい
7	台付甕	—	[8.6]	13.3	GH	普通	明褐色	95%	SD24No.5 胴部内面に煤付着
8	高坏	(23.8)	[10.1]	—	EF	良好	にぶい橙	70%	SD24No.1 外面に赤彩
9	高坏	—	[7.2]	—	CEGH	普通	橙	85%	SD24 外面に赤彩 透孔3 摩滅が著しい
10	高坏	—	[6.9]	—	GH	普通	赤褐	80%	SD24No.6 外面に黒斑
11	器台	7.4	6.4	(9.6)	EFG	普通	橙	40%	SD29 摩滅が著しい
12	ミニチュア	(6.7)	3.1	(3.5)	EGH	普通	橙	50%	SD24 外面に赤彩 内面の赤彩は摩滅のため不明

第5号周溝 (第20図)

G・H-8・9グリッドにかけて検出された。南と東側は調査区域外に延びていたため、全体を調査することができなかった。また、北溝の東側は攪乱で壊されていた。第22 a・32 a・32 b号溝跡と重複しており、新旧関係は、第22 a・32 a号溝跡より古く、第32 b号溝跡とは不明である。

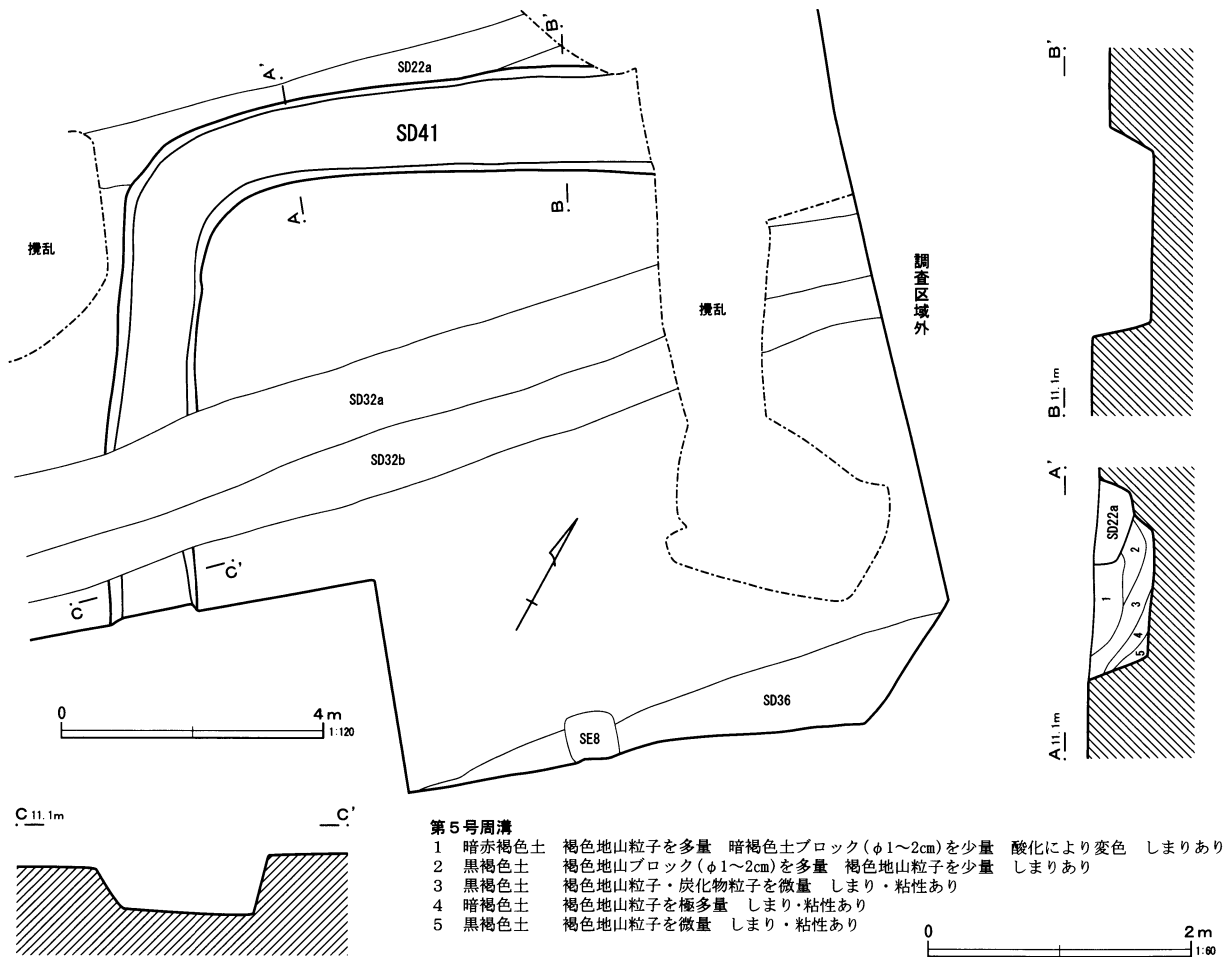
規模は、南北10.56 m以上、東西12.24 m以上で、平面形態は正方形か長方形になると思われる。主軸方位はN-30°-Wであった。

北溝は、幅1.25~1.56 m、深さは0.45 m前後で、傾斜もほとんど無く、底面が平坦であった。西溝は、幅1.27 m、深さが0.44~0.49 mで、北溝同様に底面は平坦であった。

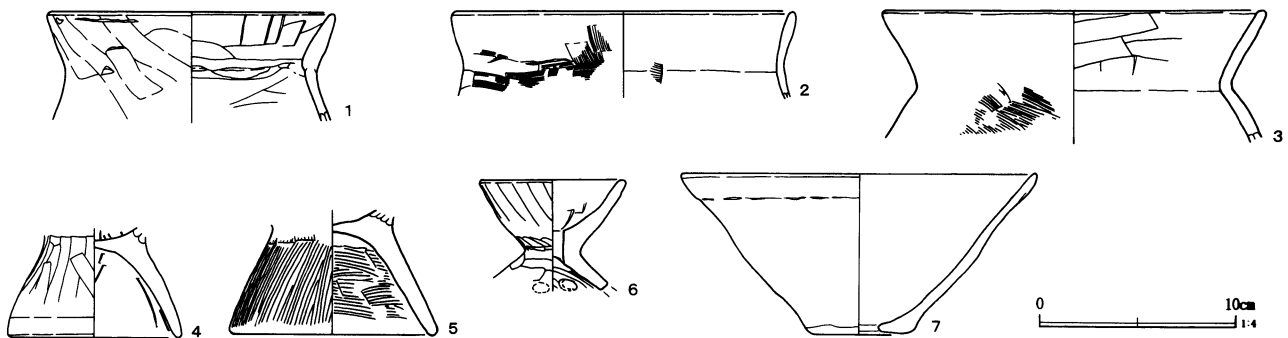
溝の内側の平坦部は、南北9.15 m以上、東西10.73 m以上で、本遺構に伴う建物跡の存在を示すような柱穴列などは検出できなかった。南側の調査区壁際に蓋形の木製品が出土した第8号井戸跡が位置していたが、本遺構との関係は不明である。

埋土は、北・西溝ともに溝の平坦部側から外に向かって自然に堆積している様子が窺えた。溝の壁は、全体的に緩やかに立ち上がっていたが、西溝の南側部分だけは壁がほぼ垂直に立ち上がっていた。

遺物は、古式土師器片が少量出土している。1・2の甕は、頸部の屈曲が弱く、口縁部がやや肥厚する特徴をもつ。6の器台は、脚部に4箇所の透孔と貫通穴が開けられる。7の甕は、口縁部が折り返され、底部には直径2 cmの単孔が開けられている。



第20図 第5号周溝



第21図 第5号周溝出土遺物

第8表 第5号周溝出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	甕	(14.6)	[5.4]	—	CEFH	普通	にぶい黄橙	35%	
2	甕	(17.2)	[4.4]	—	AEFH	普通	淡黄	25%	内面に黒斑 摩滅が著しい
3	甕	(13.3)	[6.7]	—	EF	普通	黄橙	10%	内外面に煤付着 外面は摩滅
4	台付甕	—	[5.6]	8.9	EF	普通	橙	100%	外面に煤付着
5	台付甕	—	6.3	(10.5)	AEG	普通	橙	75%	
6	器台	7.3	[5.5]	—	FHI	普通	橙	70%	透孔4
7	甌	(17.8)	18.1	5.4	FK	普通	橙	35%	摩滅が著しい

4. 井戸跡

井戸跡はB区内から総数8基が検出された。全て素掘りの井戸跡で、径が1m前後の小型のもの5基（SE3～5・7・8）と、2m前後の大型のもの3基（SE1・2・6）とに分類できる。

大型の第2・6号井戸跡は、近世以降の陶磁器片が出土しており、時期が下る。小型の第8号井戸跡からは、古墳時代前期の古式土師器と共伴して木製の蓋が出土している。井戸跡で、時期を特定できるのは以上の3基である。他の遺構は、遺物が出土していないものや、微量であったりするため帰属時期を判断する材料に欠ける。ただ、大型の井戸跡は新しく、小型のものは古い傾向が認められることから、第1号井戸跡は近世以降、第3～5・7号井戸跡は古墳時代前期の可能性が考えられる。

何れの井戸跡も、調査時において湧水が著しく、崩落の危険性もあったため、底面まで調査できた遺構がない。そのため、深さの数値は調査可能であった範囲までの値を示している。

第1号井戸跡（第22図）

D-6グリッドで検出された。第1号住居跡、第2号周溝、第5・9号土壇と重複していた。新旧関係は、重複する全ての遺構より本遺構の方が新しい。規模は、長径200cm、短径165cm、深さが72cmで、平面形態は南北に長い楕円形をしていた。主軸方位はN-6°-Wであった。

出土遺物は、古墳時代前期の古式土師器片が主体をしめ、肥前系磁器の水滴が1点出土している。本遺構は、古墳時代前期の遺構との重複が激しいため、

第9表 井戸跡一覧表

番号	グリッド	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	主軸方位	平面形態	重複遺構	時代
1	D-6	200	165	(72)	N-6°-W	楕円形	SJ1, SX2, SK5-9	近世以降?
2	D-5	170	161	(91)	N-7°-W	円形	SD7a-b	近世以降
3	D-5	106	99	(103)	N-87°-W	円形		不明
4	E-7	86	80	(108)	N-43°-W	円形		不明
5	F-8	105	98	(90)	N-23°-W	円形	SX3-4, SK30	不明
6	E-5	218	189	(58)	N-55°-E	楕円形		近世以降
7	F-6	78	67	(173)	N-25°-E	楕円形		古墳前期?
8	H-9	78	(73)	(106)	N-52°-E	楕円形	SD36	古墳前期

それらの遺構から混入した可能性も考えられる。また、埋土の状況や新旧関係などからは、近世以降とも考えられ、時期を確定するには至らなかった。

第2号井戸跡（第22図）

D-5グリッドで検出された。第7a・b号溝跡と重複しており、両遺構よりも新しい。規模は、長径170cm、短径161cm、深さが91cmで、平面形態は円形をしていた。主軸方位はN-7°-Wであった。

遺物は、焙烙、火鉢の蓋、挿り鉢と一緒に古式土師器の甕・高坏片などが少量出土している。また、石皿と考えられる被熱した石製品、漆塗りの木製椀が各1点出土している。古式土師器片は第7a・b号溝跡からの混入品の可能性が高いことから、本遺構の時期は近世以降と考えられる。

第3号井戸跡（第22図）

D-5グリッドで検出された。規模は、長径106cm、短径99cm、深さが103cmで、平面形態は円形をしていた。主軸方位はN-87°-Wであった。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

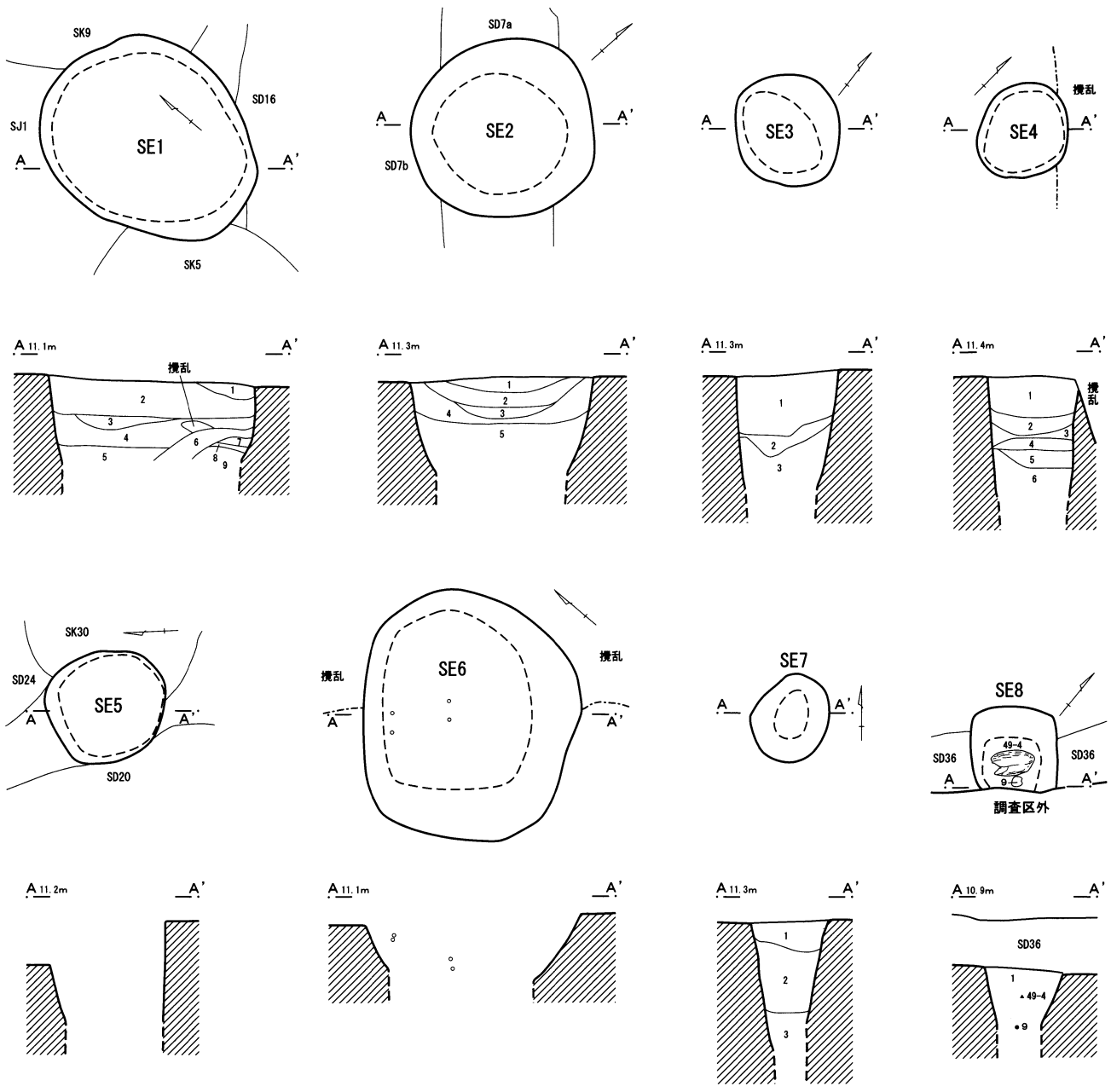
第4号井戸跡（第22図）

E-7グリッドで検出された。東側の一部を攪乱に壊されていた。規模は、長径86cm、短径80cm、深さが108cmで、平面形態は円形をしていた。主軸方位はN-43°-Wであった。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

第5号井戸跡（第22図）

F-8グリッドで検出された。南北を第3・4号周溝と、東側を第30号土壇と重複していた。新旧関係は、重複する全ての遺構より本遺構の方が新しい。



第1号井戸跡

- 1 黒色土 褐色地山粒子・焼土粒子・炭化物粒子を微量 しまりあり
- 2 灰白色シルト 褐色地山ブロック(φ1~2cm)を少量 しまり・粘性あり
- 3 青灰色シルト 褐色地山ブロック(φ0.5~1cm)を微量 しまり・粘性あり
- 4 灰白色シルト 暗褐色粘土ブロック(φ0.5~1cm)を少量 しまり・粘性あり
- 5 青灰色シルト 暗褐色粘土ブロック(φ1~2cm)を多量
- 6 黒色土 混入物を殆ど含まない しまり・粘性あり
- 7 褐色土 灰白色地山粒子を微量 しまり・粘性あり
- 8 黒褐色土 灰白色地山粒子を少量 しまり・粘性あり
- 9 褐色シルト 灰白色地山粒子を少量 しまり・粘性あり

第2号井戸跡

- 1 灰褐色土 暗褐色土ブロック(φ0.5cm)・白色粒子を少量 焼土粒子を微量 しまりあり
- 2 暗灰褐色土 焼土粒子を微量 全体的に斑に酸化による斑点を含む しまりあり
- 3 青灰色土 灰白色地山ブロック(φ0.5~1cm)を多量 しまりあり 粘性ややあり
- 4 暗灰褐色土 暗褐色土ブロック(φ1~2cm)を少量 焼土粒子を微量 しまりあり
- 5 青灰色土 混入物を殆ど含まない しまり・粘性あり

第3号井戸跡

- 1 暗灰褐色土 褐色地山粒子を少量 焼土粒子を微量 しまり強い
- 2 暗青褐色土 酸化による斑点を多量 しまりあり 粘性強い
- 3 黒色土 混入物を殆ど含まない しまりあり 粘性強い

第4号井戸跡

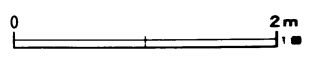
- 1 暗褐色土 褐色地山粒子・焼土粒子を極微量 しまりあり
- 2 黒灰色粘土 灰白色地山ブロックを微量 しまり・粘性あり
- 3 暗褐色土 酸化による暗赤褐色の斑点を極多量 褐色地山粒子を微量 しまり強い

第7号井戸跡

- 1 黒褐色土 褐色地山粒子を微量 しまりあり
- 2 暗褐色土 褐色地山粒子・褐色地山ブロック(φ0.5~1cm)を少量 しまりあり

第8号井戸跡

- 3 青灰色シルト 混入物を殆ど含まない しまりあり
- 1 黒色土 炭化物粒子を多量 焼土粒子を少量 しまり・粘性あり



第22図 井戸跡

規模は、長径 105cm、短径 98cm、深さが 90cm で、平面形態は円形をしていた。主軸方位は N-23°-W であった。土層は、観察用のベルトが崩落してしまっただけ、記録をとることができなかった。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

第6号井戸跡 (第22図)

E-5 グリッドで検出された。北半部を攪乱に壊されていた。規模は、長径 218cm、短径 189cm、深さが 58cm で、平面形態は南北に長い楕円形をしていた。主軸方位は N-55°-E であった。

遺物は、埋土上層から在地産の焙烙・鉢、平瓦片や漆塗りの木製碗が出土している。時期は、出土遺物から近世以降と考えられる。

第7号井戸跡 (第22図)

F-6 グリッドで検出された。規模は、長径 78cm、短径 67cm、深さが 173cm と小型の井戸跡で、平面形

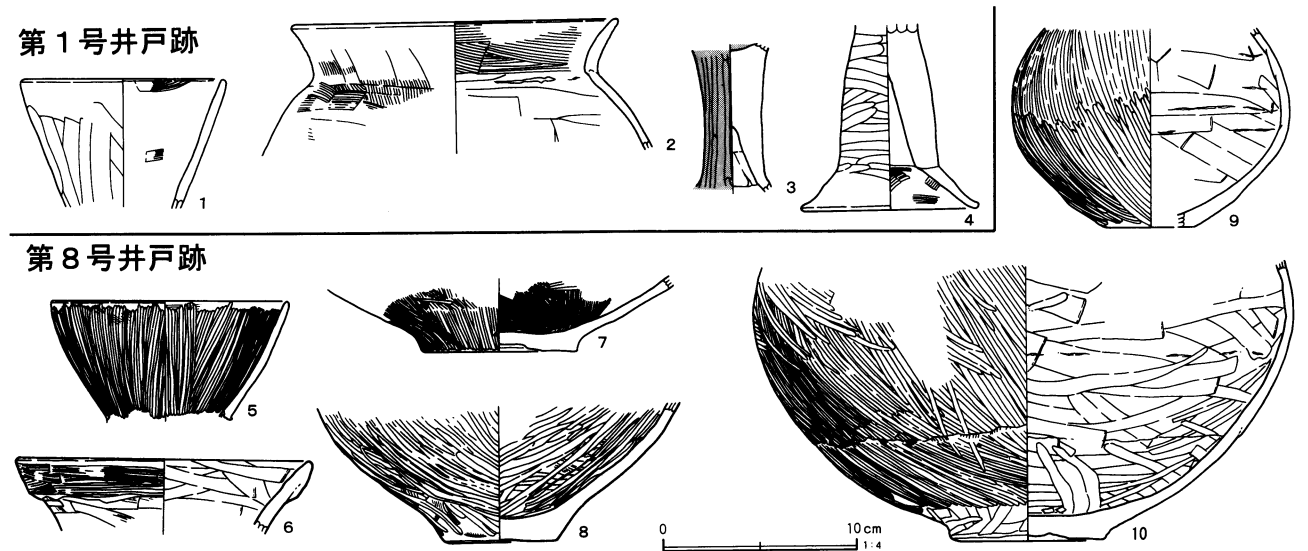
態は南北に長い楕円形をしていた。主軸方位は N-25°-E であった。

遺物は、古式土師器の壺胴部片が 2 点出土している。出土遺物から、古墳時代前期の井戸跡の可能性が考えられるが、遺物量があまりにも微量であるため時期を確定することができなかった。

第8号井戸跡 (第22図)

H-9 グリッドで検出された。南東側は調査区域外に延びていたことから、全体を調査することができなかった。第36号溝跡と重複しており、本遺構の方が古かった。規模は、長径 78cm、短径 73cm 以上、深さが 106cm で、平面形態は楕円形をしていた。主軸方位は N-52°-E であった。

遺物は、上層からほぼ完形の蓋形木製品、中層からは古式土師器の小型壺などが出土した。また、混入品ではあるが縄文土器が 1 点出土している。



第23図 井戸跡出土遺物

第10表 井戸跡出土遺物観察表

遺構	番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
SE 1	1	壺	(10.2)	[6.9]	-	CHI	普通	橙	25%	
SE 1	2	甕	(16.3)	[6.5]	-	ACEFH	普通	浅黄	20%	
SE 1	3	高坏	-	[7.6]	-	CEF	良好	明黄褐	95%	外面・坏部内面に赤彩
SE 1	4	高坏	-	[9.3]	(8.9)	CEFH	普通	にぶい赤褐	80%	摩滅が著しい
SE 8	5	壺	12.0	[6.1]	-	AFGHJ	良好	灰黄褐	100%	外面に黒斑
SE 8	6	壺	(15.0)	[3.7]	-	AEFGH	普通	にぶい黄橙	25%	
SE 8	7	甕	-	[3.7]	7.9	CFH	良好	褐灰	80%	外面に煤付着
SE 8	8	壺	-	[6.9]	5.8	CEFJ	良好	にぶい黄橙	90%	
SE 8	9	壺	-	[10.0]	(4.6)	AH	普通	灰白	75%	No.2 外面に黒斑
SE 8	10	壺	-	[13.9]	7.9	CFGH	良好	にぶい橙	50%	外面に黒斑 底部に木葉痕が僅かに残る

5. 土壌

土壌は、A区で13基、B区で38基の計51基を検出した。A区で検出された土壌は、形態や規模もまちまちで、出土遺物が少量のため、時期を特定できた遺構が少ない。B区の西側で検出された土壌群は、規模の大きいものが多く、遺物が多量に廃棄されていたうえ、埋土に炭化物が多量に含まれていたことから、祭祀に関連した遺構と考えられる。

第1号土壌 (第24図)

D-5グリッドで検出された。第6a号溝跡と重複しており、本遺構の方が新しかった。規模は、長軸131cm、短軸87cm、深さが36cmで、平面形態は長方形をしていた。主軸方位はN-32°-Eであった。

遺物は、底面から1の広口壺と2の壺底部が潰れた状態で出土した。

第2号土壌 (第24・29図)

D-5グリッドで検出された。西側は調査区域外に延びていた。第51号土壌、第7a・b号溝跡と重複していた。規模は、長軸195cm以上、短軸69cm、深さが13cmで、平面形態は長方形をしていた。主軸方位はN-51°-Wであった。

遺物は、埋土の上層から下層にかけて多量の古式土師器が出土した。

第3号土壌 (第24図)

D-5・6、E-5グリッドにかけて検出された。第1号住居跡、第4・9・52号土壌、第7a・b号溝跡と重複していた。新旧関係は、第9・52号土壌より古く、第1号住居跡より新しい。規模は、長軸389cm、短軸248cm、深さが50cmで、平面形態は楕円形をしていた。主軸方位はN-78°-Eであった。

遺物は、古式土師器が埋土の上層から多量に出土した。また、泥岩製の砥石片が1点出土している。

第4号土壌 (第24・29図)

E-5・6グリッドにかけて検出された。第1号住居跡、第2号周溝、第3・9・52号土壌、第19号溝跡と重複していた。新旧関係は、第9号土壌、

第19号溝跡より古く、第1号住居跡、第2号周溝より新しい。規模は、長軸373cm以上、短軸274cm、深さが71cmで、平面形態は楕円形をしていた。主軸方位はN-84°-Wであった。

遺物は、土壌の北半部に集中し、廃棄された状態で多量に出土した。80の甑には、低い脚台部が付き、不規則な穿孔が4箇所ある。全体的にミニチュア土器の割合が高く、埋土にも焼土や炭化物が含まれていたことから、祭祀に関わる遺構と考えられる。

第5号土壌 (第24・29図)

D-6グリッドで検出された。第1号住居跡、第2号周溝、第1号井戸跡と重複していた。新旧関係は、第1号井戸跡より古く、第1号住居跡、第2号周溝より新しかった。規模は、長軸212cm、短軸148cm以上、深さが33cmで、平面形態は楕円形をしていた。主軸方位はN-42°-Wであった。

遺物は、埋土上層から中層にかけて多量の古式土師器が出土した。107の大型壺は、土壌に据え置かれたような状態で出土している。

第6号土壌 (第24・29図)

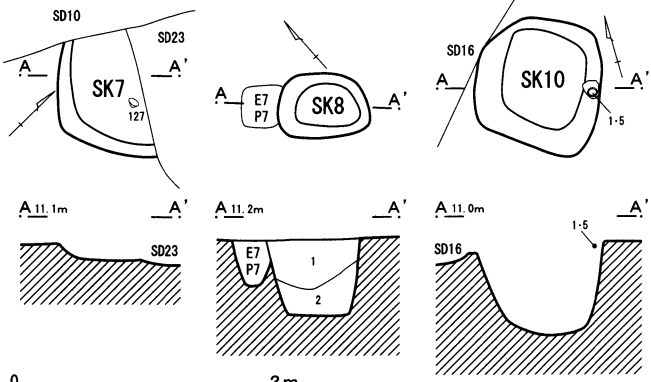
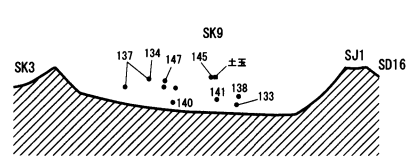
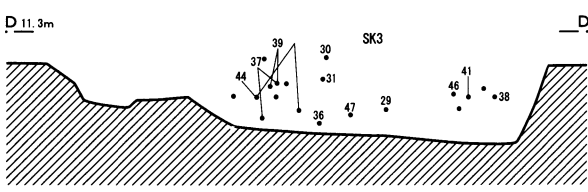
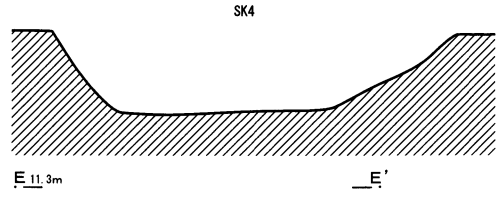
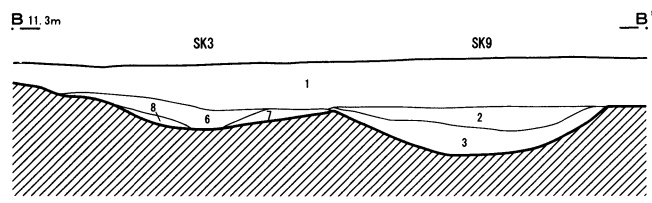
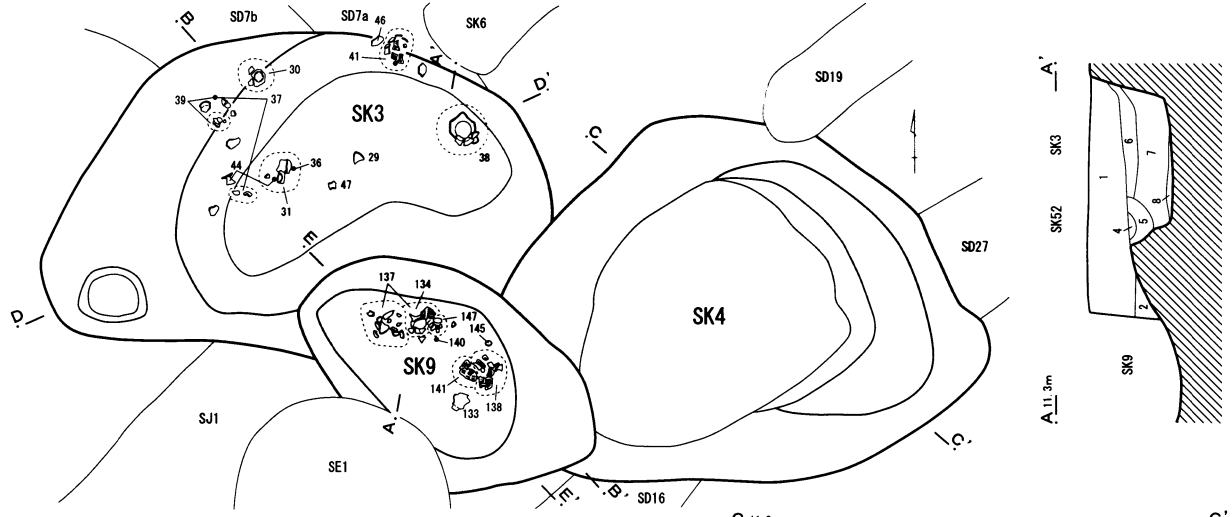
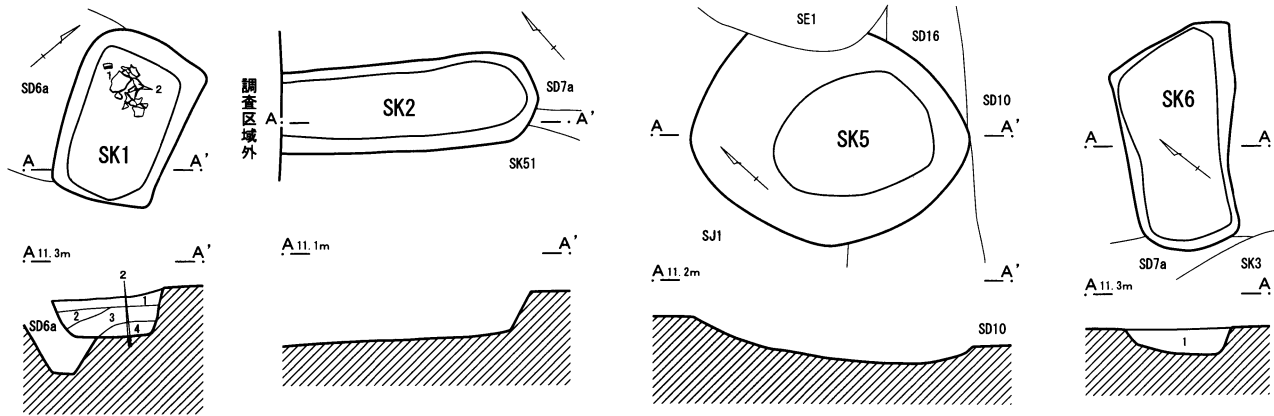
E-5グリッドで検出された。第7a号溝跡と重複していたが、新旧関係は不明である。規模は、長軸163cm、短軸80cm、深さが20cmで、平面形態は不整形をしていた。主軸方位はN-48°-Eであった。

遺物は、遺構確認時に多量の古式土師器が北半部にまとまって出土した。112の広口壺は、124の高坏の上にのせられた状態で出土した。土器の他に、砂岩製の砥石が1点出土している。

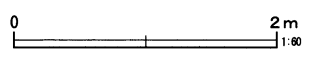
第7号土壌 (第24図)

E-6グリッドで検出された。第1号住居跡、第10・23号溝跡と重複していた。新旧関係は、第1号住居跡より新しく、他の遺構とは不明である。規模は、長軸98cm以上、短軸60cm以上、深さが7cmであった。主軸方位はN-56°-Wであった。

遺物は、127の台付甕の脚台部などの古式土師器が少量出土している。



- 第1号土壤**
- 1 黒褐色土 地山粒子・地山ブロック(φ0.5cm)を多量 しまりあり
 - 2 黒褐色土 地山粒子・地山ブロック(φ0.5~1cm)を少量 焼土粒子を微量
 - 3 黒褐色土 しまりあり
 - 4 黒褐色土 地山粒子・地山ブロック(φ1~2cm)を多量 しまりあり
- 第3・9・52号土壤**
- 1 黒褐色土 褐色地山粒子(φ0.5~1cm)を多量 しまりあり
 - 2 黒褐色土 炭化物粒子・褐色地山粒子を微量 しまりあり 粘性ややあり(SK9)
 - 3 黒色土 炭化物(φ0.5~1cm)・炭化物粒子を多量 褐色地山粒子を微量 しまり・粘性あり(SK9)
 - 4 褐色土 褐色地山ブロック(φ1~2cm)・褐色地山粒子を多量 しまりあり(SK52)
 - 5 暗褐色土 褐色地山ブロック(φ1~2cm)・褐色地山粒子を少量 焼土粒子・炭化物粒子を微量 しまりあり(SK52)
 - 6 暗褐色土 褐色地山粒子を多量 褐色地山ブロック(φ0.5cm)を少量 炭化物粒子を微量 しまりあり(SK3)
 - 7 暗褐色土 褐色地山ブロック(φ3~4cm)を極多量 褐色地山粒子を多量(SK3)
 - 8 暗褐色土 褐色地山粒子を多量 しまりあり 粘性ややあり(SK3)
- 第6号土壤**
- 1 暗褐色土 褐色地山粒子を多量 褐色地山ブロック(φ0.5cm)を少量しまりあり
- 第8号土壤**
- 1 暗褐色土 褐色地山粒子を極多量 褐色地山ブロック(φ1~4cm)を多量 焼土粒子を微量 しまりあり
 - 2 暗褐色土 褐色地山粒子を少量 しまりあり



第24図 土壤(1)

第8号土壌 (第24図)

E-7グリッドで検出された。グリッドP7と重複しており、本遺構の方が新しかった。規模は、長軸64cm、短軸49cm、深さが60cmで、平面形態は長方形をしていた。主軸方位はN-45°-Wであった。

遺物は、少量の古式土師器片が出土したが、図示できるものがなかった。

第9号土壌 (第24図)

D・E-5・6グリッドにかけて検出された。第1号住居跡、第1号井戸跡、第3・4・52号土壌と重複していた。新旧関係は、第1号井戸跡より古く、第1号住居跡、第3・4・52号土壌より新しかった。規模は、長軸246cm、短軸118cm以上、深さが50cmで、平面形態は楕円形をしていた。主軸方位はN-64°-Wであった。埋土下層の黒色土中には、多量の炭化物・炭化物粒子が含まれていた。

遺物は、多量の古式土師器の他に、小型の土玉が1点出土している。

第9b号土壌 第52号土壌に番号変更

第10号土壌 (第24図)

D-6グリッドで検出された。第1号住居跡、第10号溝跡と重複し、本遺構の方が新しい。規模は、長軸97cm、短軸97cm、深さが94cmで、平面形態は正方形であった。主軸方位はN-27°-Eであった。

遺物は、埋土上層から148の赤彩された小型の壺と152の甕口縁部片などが出土している。

第11号土壌 (第25図)

E-8グリッドで検出された。南側は調査区域外に延びており、東側は攪乱に壊されていた。規模は、長軸296cm以上、短軸174cm、深さが69cmで、平面形態は長方形をしていた。主軸方位はN-47°-Eであった。第3号周溝の中心に位置することから、埋葬施設である可能性も考えられたが、確証を得るには至らなかった。

遺物は、153の他にS字状口縁台付甕の脚台部片が出土しているが、小片のため図示できなかった。

第12号土壌 (第25図)

F-8グリッドで検出された。第3号周溝と重複しており、本遺構の方が新しかった。規模は、長軸232cm、短軸146cm、深さが5cmで、平面形態は不整形をしていた。主軸方位はN-51°-Wであった。

遺物は、古式土師器片が少量出土したが、図示できるものがなかった。

第13号土壌 (第25図)

E-8グリッドで検出され、南側は調査区域外に延びていた。規模は、長軸88cm、短軸36cm以上、深さが18cmで、平面形態は楕円形をしていた。主軸方位はN-39°-Wであった。

遺物は、古式土師器片が少量出土したが、図示できるものがなかった。

第14号土壌 (第25図)

F-8グリッドで検出され、南側は攪乱に壊されていた。第4号周溝、第20号土壌、第21a・b、28号溝跡と重複していた。新旧関係は、第20号土壌、第21a・b、28号溝跡よりも古く、第4号周溝より新しかった。規模は、長軸344cm以上、短軸158cm、深さが45cmで、平面形態は長方形をしていた。主軸方位はN-33°-Wであった。埋土の上層には2枚の薄い炭層が認められた。

遺物は、中層から下層にかけて台付甕、鉢などの古式土師器が多量出土した。

第15号土壌 (第25図)

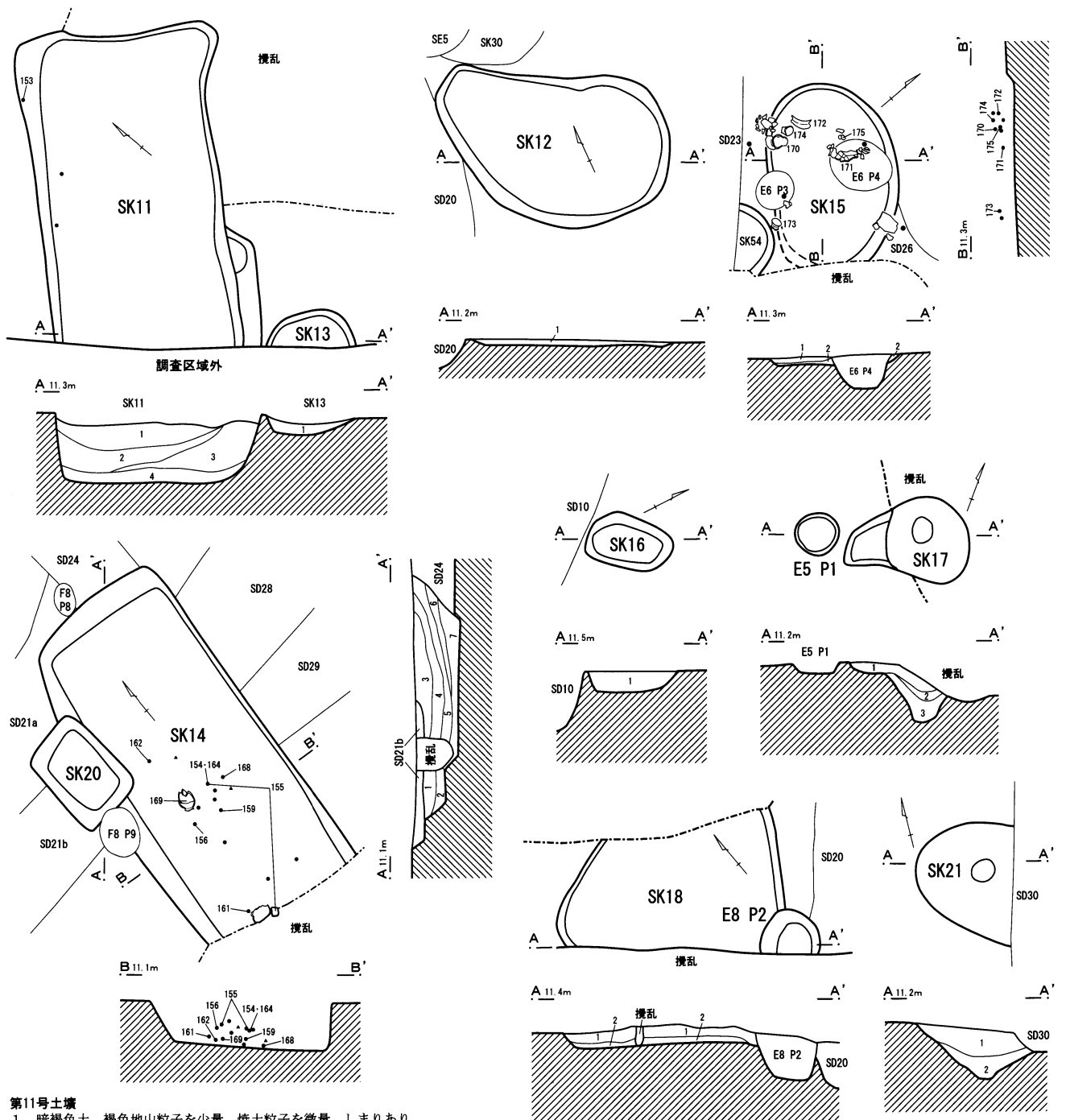
E-6グリッドで検出され、東側は攪乱で壊されていた。第26号溝跡、グリッドP3・4と重複しており、本遺構の方が古かった。規模は、長軸171cm以上、短軸121cm、深さが8cmで、平面形態は楕円形をしていた。主軸方位はN-51°-Wであった。

遺物は、遺構確認時にS字状口縁台付甕などが出土したが、埋土中からはほとんど出土しなかった。

第16号土壌 (第25図)

D-7グリッドで検出された。規模は、長軸80cm、短軸49cm、深さが23cmで、平面形態は長方形をしていた。主軸方位はN-46°-Eであった。

出土遺物が少量で、図示できるものはなかった。



第11号土壌

- 1 暗褐色土 褐色地山粒子を少量 焼土粒子を微量 しまりあり
- 2 暗褐色土 暗褐色土ブロック(φ1~2cm)・褐色地山粒子を少量 しまりあり
- 3 暗褐色土 褐色地山粒子を多量 褐色地山ブロック(φ0.5~1cm)を少量 炭化物粒子を微量 しまりあり
- 4 黒褐色土 褐色地山粒子を少量 しまりあり 粘性ややあり

第12号土壌

- 1 黒褐色土 褐色地山粒子・褐色地山ブロック(φ1~2cm)を少量 しまりあり

第13号土壌

- 1 黒褐色土 褐色地山粒子を多量 しまりあり

第14・20号土壌

- 1 黒褐色土 炭化物(φ0.5cm)・炭化物粒子・褐色地山粒子を少量 しまり・粘性あり(SK20)
- 2 褐色土 褐色地山土を主体 暗褐色土ブロック(φ1~2cm)・暗褐色土粒子を少量 しまりあり(SK20)
- 3 暗灰褐色土 焼土粒子を多量 焼土ブロック(φ0.5~1cm)・炭化物粒子・褐色地山粒子を少量 最下層に炭層 しまりあり(SK14)
- 4 黒褐色土 炭化物(φ0.5cm)・炭化物粒子・褐色地山粒子を少量 最下層に炭層 しまり・粘性あり(SK14)
- 5 暗褐色土 褐色地山粒子・褐色地山ブロック(φ0.5~1cm)を少量 しまり・粘性あり(SK14)
- 6 暗褐色土 褐色地山粒子を極多量 褐色地山ブロック(φ0.5~1cm)を多量 しまりあり(SK14)
- 7 暗褐色土 褐色地山粒子を多量 しまりあり(SK14)

第15号土壌

- 1 黒褐色土 暗褐色土ブロック(φ0.5cm)・褐色地山粒子を少量 しまりあり
- 2 褐色土 暗褐色土ブロック(φ0.5~1cm)を少量 しまりあり

第16号土壌

- 1 暗褐色土 褐色地山粒子を少量 しまりあり

第17号土壌

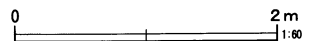
- 1 黒褐色土 褐色地山粒子を少量 しまりあり
- 2 暗褐色土 褐色地山粒子を多量 褐色地山ブロック(φ1~2cm)を少量 しまりあり
- 3 黒褐色土 褐色地山粒子を少量 しまりあり

第18号土壌

- 1 暗褐色土 褐色地山粒子・褐色地山ブロック(φ2~3cm)を少量 しまりあり
- 2 褐色土 暗褐色土粒子・暗褐色土ブロック(φ0.5~1cm)を少量 しまりあり

第21号土壌

- 1 暗褐色土 褐色地山粒子を多量 炭化物粒子・焼土粒子・褐色地山ブロック(φ0.5~1cm)を少量 しまりあり
- 2 黒褐色土 褐色地山粒子・褐色地山ブロック(φ1~2cm)を多量 しまりあり



第25図 土壌(2)

第17号土壌 (第25図)

E-5グリッドで検出され、東側は攪乱で壊されていた。規模は、長軸119cm、短軸83cm、深さが53cmで、平面形態は楕円形をしていた。主軸方位はN-62°-Eであった。

出土遺物が少量で、図示できるものはなかった。

第18号土壌 (第25図)

E・F-8グリッドにかけて検出された。南側は調査区域外に延び、北側は攪乱に壊されていた。規模は、長軸322cm、短軸166cm以上、深さが16cmで、平面形態は不整形をしていた。主軸方位はN-44°-Wであった。

出土遺物が少量で、図示できるものはなかった。

第19号土壌 (第26図)

D-6グリッドで検出された。第1号住居跡、第10・33号溝跡と重複していた。新旧関係は、第1号住居跡、第33号溝跡より新しく、第10号溝跡より古かった。規模は、長軸319cm、短軸202cm、深さが42cmで、平面形態は隅丸長方形をしていた。主軸方位はN-38°-Eであった。

遺物は、埋土上層から176・177・183・186が、下層から178・181・182・184の古式土師器が出土した。

第20号土壌 (第25図)

F-8グリッドで検出された。第14号土壌、第21a・b号溝跡、グリッドP9と重複していた。新旧関係は、第14号土壌より新しく、第21a・b号溝跡より古かった。規模は、長軸94cm、短軸66cm、深さが19cmで、平面形態は長方形をしていた。主軸方位はN-43°-Wであった。

出土遺物が少量で、図示できるものはなかった。

第21号土壌 (第25図)

F-8グリッドで検出された。第30号溝跡と重複しており、本遺構の方が古かった。規模は、長軸110cm、短軸96cm以上、深さが47cmで、平面形態は楕円形をしていた。主軸方位はN-62°-Wであった。

遺物が出土しなかったため、時期は不明である。

第22号土壌 (第26図)

F-7グリッドで検出された。規模は、長軸124cm、短軸110cm、深さが21cmで、平面形態は楕円形をしていた。主軸方位はN-81°-Wであった。

遺物は、187の柱状の脚部をもつ高坏などが出土している。187は下部に3箇所の透孔があげられる。

第23号土壌 (第26図)

F-7グリッドで検出され、第53号土壌と重複していた。規模は、長軸160cm、短軸116cm、深さが38cmで、平面形態は楕円形をしていた。主軸方位はN-36°-Eであった。

出土遺物が少量で、図示できるものはなかった。

第23b号土壌 第53号土壌に番号変更

第24号土壌 (第26図)

F-7・8グリッドにかけて検出された。規模は、長軸82cm、短軸56cm、深さ48cmで、平面形態は長方形をしていた。主軸方位はN-8°-Wであった。

出土遺物が少量で、図示できるものはなかった。

第25号土壌 (第26図)

D-6グリッドで検出された。第1号掘立柱建物跡、第10・33号溝跡と重複していた。新旧関係は、第1号掘立柱建物跡より古かった。規模は、長軸120cm、短軸74cm、深さが29cmで、平面形態は長方形をしていた。主軸方位はN-47°-Eであった。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

第26号土壌 (第26図)

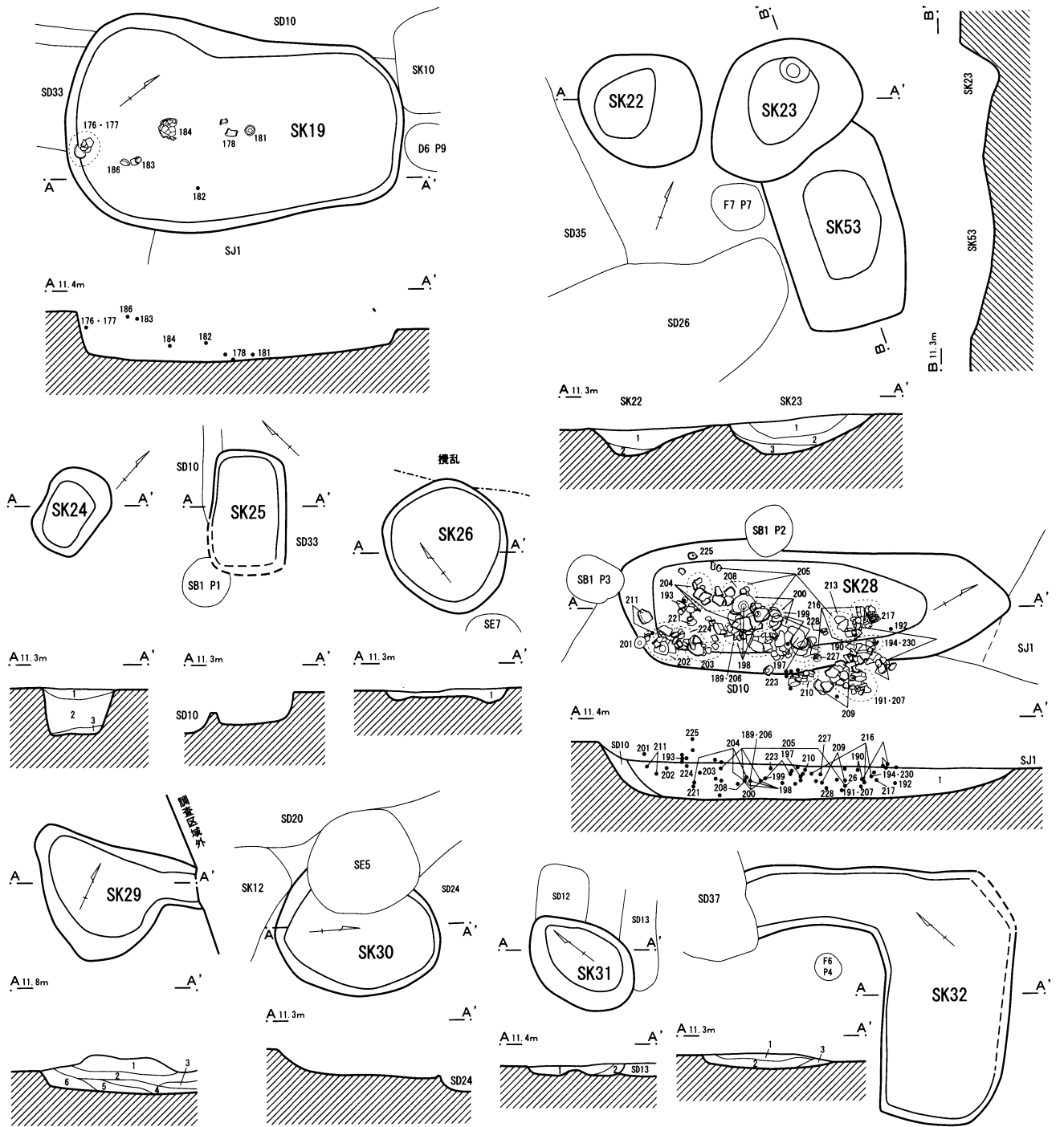
F-6グリッドで検出された。北東部を攪乱に壊されていた。規模は、長軸126cm、短軸114cm、深さが13cmで、平面形態は円形をしていた。主軸方位はN-1°-Eであった。

出土遺物が少量で、図示できるものはなかった。

第27号土壌 第37号溝跡に変更のため欠番

第28号土壌 (第26図)

D-6グリッドで検出された。第1号住居跡、第1号掘立柱建物跡、第10号溝跡と重複していた。新旧関係は、第1号掘立柱建物跡より古く、第1号住居跡、第10号溝跡より新しかった。規模は、長軸368cm、短軸117cm、深さが52cmで、平面形態は楕円形



第22号土壌

- 1 暗褐色土 褐色地山粒子を少量 焼土粒子・炭化物粒子を微量 しまりあり
- 2 褐色土 褐色地山土を主体 暗褐色土粒子・暗褐色土ブロック(φ0.5~1cm)を少量 しまりあり

第23号土壌

- 1 暗褐色土 褐色地山粒子を多量 褐色地山ブロック(φ0.5cm)・炭化物粒子を微量 しまりあり
- 2 黒褐色土 褐色地山粒子を少量 炭化物(φ0.5cm)・炭化物粒子を微量 焼土粒子を極微量 しまりあり
- 3 暗褐色土 褐色地山粒子を少量 しまりあり

第24号土壌

- 1 暗褐色土 褐色地山粒子を多量 炭化物粒子を少量 しまりあり
- 2 暗褐色土 褐色地山粒子・褐色地山ブロック(φ1~2cm)を少量 しまり・粘性あり

第25号土壌

- 3 褐色土 暗褐色土粒子を少量 しまりあり

第26号土壌

- 1 暗灰色土 褐色地山ブロック(φ1~2cm)・褐色地山粒子を少量

第28号土壌

- 1 黒褐色土 炭化物(φ0.5~1cm)・炭化物粒子・褐色地山粒子を多量 褐色地山ブロック(φ1~2cm)を少量 焼土粒子を微量 しまりあり

第29号土壌

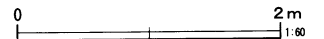
- 1 暗灰色土 褐色地山ブロック(φ2~3cm)を多量 褐色地山粒子を少量 しまりあり(表土の一部)
- 2 暗褐色土 褐色地山粒子・焼土粒子を少量 褐色地山ブロック(φ0.5cm)・炭化物粒子を微量 しまりあり
- 3 暗褐色土 褐色地山ブロック(φ0.5~1cm)・褐色地山粒子を多量 焼土粒子を微量 しまりあり
- 4 黒褐色土 褐色地山粒子を少量 焼土粒子・炭化物粒子を極微量 しまりあり
- 5 黒褐色土 褐色地山ブロック(φ1~2cm)・褐色地山粒子を多量 しまりあり
- 6 黒褐色土 褐色地山粒子を少量 しまりあり

第31号土壌

- 1 暗褐色土 褐色地山粒子を少量 炭化物粒子を微量 しまりあり
- 2 黒褐色土 褐色地山粒子を少量 炭化物粒子を微量 しまりあり

第32号土壌

- 1 暗褐色土 褐色地山粒子を微量 酸化による暗赤褐色の斑点を含む しまりあり
- 2 褐色土 褐色地山土を主体 暗褐色土粒子を少量 暗褐色土ブロック(φ0.5~1cm)を微量 しまりあり
- 3 暗褐色土 褐色地山粒子を多量 しまりあり



第26図 土壌(3)

円形をしていた。主軸方位はN-31°-Eであった。

遺物は、上層から多量の古式土師器が廃棄された状態で出土した。195の大廓式の壺口縁部は、口縁部にヘラ描きの浅い沈線が4本単位で巡らされ、口唇部に広い平坦面をもつ。胎土が特徴的であることから、搬入品の可能性が高い。

第29号土壌 (第26図)

F-7グリッドで検出され、東側は調査区域外に延びていた。規模は、長軸146cm以上、短軸112cm、深さが34cmで、平面形態は不整形をしていた。主軸方位はN-59°-Eであった。

遺物は、233の壺底部片など古式土師器が少量出土している。

第30号土壌 (第26図)

F-8グリッドで検出された。第4号周溝、第5号井戸跡と重複していた。新旧関係は、第5号井戸跡より古く、第4号周溝より新しかった。規模は、長軸158cm、短軸78cm以上、深さが28cmで、平面形態は楕円形をしていた。主軸方位はN-5°-Eであった。埋土には2枚の薄い炭層が確認でき、火を用いた祭祀行為が行われた可能性が考えられる。

遺物が出土しなかったため、時期は不明である。

第31号土壌 (第26図)

D・E-6グリッドにかけて検出された。第12・13号溝跡と重複していた。新旧関係は、第13号溝跡より新しかった。規模は、長軸116cm、短軸78cm、深さが5cmで、平面形態は楕円形をしていた。主軸方位はN-0°-Sであった。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

第32号土壌 (第26図)

F-6・7グリッドにかけて検出され、第37号溝跡と重複していた。規模は、長軸238cm、短軸118cm、深さが17cmで、平面形態は不整形をしていた。主軸方位はN-55°-Eであった。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

第33号土壌 (第27図)

B・C-2・3グリッドにかけて検出された。規

模は、長軸451cm、短軸330cm、深さが42cmで、平面形態は長方形をしていた。主軸方位はN-27°-Wであった。埋土1層の最下層には、火山灰の可能性もある灰白色土が一面に堆積していた。

遺物は、234の台付甕の脚台部など古式土師器片が少量出土している。

第34号土壌 (第27図)

B・C-3グリッドにかけて検出された。規模は、長軸239cm、短軸172cm、深さが35cmで、平面形態は楕円形をしていた。主軸方位はN-61°-Wであった。

遺物は、古式土師器片が少量出土したが、図示できるものがなかった。

第35号土壌 (第27図)

B-4グリッドで検出された。第36号土壌と重複しており、本遺構の方が新しかった。規模は、長軸396cm、短軸189cm、深さが54cmで、平面形態は楕円形をしていた。主軸方位はN-87°-Eであった。

遺物は、235・236の壺などの古式土師器が少量出土している。

第36号土壌 (第27図)

B-4グリッドで検出され、南西側は調査区域外に延びていた。第35・37・38号土壌と重複していた。規模は、長軸359cm、短軸295cm、深さが19cmで、平面形態は楕円形をしていた。主軸方位はN-87°-Wであった。

出土遺物は、237の古式土師器の甕などがある。

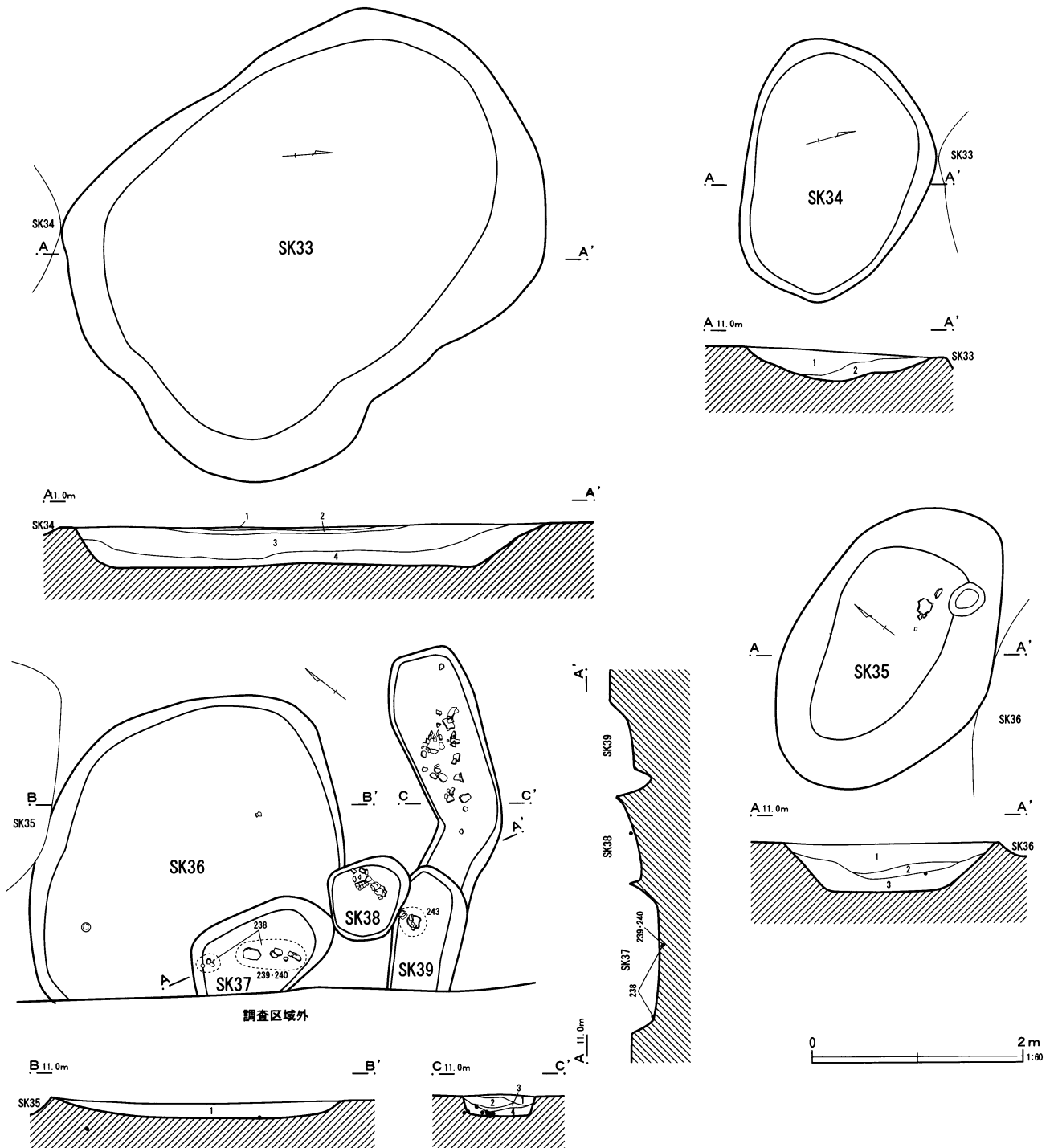
第37号土壌 (第27図)

B-4グリッドで検出され、南西側は調査区域外に延びていた。第36・38号土壌と重複していたが、新旧関係は不明である。規模は、長軸141cm、短軸85cm以上、深さが46cmで、平面形態は楕円形をしていた。主軸方位はN-58°-Wであった。

遺物は、238・239の甕と240の甗が土壌底面から出土している。

第38号土壌 (第27図)

B-4グリッドで検出された。第36・37・39号



第33号土壌

- 1 暗灰色土 灰白色地山粒子を少量 最下層に厚さ0.5cmに火山灰(?)が堆積
しまり・粘性あり
- 2 黒色土 混入物を殆ど含まない しまり・粘性あり
- 3 暗灰色粘土 灰白色地山ブロック (φ0.5~1cm)・灰白色地山粒子を微量 しまり・粘性あり
- 4 黒色粘土 灰白色地山ブロック (φ1~2cm)・灰白色地山粒子を多量 しまり・粘性あり

第34号土壌

- 1 暗灰色粘土 褐色地山粒子を極微量 しまり・粘性あり
- 2 灰白色粘土 灰白色地山土を主体 暗灰色粘土ブロック (φ0.5~1cm)・暗灰色粘土粒子を少量 しまり・粘性あり

第35号土壌

- 1 黒褐色土 炭化物粒子を少量 褐色地山粒子を極微量 しまり・粘性あり
- 2 暗灰色粘土 褐色地山粒子を少量 しまり・粘性あり
- 3 黒色粘土 灰白色地山粒子・灰白色地山ブロック (φ0.5~1cm)を少量 しまり・粘性あり

第36号土壌

- 1 黒色粘土 灰白色地山粒子を微量 しまり・粘性あり

第39号土壌

- 1 黒色土 灰白色地山粒子を微量 焼土粒子を極微量 しまりあり
- 2 褐色粘土 褐色地山土を主体 黒色土粒子を少量 しまり・粘性あり
- 3 黒色土 炭層
- 4 黒色粘土 灰白色地山粒子を極多量 灰白色地山ブロック (φ1~2cm)を多量 しまり・粘性あり

第27図 土壌 (4)

土壙と重複していた。新旧関係は、第39号土壙より新しく、他の遺構とは不明である。規模は、長軸87cm、短軸74cm、深さが25cmで、平面形態は楕円形をしていた。主軸方位はN-82°-Wであった。

遺物は、242の赤彩の壺口縁部片の他に、底面から甕が出土したが図示できなかつた。

第39号土壙 (第27図)

B・C-4グリッドにかけて検出された。第38号土壙と重複しており、本遺構の方が古かつた。規模は、長軸326cm以上、短軸83cm、深さが38cmで、平面形態は溝状の不整形をしていた。主軸方位はN-53°-Eであった。

遺物は、243の小型甕の底部など古式土師器片が土壙底面から少量出土している。

第40号土壙 欠番

第41号土壙 (第28図)

B-3グリッドで検出された。第42号土壙と重複しており、本遺構の方が新しかつた。規模は、長軸149cm、短軸144cm、深さ18cmで、平面形態は不整形をしていた。主軸方位はN-56°-Wであった。

出土遺物が少量で、図示できるものはなかつた。

第42号土壙 (第28図)

B-3グリッドで検出された。第41・43号土壙と重複しており、本遺構の方が古かつた。規模は、長軸211cm、短軸127cm、深さ13cmで、平面形態は長方形をしていた。主軸方位はN-10°-Wであった。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

第43号土壙 (第28図)

B-3グリッドで検出された。第42号土壙と重複しており、新旧関係は本遺構の方が新しかつた。規模は、長軸197cm、短軸95cm以上、深さが23cmで、平面形態は長方形をしていた。主軸方位はN-7°-Eであった。

出土遺物がないため、時期は不明である。

第44号土壙 (第28図)

C-2グリッドで検出された。北側は調査区域外に延びていたため、完掘できなかつた。規模は、長

軸173cm以上、短軸41cm以上、深さが57cmであった。主軸方位はN-36°-Wであった。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

第45号土壙 (第28図)

B・C-2グリッドで検出された。規模は、長軸256cm、短軸91cm、深さが25cmで、平面形態は長楕円形をしていた。主軸方位はN-52°-Wであった。

遺物は、244の甕など古式土師器が少量出土した。

第46号土壙 (第28図)

B・C-4グリッドで検出された。規模は、長軸174cm、短軸122cm、深さが31cmで、平面形態は不整形をしていた。主軸方位はN-64°-Eであった。

遺物は、245の上げ底状の底部をもつ壺、246の台付甕の脚台部片などが少量出土している。

第47号土壙 欠番

第48号土壙 (第28図)

E・F-7グリッドにかけて検出された。第3号周溝と重複していた。規模は、長軸55cm以上、短軸53cm、深さが22cmで、平面形態は長方形をしていた。主軸方位はN-20°-Eであった。

遺物は、埋土の上層から247の柱状の脚部をもつ高坏などの古式土師器片が少量出土している。

第49号土壙 (第28図)

D-5グリッドで検出された。第7b・34号溝跡と重複していた。規模は、長軸158cm以上、短軸122cm、深さが14cmで、平面形態は楕円形をしていた。主軸方位はN-33°-Eであった。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

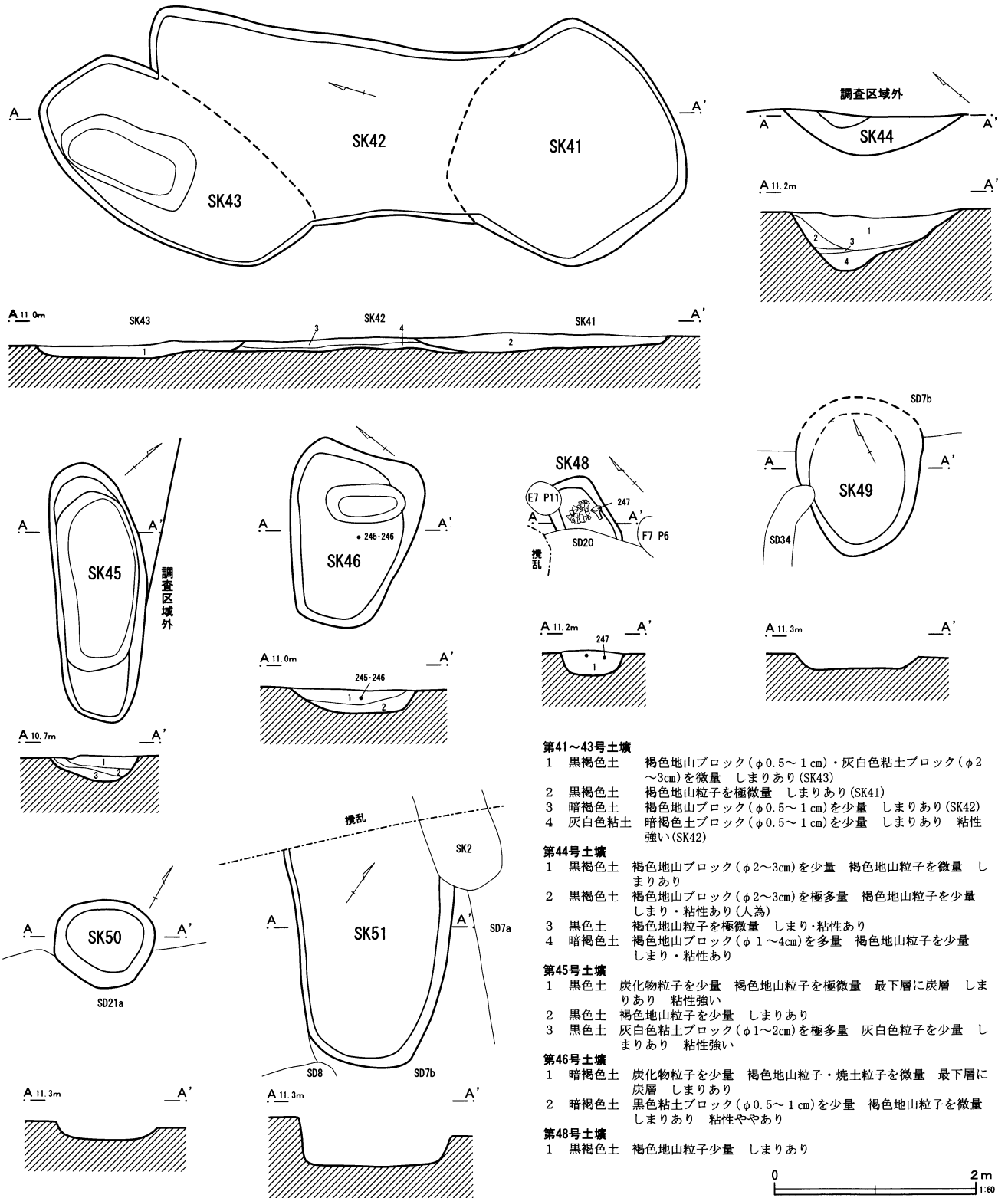
第50号土壙 (第28図)

F-8・9グリッドにかけて検出された。第21a号溝跡と重複していた。規模は、長軸103cm、短軸90cm、深さが21cmで、平面形態は円形をしていた。主軸方位はN-50°-Eであった。

遺物が出土しなかつたため、時期は不明である。

第51号土壙 (第28図)

D-5グリッドで検出された。第2号土壙、第7b号溝跡と重複していた。規模は、長軸233cm以上、



第28図 土壌(5)

短軸158cm、深さが52cmで、平面形態は長方形をしていた。主軸方位はN-43°-Wであった。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

第52号土壌(第24図)

E-5グリッドで検出された。第3・4・9号土

壌と重複していた。土層断面で確認できた土壌のため、規模や平面形態は不明である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

第53号土壌(第26図)

F-7グリッドで検出され、第23号土壌と重複

していた。規模は、長軸170cm以上、短軸118cm、深さが24cmで、平面形態は長方形をしていた。主軸方位はN-35°-Wであった。

出土遺物が微量で、図示できるものはなかった。

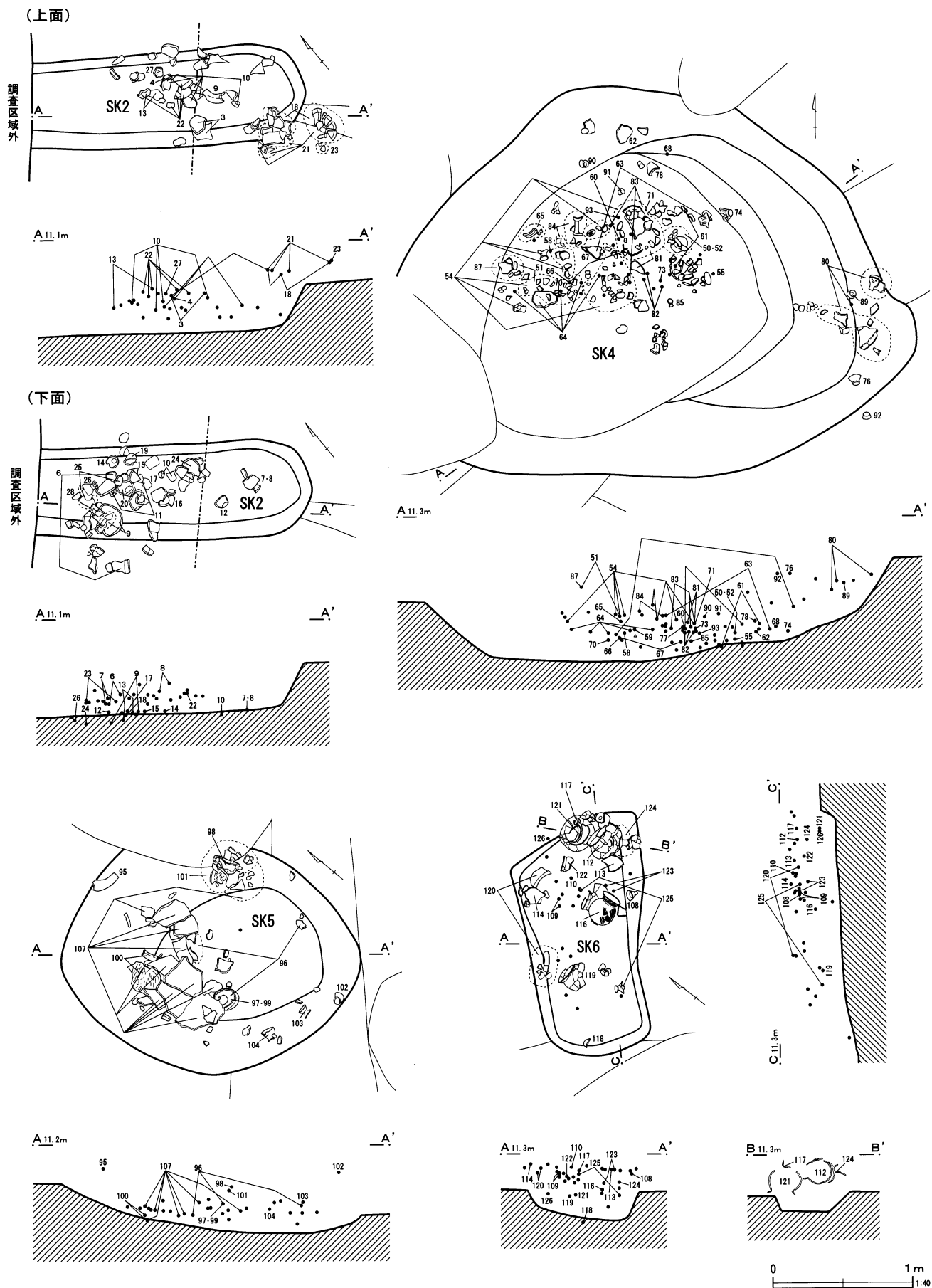
第54号土壌 (第25図)

第11表 土壌一覧表

番号	グリッド	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	主軸方位	平面形態	重複遺構	時代
1	D-5	131	87	36	N-32°-E	長方形	SD6a	古墳前期
2	D-5	(195)	69	13	N-51°-W	長方形	SK51、SD7a・b	古墳前期
3	D-5・6、E-5	389	248	50	N-78°-E	楕円形	SJ1、SK4・9・52、SD7a・b	古墳前期
4	E-5・6	(373)	274	71	N-84°-W	楕円形	SJ1、SX2、SK3・9・52、SD19	古墳前期
5	D-6	212	(148)	33	N-42°-W	楕円形	SJ1、SX2、SE1、SD10	古墳前期
6	E-5	163	80	20	N-48°-E	不整形	SD7a	古墳前期
7	E-6	(98)	(60)	7	N-56°-W	不明	SJ1、SD10・23	古墳前期
8	E-7	64	49	60	N-45°-W	長方形		古墳前期
9	D・E-5・6	246	(118)	50	N-64°-W	楕円形	SJ1、SE1、SK3・4・52	古墳前期
10	D-6	97	97	94	N-27°-E	方形	SJ1、SD10	古墳前期
11	E-8	(296)	174	69	N-47°-E	長方形		古墳前期
12	F-8	232	146	5	N-51°-W	不整形	SX3	古墳前期
13	E-8	88	(36)	18	N-39°-W	楕円形		古墳前期
14	F-8	(344)	158	45	N-33°-W	長方形	SX4、SK20、SD21a・b、28	古墳前期
15	E-6	(171)	121	8	N-51°-W	楕円形	SD26	古墳前期
16	D-7	80	49	23	N-46°-E	長方形		古墳前期
17	E-5	119	83	53	N-62°-E	楕円形		古墳前期
18	E・F-8	322	(166)	16	N-44°-W	不整形		古墳前期
19	D-6	319	202	42	N-38°-E	隅丸長方形	SJ1、SD10・33	古墳前期
20	F-8	94	66	19	N-43°-W	長方形	SK14、SD21a・b	古墳前期
21	F-8	110	(96)	47	N-62°-W	楕円形	SD30	不明
22	F-7	124	110	21	N-81°-W	楕円形		古墳前期
23	F-7	160	116	38	N-36°-E	楕円形	SK53	古墳前期
24	F-7・8	82	56	48	N-8°-W	長方形		古墳前期
25	D-6	120	74	29	N-47°-E	長方形	SB1、SD10・33	不明
26	F-6	126	114	13	N-1°-E	円形		近世以降?
27	欠番							
28	D-6	368	117	52	N-31°-E	長方形	SJ1、SB1、SD10	古墳前期
29	F-7	(146)	112	34	N-59°-E	不整形		古墳前期
30	F-8	158	(78)	28	N-5°-E	楕円形	SX4、SE5	不明
31	D・E-6	116	78	5	N-0°-S	楕円形	SD12・13	不明
32	F-6・7	238	118	17	N-55°-E	不整形	SD37	不明
33	B・C-2・3	451	330	42	N-27°-W	長方形		古墳前期
34	B・C-3	239	172	35	N-61°-W	楕円形		古墳前期
35	B-4	396	189	54	N-87°-E	楕円形	SK36	古墳前期
36	B-4	359	295	19	N-87°-W	楕円形	SK35・37・38	古墳前期
37	B-4	141	(85)	46	N-58°-W	楕円形	SK36・38	古墳前期
38	B-4	87	74	25	N-82°-W	楕円形	SK36・37・39	古墳前期
39	B・C-4	(326)	83	38	N-53°-E	不整形	SK38	古墳前期
40	欠番							
41	B-3	149	144	18	N-56°-W	不整形	SK42	古墳前期
42	B-3	(211)	127	13	N-10°-W	長方形	SK41・43	不明
43	B-3	197	(95)	23	N-7°-E	長方形	SK42	不明
44	C-2	(173)	(41)	57	N-36°-W	不明		不明
45	B・C-2	256	91	25	N-52°-W	長楕円形		古墳前期
46	B・C-4	174	122	31	N-64°-E	不整形		古墳前期
47	欠番							
48	E・F-7	(55)	53	22	N-20°-E	長方形	SD20	古墳前期
49	D-5	(158)	122	14	N-33°-E	楕円形	SD7b・34	近・現代?
50	F-8・9	103	90	21	N-50°-E	円形	SD21a	不明
51	D-5	(233)	158	52	N-43°-W	長方形	SK2、SD7b	不明
52	E-5	-	-	-	-	楕円形?	SK3・4・9	古墳前期
53	F-7	(170)	118	24	N-35°-W	長方形	SK23	古墳前期
54	E-6	(63)	(41)	15	N-45°-W	不明	SD23	不明

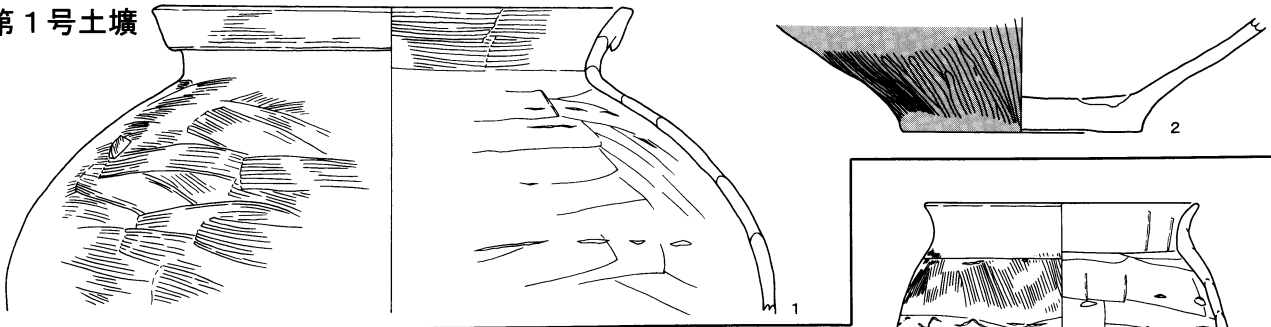
E-6グリッドで検出され、南東側は攪乱に壊されていた。第23号溝跡と重複していた。規模は、長軸63cm以上、短軸41cm以上、深さが15cmであった。主軸方位はN-45°-Wであった。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

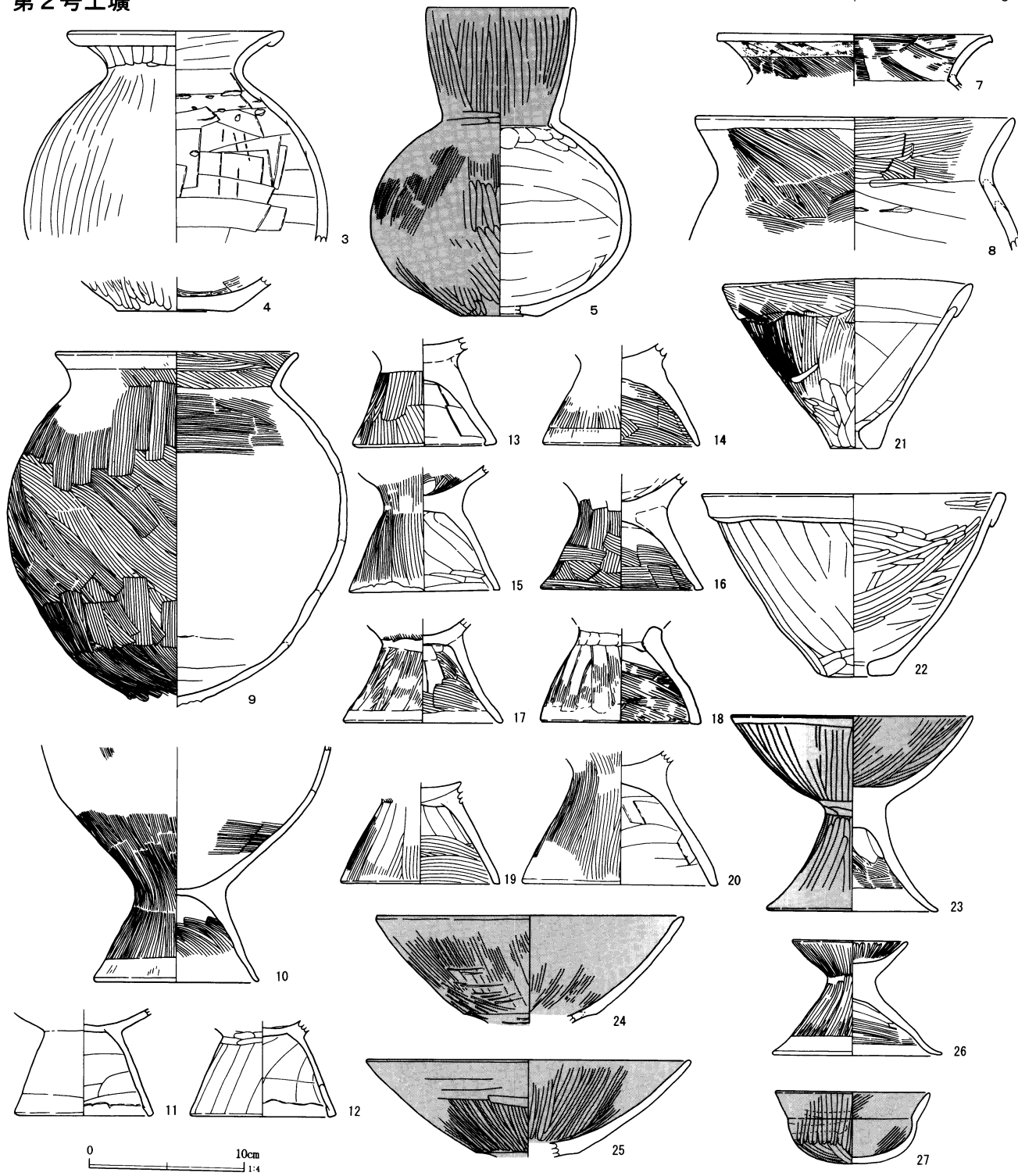


第 29 図 土壤遺物出土状況

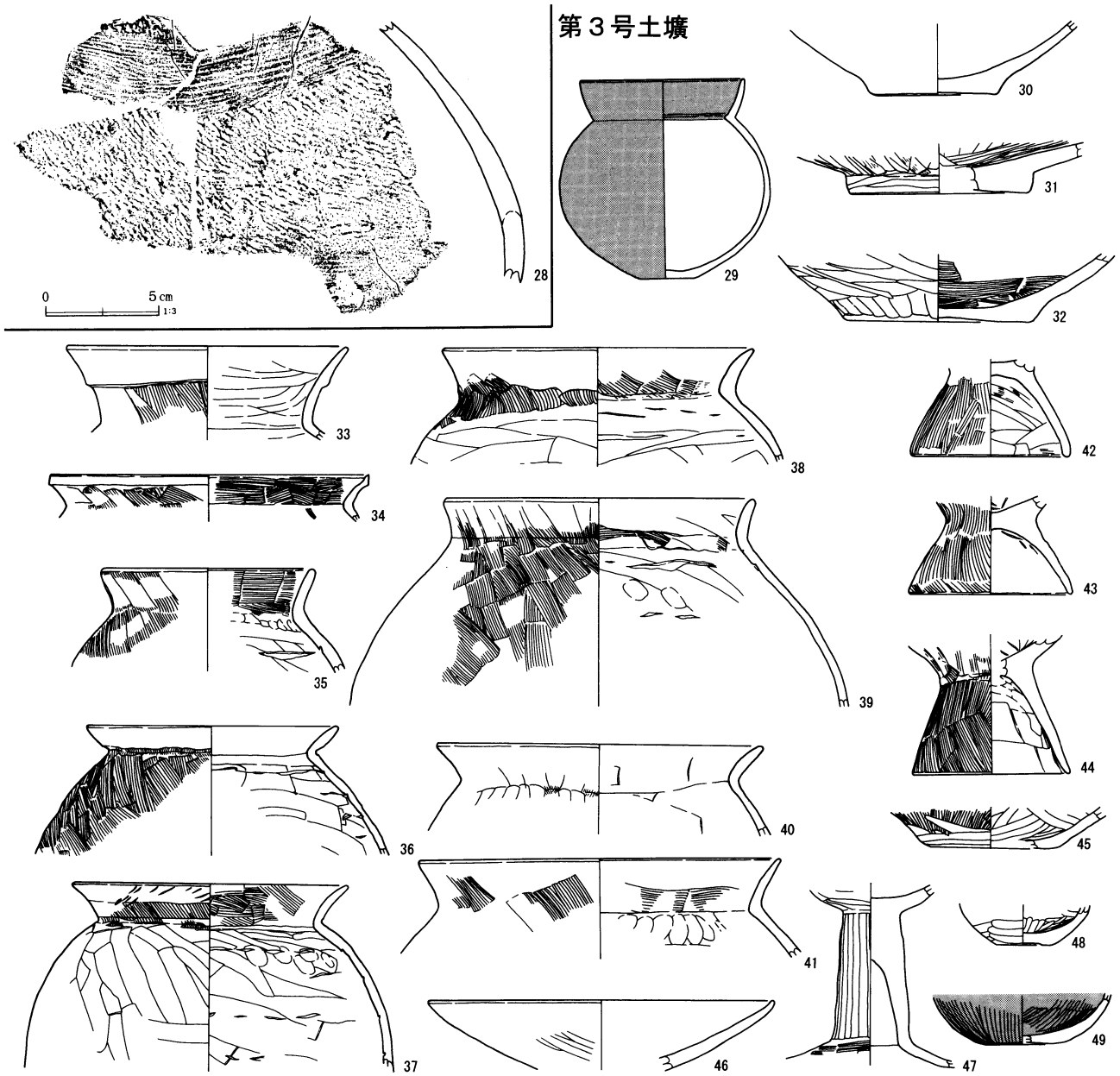
第 1 号土壤



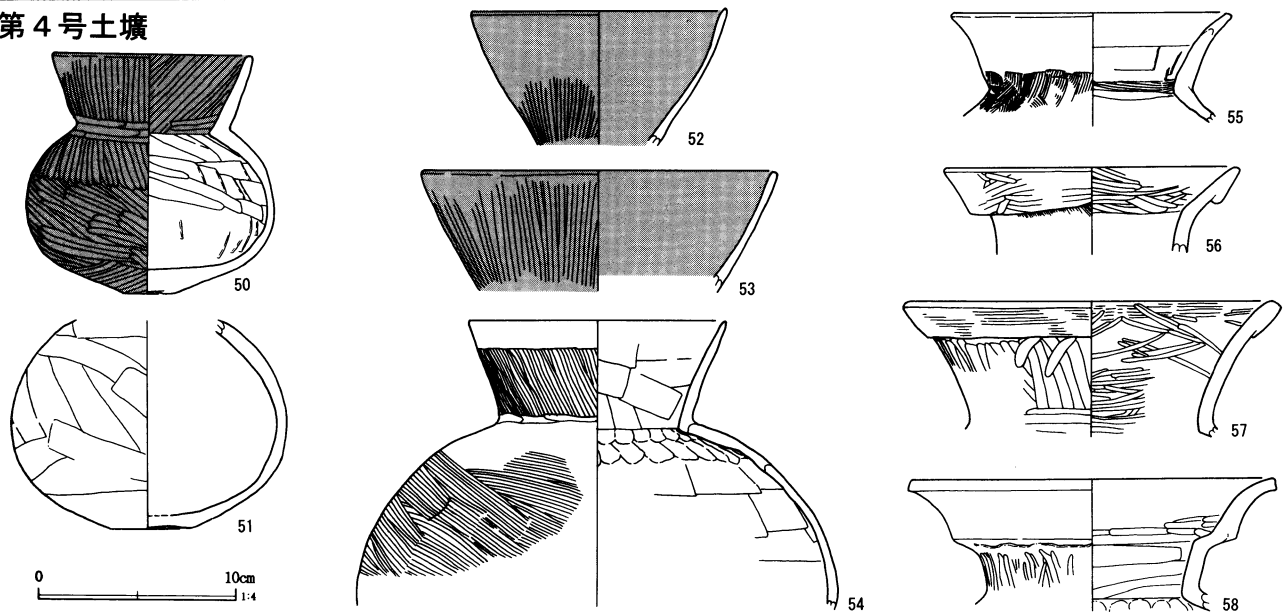
第 2 号土壤



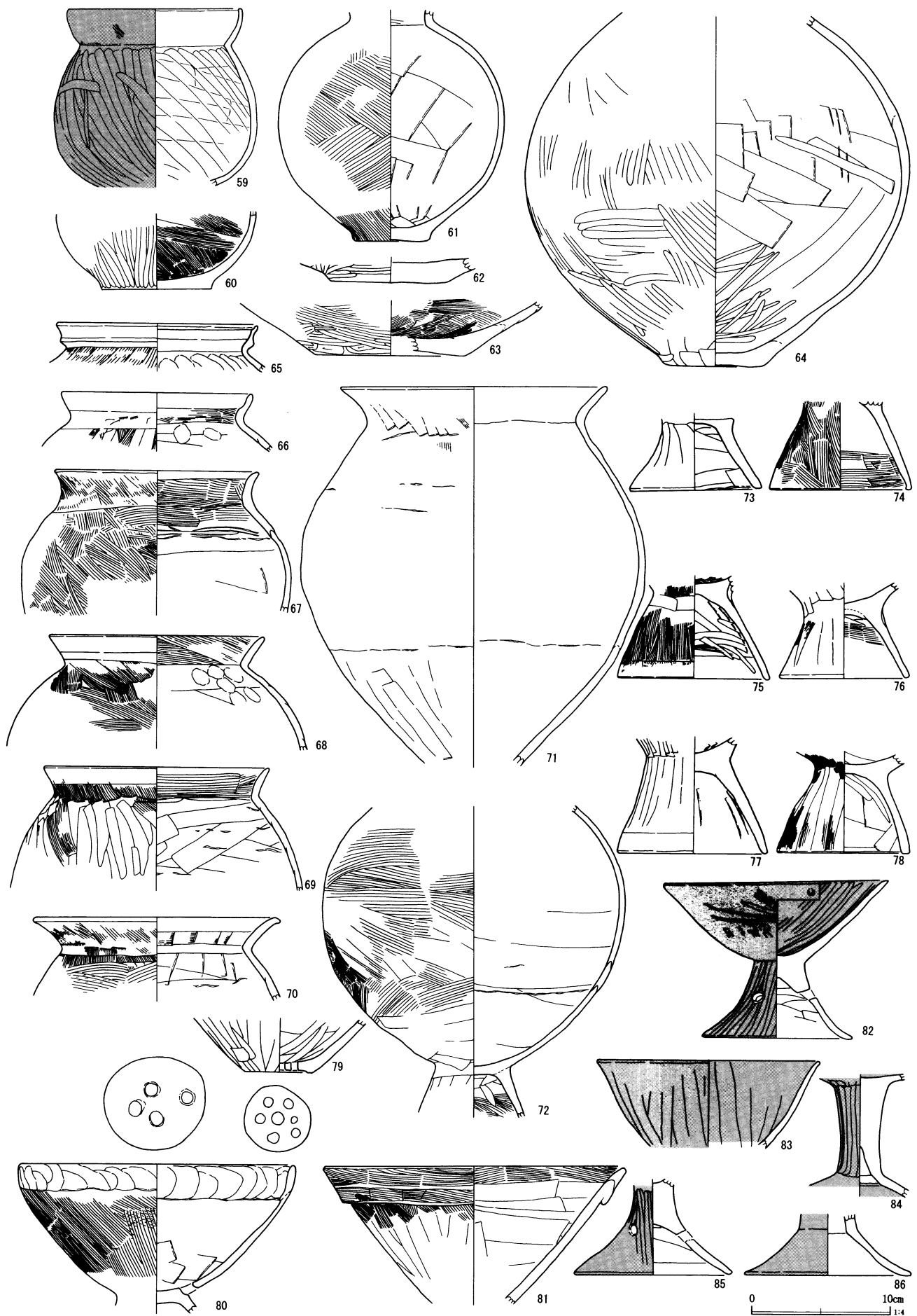
第 30 图 土壤出土遺物 (1)



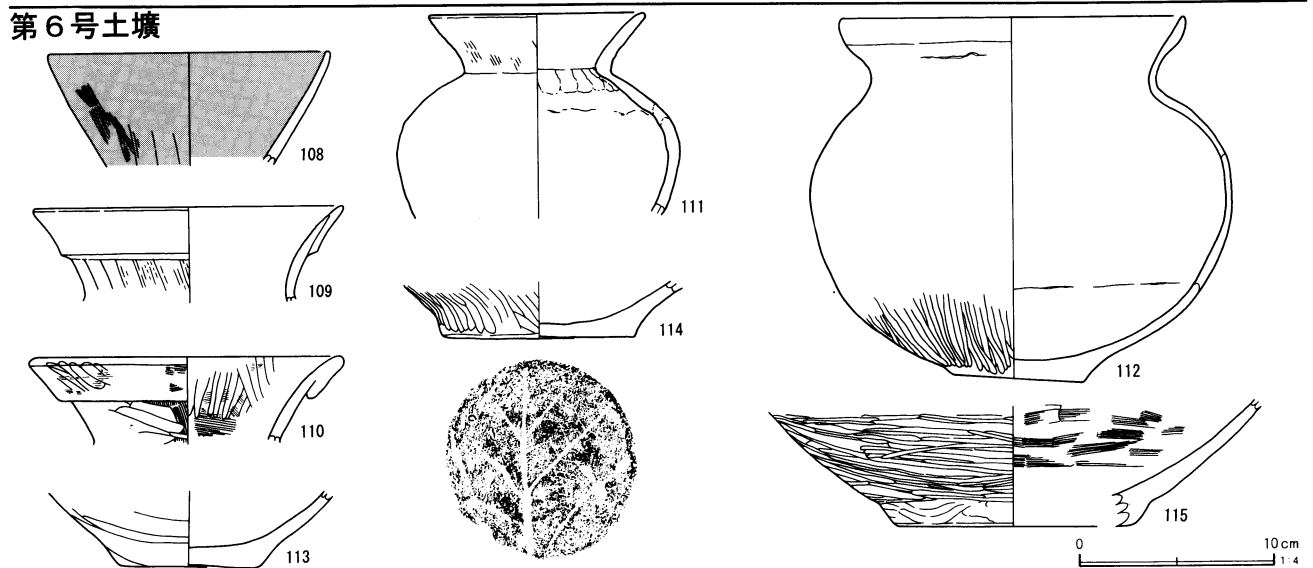
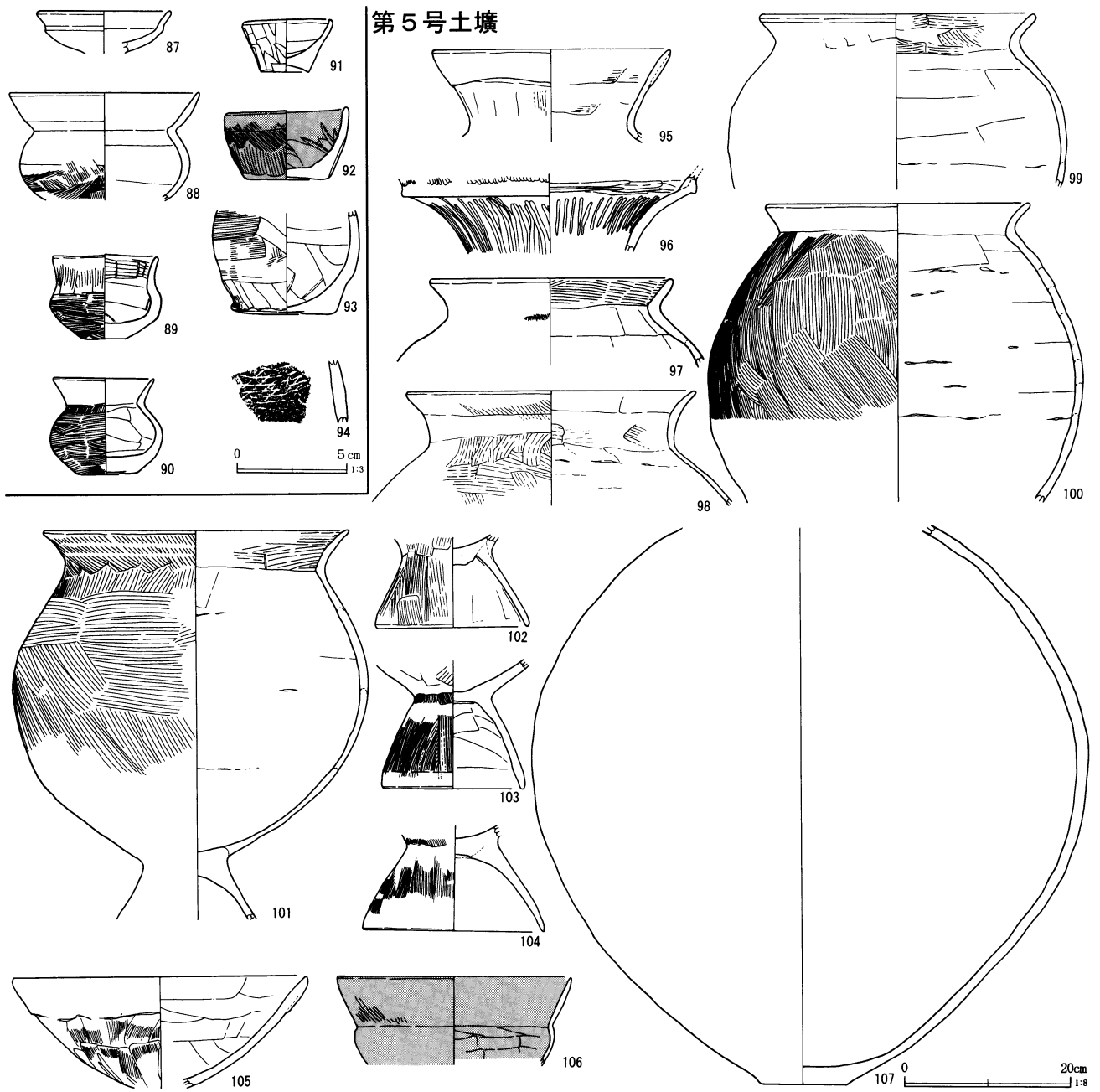
第4号土壤



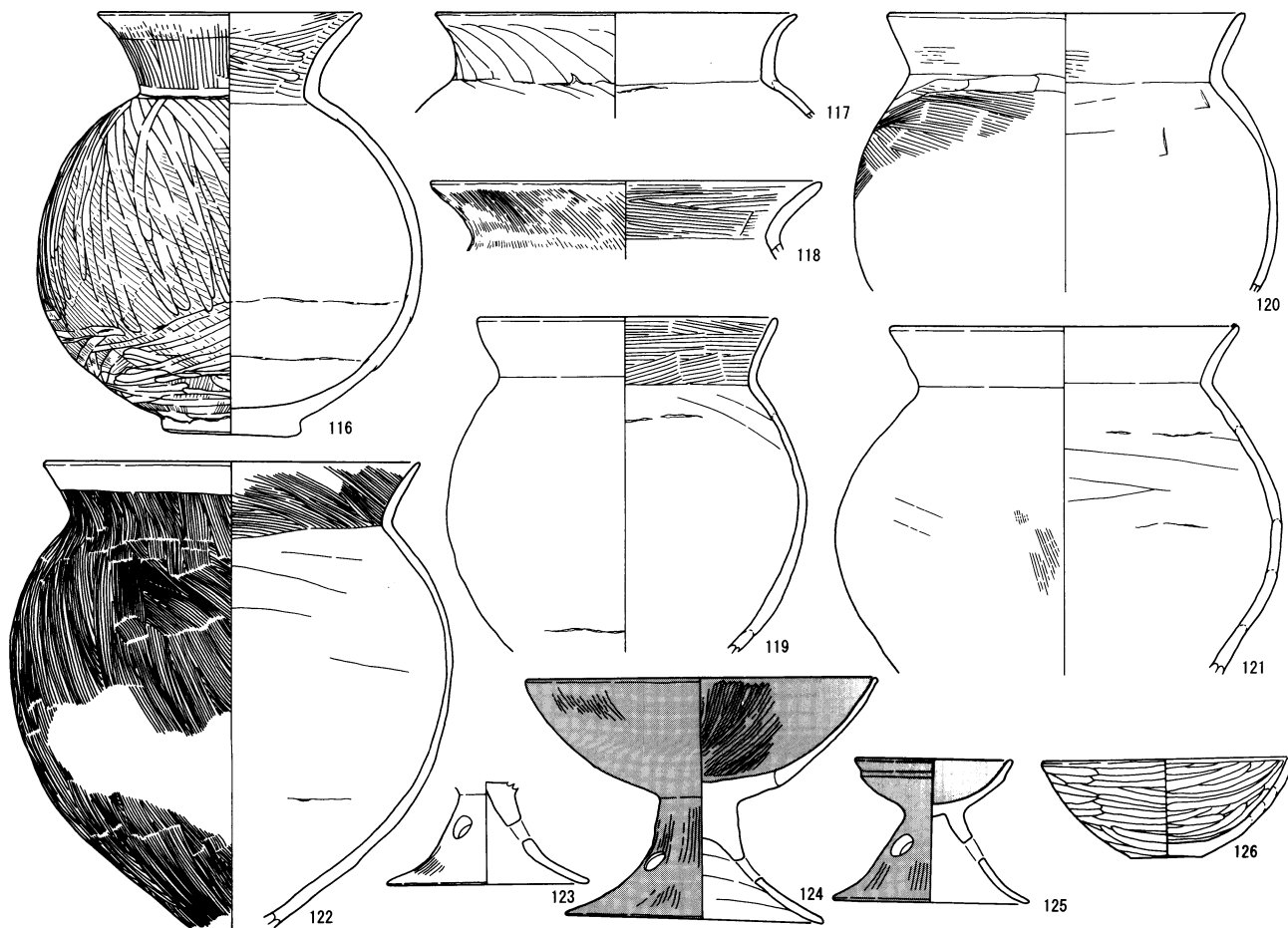
第31图 土壤出土遺物(2)



第 32 图 土壤出土遺物 (3)

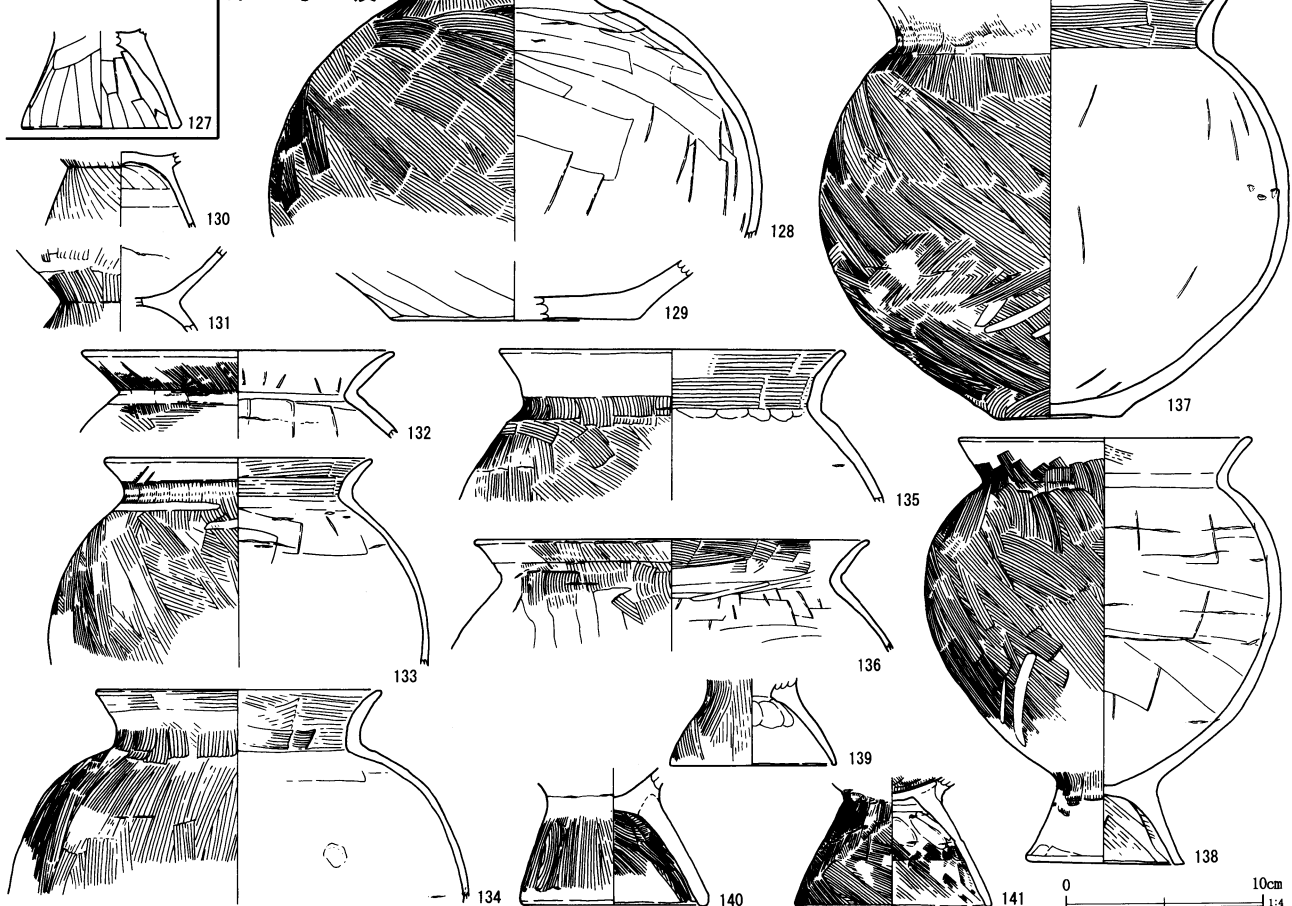


第33图 土壤出土遺物(4)

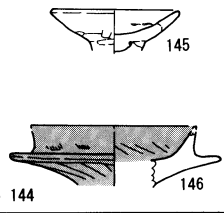
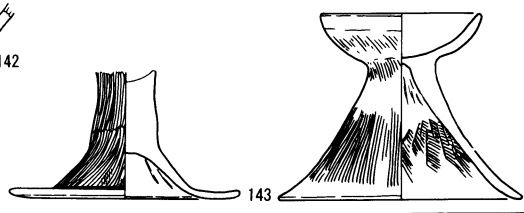
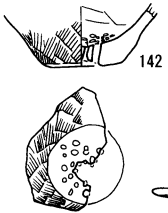


第7号土壤

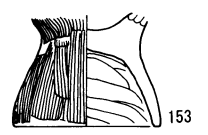
第9号土壤



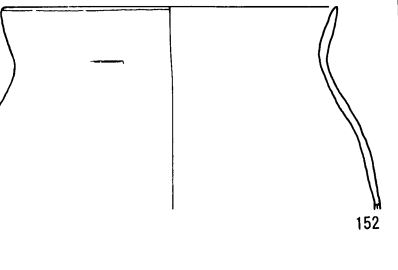
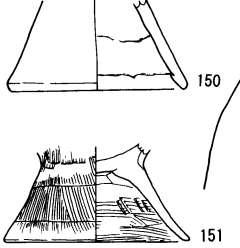
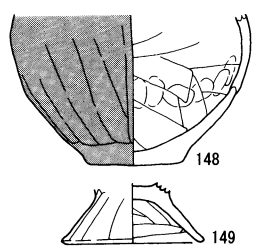
第34图 土壤出土遺物(5)



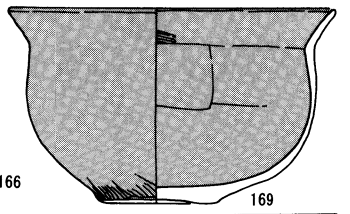
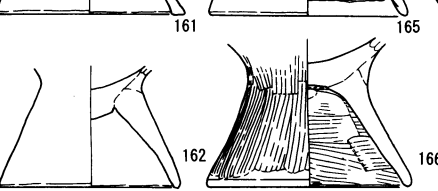
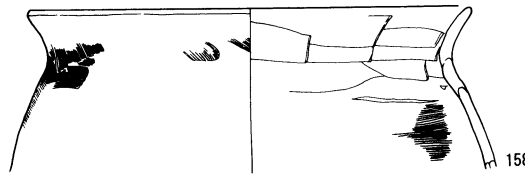
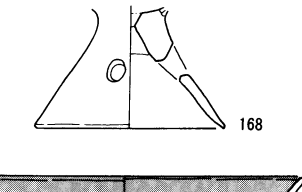
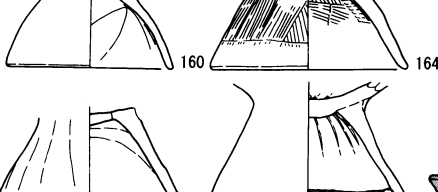
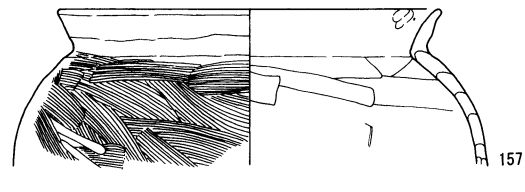
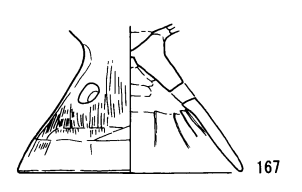
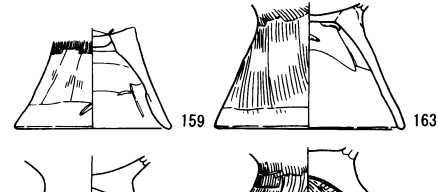
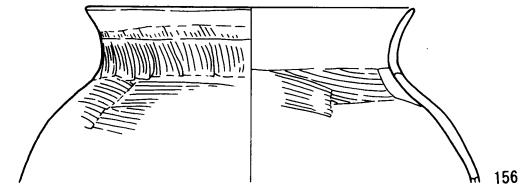
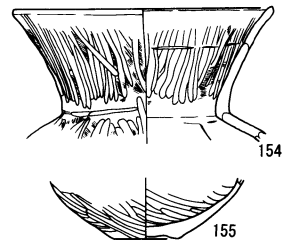
第11号土壤



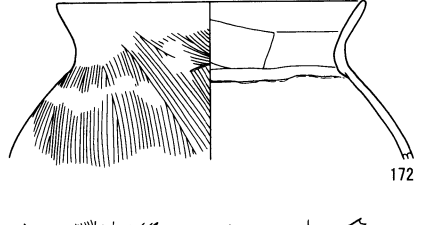
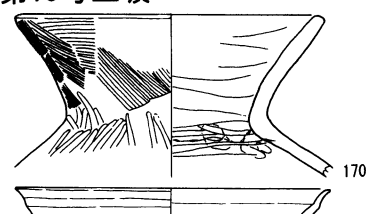
第10号土壤



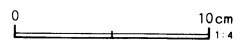
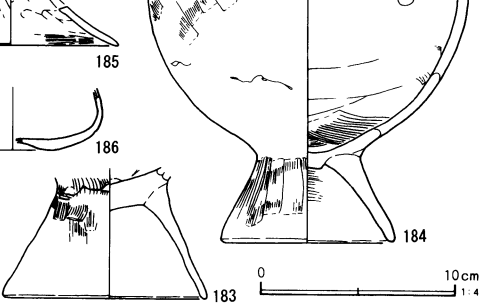
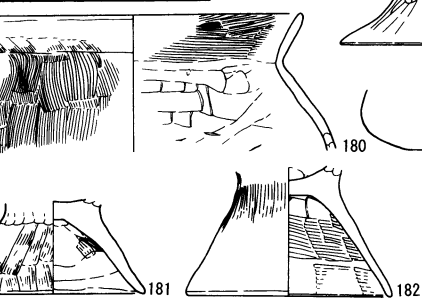
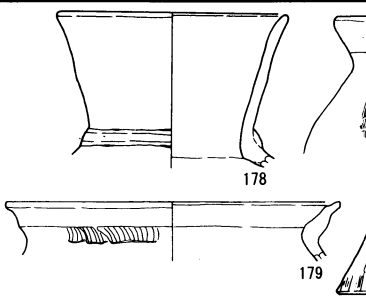
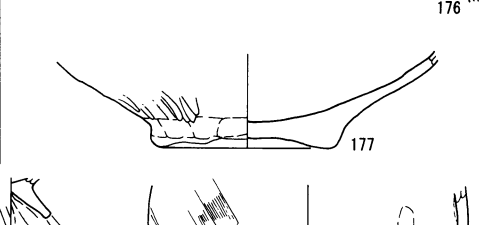
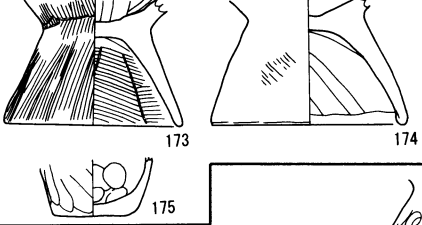
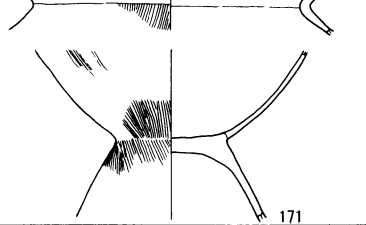
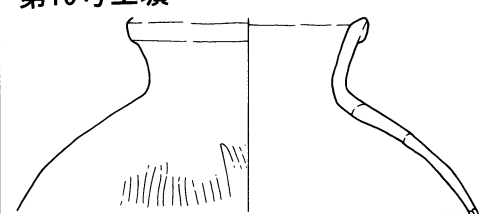
第14号土壤



第15号土壤

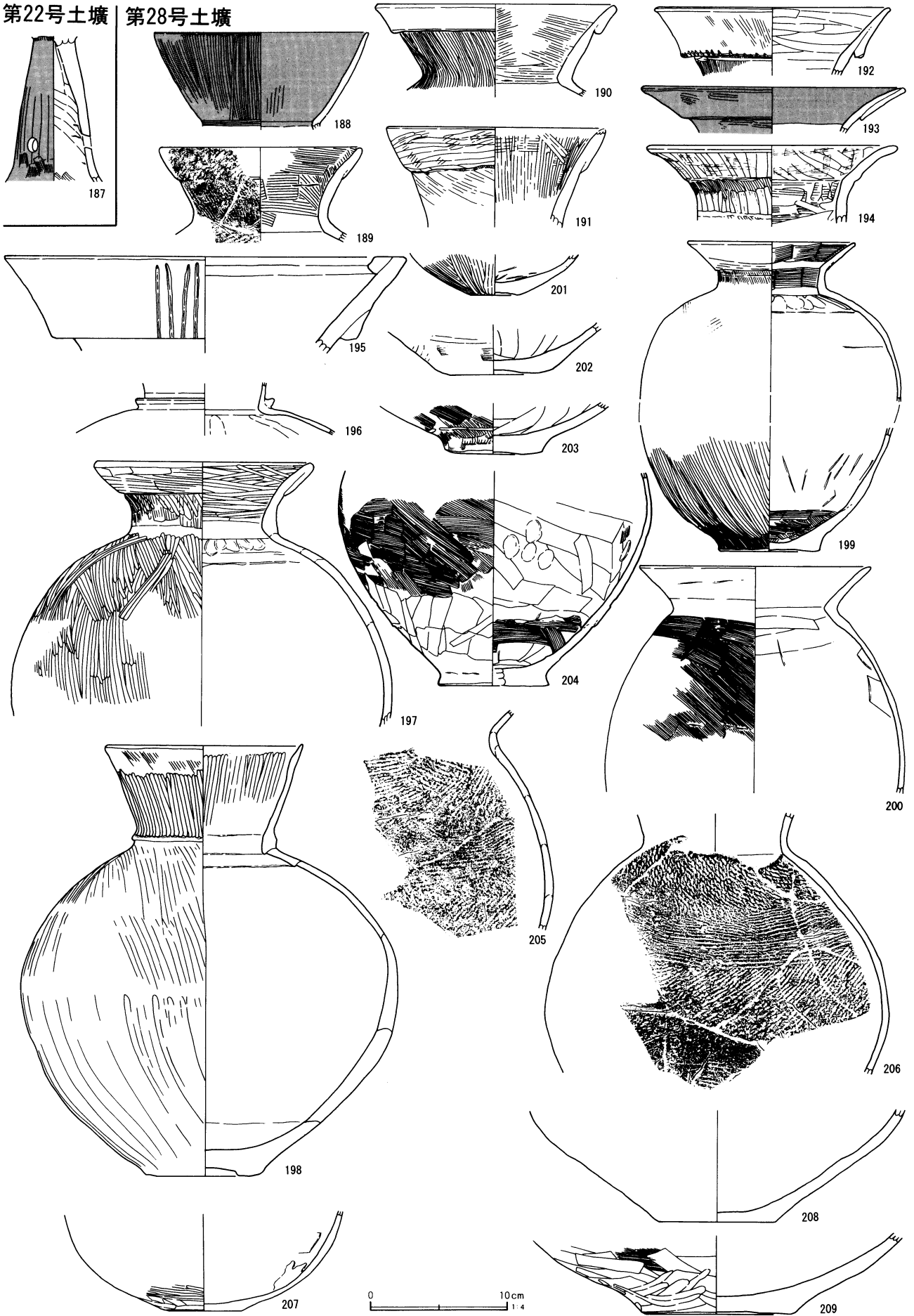


第19号土壤

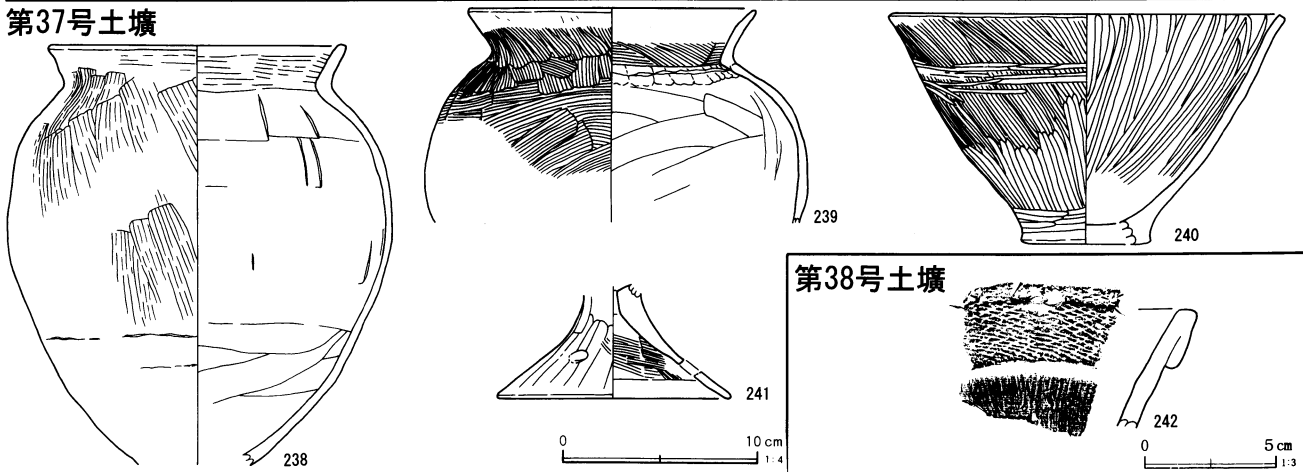
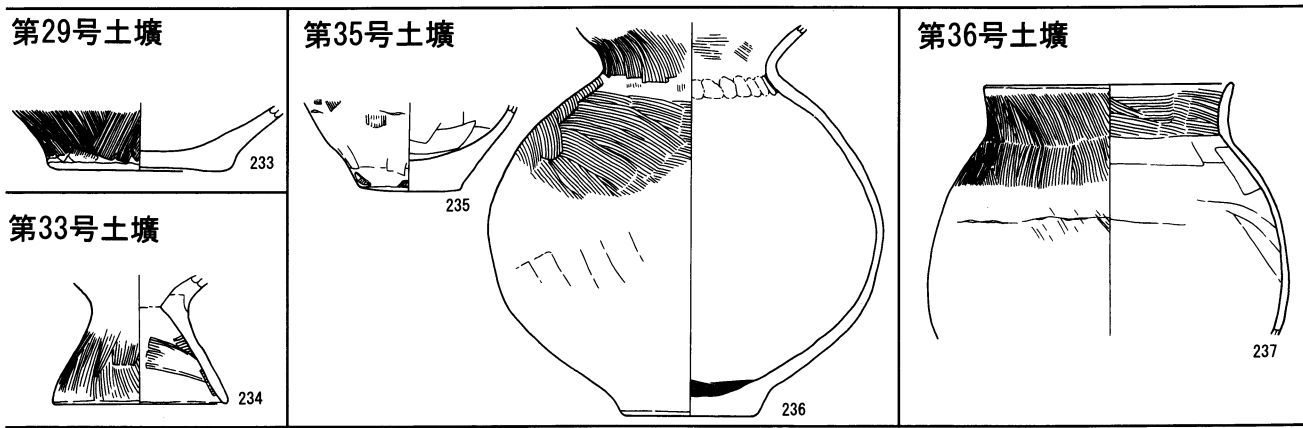
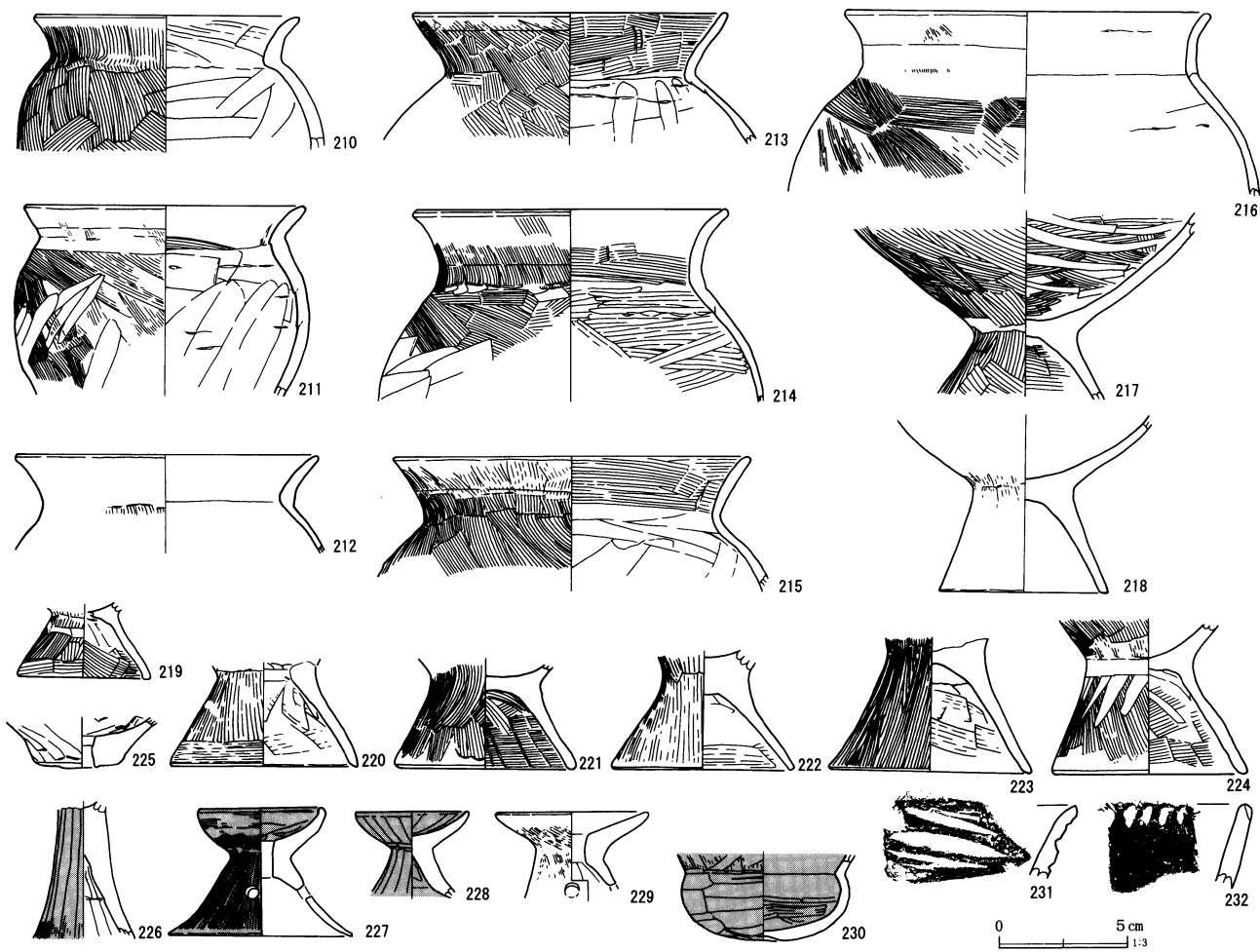


第35图 土壤出土遺物(6)

第22号土壤 | 第28号土壤

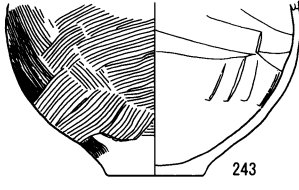


第36图 土壤出土遺物(7)

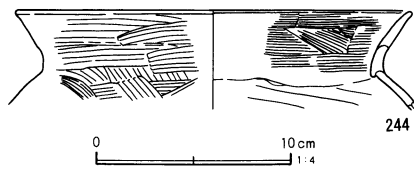


第37图 土壤出土遺物 (8)

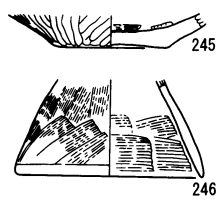
第39号土壤



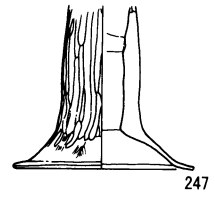
第45号土壤



第46号土壤



第48号土壤



第38図 土壤出土遺物(9)

第12表 土壤出土遺物観察表(1)

遺構	番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
SK 1	1	広口壺	(24.6)	[15.5]	—	EF1	普通	淡黄	35%	No. 1、SD 6 No.31 胴部内面に黒斑
SK 1	2	壺	—	[4.8]	12.0	F	普通	にぶい黄橙	70%	No. 1 外面に赤彩・黒斑 底部に木葉痕が残る
SK 2	3	壺	(13.7)	[13.6]	—	FH	普通	黒	25%	No. 7・33 外面に黒斑
SK 2	4	壺	—	[2.3]	7.6	EFGH	普通	橙	65%	No.15 胴部外面に黒斑
SK 2	5	壺	(9.4)	[20.0]	(5.0)	CEFH	普通	にぶい黄橙	35%	SD 7 南北ベルト 外面・口縁部内面に赤彩
SK 2	6	甕	(13.6)	[7.9]	—	ACGH	普通	にぶい黄橙	50%	No.34・40 内外面に煤付着
SK 2	7	甕	(17.8)	[3.6]	—	EH	良好	にぶい黄橙	15%	No.56 外面に煤付着
SK 2	8	甕	(20.5)	[8.6]	—	EGH	普通	明赤褐	15%	No.56
SK 2	9	台付甕	15.8	[23.0]	—	ADEFH	良好	浅黄橙	75%	No. 9・61・62 胴部内外面に煤付着・黒斑
SK 2	10	台付甕	—	[15.3]	10.6	DEFH	普通	黄橙	85%	No.8・13・25・30~32・45・47 胴部内外面に煤付着
SK 2	11	S字甕	—	[6.9]	8.9	FH	普通	にぶい黄橙	75%	No.73・78 胴部内面に煤付着 摩滅が著しい
SK 2	12	S字甕	—	[6.2]	9.4	CEH	普通	にぶい黄橙	95%	No.55 外面に煤付着
SK 2	13	台付甕	—	[7.0]	(8.2)	CEF	普通	浅黄	70%	No.18・29
SK 2	14	台付甕	—	[6.6]	10.1	CEFH	普通	浅黄	90%	No.71 外面に黒斑
SK 2	15	台付甕	—	[8.1]	(9.8)	EFH	普通	にぶい黄橙	65%	No.72・77 胴部外面に煤付着
SK 2	16	台付甕	—	[7.4]	10.0	EFH	普通	にぶい橙	65%	No.48 脚台部に黒斑
SK 2	17	台付甕	—	[6.8]	(10.2)	CEFHI	普通	にぶい橙	75%	No.74 外面・胴部内面に煤付着
SK 2	18	台付甕	—	[5.2]	(10.2)	DEF	普通	淡黄	65%	No.1・6
SK 2	19	台付甕	—	[6.6]	10.3	CFGH	普通	橙	95%	No.70 摩滅が著しい
SK 2	20	台付甕	—	[8.7]	(12.7)	FGH	普通	にぶい黄橙	75%	No.76 外面・胴部内面に煤付着
SK 2	21	甌	16.0	11.0	3.1	CEG	普通	にぶい黄橙	95%	No. 1・3~5 外面に黒斑
SK 2	22	甌	19.4	11.9	5.0	EFGH	普通	にぶい黄橙	75%	No.11・12・18・26・27 単孔 器面が剥落
SK 2	23	高坏	15.5	[12.6]	(11.0)	FG	普通	にぶい黄橙	70%	No. 2、SD 7 a・7b 外面・坏部内面に赤彩
SK 2	24	高坏	(19.7)	[6.9]	—	EG	普通	橙	20%	No.50 内外面に赤彩 外面に工具痕
SK 2	25	高坏	(20.2)	[6.2]	—	DEG	普通	橙	20%	No.39・65 内外面に赤彩
SK 2	26	器台	7.3	12.4	11.0	Aefg	良好	にぶい黄橙	95%	No.67
SK 2	27	坩	(9.9)	(4.6)	—	CEGH	普通	橙	25%	No.14 内外面に赤彩
SK 2	28	壺	—	—	—	ACEFIK	普通	にぶい黄橙	—	No.66 外面に煤付着 単節 R L 縄文+ハケ目
SK 3	29	壺	9.5	11.7	3.4	H	良好	橙	95%	No.10、SK 4 No.51、SK 9 赤彩 摩滅が著しい
SK 3	30	壺	—	[4.2]	7.1	CEF	普通	明黄褐	70%	No. 5 胴部外面に黒斑 摩滅が著しい
SK 3	31	壺	—	[3.0]	(10.6)	CEF	良好	浅黄	40%	No. 6
SK 3	32	壺	—	[4.0]	11.3	CDEF	普通	淡黄	75%	
SK 3	33	壺	(16.4)	[5.4]	—	EFH	普通	浅黄	25%	摩滅が著しい
SK 3	34	甕	(18.7)	[2.7]	—	CE	普通	灰黄	15%	
SK 3	35	甕	(12.3)	[6.0]	—	CEF	普通	にぶい黄橙	20%	口縁部に煤付着
SK 3	36	甕	(14.8)	[7.6]	—	ACE	普通	灰褐	20%	No.18 内外面に煤付着
SK 3	37	甕	(16.2)	[10.9]	—	ACEF	普通	にぶい橙	20%	No. 8・16
SK 3	38	甕	18.4	[6.8]	—	EF	普通	にぶい黄橙	75%	No.15 外面に煤付着
SK 3	39	甕	(18.4)	[12.1]	—	CEF	普通	暗灰黄	20%	No. 2・16 外面に煤付着
SK 3	40	甕	(19.1)	[5.2]	—	CEK	普通	灰黄	10%	
SK 3	41	甕	(21.4)	[5.8]	—	DEF	普通	浅黄	15%	No.13 摩滅が著しい
SK 3	42	台付甕	—	[5.6]	9.2	EFH	普通	にぶい赤褐	75%	外面に煤付着
SK 3	43	台付甕	—	[5.8]	(9.4)	BEFH	普通	橙	50%	
SK 3	44	台付甕	—	[8.1]	9.1	ACEF	普通	にぶい黄橙	90%	No. 7・17
SK 3	45	甕	—	[2.4]	7.8	CEF	普通	灰黄	75%	内外面に煤付着
SK 3	46	高坏	(20.3)	[4.1]	—	EFH	普通	橙	20%	No.12 摩滅が著しい
SK 3	47	高坏	—	[10.2]	—	CEF	普通	浅黄	85%	No.11 外面・坏部内面に煤付着
SK 3	48	坩	—	[2.4]	3.2	CEF	普通	明黄褐	50%	底部はドーナツ状
SK 3	49	坩	—	[2.9]	(4.6)	ACEF	普通	灰黄	35%	内外面に赤彩
SK 4	50	壺	10.0	12.1	2.6	EFG	良好	橙	80%	No.42 赤彩 胴部外面に黒斑 上げ底状の底部

第13表 土壌出土遺物観察表(2)

遺構	番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
SK 4	51	壺	—	[10.5]	4.0	FG	普通	にぶい橙	35%	No.16・30 摩滅が著しい
SK 4	52	壺	(12.8)	[6.8]	—	G	普通	浅黄	25%	No.42 内外面に赤彩 摩滅が著しい
SK 4	53	壺	(17.8)	[6.1]	—	G	普通	浅黄	20%	内外面に赤彩 摩滅が著しい
SK 4	54	壺	(13.2)	[14.6]	—	FH	良好	明赤褐	60%	No.17・22・28・30・33 外面に黒斑 器面が剥落
SK 4	55	壺	14.0	[5.5]	—	EG	良好	橙	90%	No.55
SK 4	56	壺	(14.6)	[4.2]	—	CEG	普通	暗褐	75%	
SK 4	57	壺	(18.2)	[6.9]	—	AEG	良好	にぶい黄褐	25%	
SK 4	58	壺	18.3	[6.6]	—	CFG	良好	にぶい黄橙	100%	No.50
SK 4	59	壺	(12.3)	[12.8]	—	CGH	普通	橙	25%	No.47 外面は赤彩
SK 4	60	壺	—	[5.5]	8.0	FH	普通	浅黄	70%	No.54 底面に木葉痕
SK 4	61	壺	—	[14.0]	5.6	CEGH	普通	浅黄	30%	No.38・72 胴部下半外面に黒斑
SK 4	62	壺	—	[2.6]	8.4	EG	普通	明赤褐	90%	No.13
SK 4	63	壺	—	[4.0]	(10.9)	EG	良好	明黄褐	35%	No.26・39 外面に黒斑
SK 4	64	壺	—	[25.3]	7.3	AEF	普通	にぶい黄橙	70%	No.31・45・46・49・58 胴部外面に煤付着・黒斑
SK 4	65	S字甕	(14.4)	[3.3]	—	EH	普通	にぶい黄橙	25%	No.18
SK 4	66	甕	(13.7)	[4.1]	—	CEG	普通	橙	20%	No.73
SK 4	67	甕	(14.5)	[10.5]	—	EFG	良好	橙	25%	No.73・75 内外面に煤付着
SK 4	68	甕	(15.4)	[8.1]	—	AEG	普通	にぶい黄褐	20%	No.84 内外面に煤付着
SK 4	69	甕	(16.2)	[8.9]	—	EFH	普通	橙	30%	内外面に煤付着
SK 4	70	甕	(17.4)	[6.0]	—	AFJ	普通	灰白	25%	No.83 内外面に煤付着
SK 4	71	台付甕	19.2	[27.3]	—	BDFK	普通	橙	65%	No.32 内外面に煤付着 摩滅が著しい
SK 4	72	台付甕	—	[22.5]	—	EG	普通	褐	75%	胴部内外面に煤付着
SK 4	73	台付甕	—	[5.7]	9.6	EFG	普通	橙	60%	No.64
SK 4	74	台付甕	—	[6.4]	10.2	FI	良好	にぶい黄褐	95%	No.40
SK 4	75	台付甕	—	[7.5]	11.0	ADEG	良好	橙	65%	No.68
SK 4	76	台付甕	—	[6.9]	9.4	AFGH	良好	明黄褐	90%	E-6GNo.9
SK 4	77	台付甕	—	[8.4]	10.8	ADEG	普通	浅黄	65%	No.61 摩滅が著しい
SK 4	78	台付甕	—	[7.4]	9.6	EFJ	良好	にぶい黄橙	75%	No.15 胴部内面に煤付着
SK 4	79	甌	—	[3.9]	4.8	DH	良好	にぶい褐	75%	多孔の底面 孔7 外面に黒斑
SK 4	80	台付甌	(19.8)	[10.8]	—	EG	普通	橙	75%	No.2・5・85 底部周辺に4孔 脚台部が付く
SK 4	81	甌	21.6	[10.0]	—	FGH	良好	褐	70%	No.32・35 内外面に黒斑
SK 4	82	高坏	16.0	11.2	(10.8)	AEGH	普通	橙	80%	No.60・63・65 赤彩 透孔3 口縁部に小孔
SK 4	83	高坏	(15.9)	[6.3]	—	FH	良好	にぶい赤褐	25%	No.32・53・59 赤彩 口縁部外面に黒斑
SK 4	84	高坏	—	[8.9]	—	AEG	良好	橙	85%	No.19・25 外面・坏部内面・裾部内面に赤彩
SK 4	85	高坏	—	[6.9]	(11.4)	DG	良好	橙	15%	No.43 外面に赤彩 透孔3
SK 4	86	高坏	—	[4.4]	(12.0)	G	普通	にぶい橙	25%	外面に赤彩 摩滅が著しい
SK 4	87	器台	(7.9)	[2.5]	—	FGH	普通	橙	35%	No.16 摩滅が著しい 赤彩?
SK 4	88	鉢	(11.4)	[6.5]	—	CGH	良好	橙	25%	
SK 4	89	ミニチュア	6.2	5.1	2.7	EG	普通	橙	95%	No.3 外面に黒斑
SK 4	90	ミニチュア	6.0	5.8	3.8	EGH	良好	にぶい黄橙	95%	No.11 底部はドーナツ状
SK 4	91	ミニチュア	5.4	3.2	2.9	GH	良好	にぶい褐	100%	No.10 外面に黒斑 上げ底
SK 4	92	鉢	7.3	4.2	4.8	EG	普通	にぶい黄橙	100%	E-6GNo.10 内外面に赤彩
SK 4	93	鉢	—	[6.1]	6.3	CEGH	普通	にぶい黄橙	75%	No.52 外面に黒斑 底部はドーナツ状
SK 4	94	壺	—	—	—	EF	普通	淡黄	—	胴部下半外面に赤彩 網目状捺糸文
SK 5	95	壺	(14.3)	[5.6]	—	AFGI	普通	にぶい褐	40%	No.17 摩滅が著しい
SK 5	96	壺	—	[4.8]	—	CFH	良好	にぶい褐	90%	No.11・20・30 内外面に煤付着
SK 5	97	甕	14.8	[5.3]	—	EFGK	普通	橙	45%	No.20 内外面に煤付着
SK 5	98	甕	(17.4)	[6.9]	—	AEEFGH	良好	褐灰	25%	No.34 内外面に煤付着
SK 5	99	甕	(16.4)	[10.4]	—	ACEG	良好	褐灰	25%	No.20 器面が剥落
SK 5	100	甕	16.0	[18.0]	—	EFGK	普通	橙	55%	No.7・37 外面に煤付着 外面下半は器面剥落
SK 5	101	台付甕	18.4	23.5	—	AEFI	普通	橙	90%	No.35 内外面に煤 二次的加熱のため器面剥落
SK 5	102	台付甕	—	[5.5]	9.0	AEEFG	普通	橙	95%	No.27
SK 5	103	台付甕	—	[7.8]	8.4	ADEFG	良好	にぶい橙	90%	No.26 胴部内面に煤付着
SK 5	104	台付甕	—	[6.4]	10.8	BCEFG	普通	橙	85%	No.23 外面に煤付着 摩滅が著しい
SK 5	105	甌	(17.7)	[6.8]	—	ABG	良好	黄橙	20%	
SK 5	106	罎	(14.1)	[5.3]	—	AFH	普通	にぶい黄橙	25%	内外面に赤彩 外面の器面剥落
SK 5	107	大型壺	—	[67.4]	10.6	CEF	普通	橙	85%	No.1・9・36、SK22、SK28 摩滅が著しい
SK 6	108	壺	(14.1)	[5.7]	—	EGH	普通	にぶい黄橙	5%	E-5GNo.36 内外面に赤彩
SK 6	109	壺	(15.5)	[4.7]	—	EFGH	普通	浅黄橙	35%	E-5GNo.25・26 摩滅が著しい

第14表 土壌出土遺物観察表(3)

遺構	番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
SK 6	110	壺	(15.5)	[4.3]	—	EGH	普通	橙	10%	E-5GNo.23
SK 6	111	壺	(11.0)	[10.3]	—	EFIK	普通	橙	70%	E-5GNo.1・5・6 摩滅が著しい 赤彩?
SK 6	112	広口壺	17.6	18.6	6.7	DEFIK	普通	黄橙	95%	E-5GNo.45 外面上半の摩滅が著しい
SK 6	113	壺	—	[3.9]	7.0	EFG	良好	にぶい黄橙	80%	E-5GNo.38 胴部外面に黒斑
SK 6	114	壺	—	[2.8]	9.8	EFG	普通	橙	90%	E-5GNo.19 底部に木葉痕
SK 6	115	壺	—	[6.2]	(12.0)	GH	良好	にぶい褐	10%	
SK 6	116	壺	13.4	21.4	7.1	CDEFG	普通	にぶい橙	100%	E-5GNo.33
SK 6	117	甕	(18.2)	[5.3]	—	EGH	普通	明黄褐	25%	E-5GNo.43 摩滅が著しい
SK 6	118	甕	(20.0)	[4.0]	—	F	普通	にぶい赤褐	15%	No.1
SK 6	119	甕	15.2	[17.0]	—	BDEFIK	普通	橙	80%	E-5GNo.13 摩滅が著しい
SK 6	120	甕	(18.2)	[14.1]	—	EFG	普通	黒褐	30%	E-5GNo.9・20 外面に煤付着
SK 6	121	甕	17.8	[17.7]	—	EFHIK	普通	黄橙	80%	E-5GNo.44 摩滅が著しい
SK 6	122	台付甕	(19.2)	[23.7]	—	AFH	普通	橙	30%	E-5GNo.30 内外面に煤付着 歪みが著しい
SK 6	123	高坏	—	[5.2]	(10.3)	AEGH	普通	橙	80%	E-5GNo.32・35 透孔3 摩滅が著しい 赤彩?
SK 6	124	高坏	(18.0)	[12.5]	(13.2)	DEFG	普通	橙	65%	E-5GNo.41 赤彩 裾部内外面に黒斑 透孔3
SK 6	125	器台	8.0	7.3	10.0	CEGH	普通	橙	75%	E-5GNo.17・29 赤彩 透孔3 摩滅が著しい
SK 6	126	鉢	12.5	5.0	3.5	CEGH	良好	浅黄	70%	E-5GNo.31 外面に黒斑
SK 7	127	台付甕	—	[5.0]	8.1	EF	普通	暗褐	95%	E-6GNo.35 内外面に煤付着
SK 9	128	壺	—	[13.1]	—	ACEFG	普通	にぶい橙	50%	内面に煤付着
SK 9	129	壺	—	[3.0]	(12.8)	ACEGHK	普通	浅黄橙	25%	
SK 9	130	S字甕	—	[3.7]	—	AFHI	普通	浅黄橙	50%	内外面に煤付着 胎土に金雲母
SK 9	131	S字甕	—	[4.4]	—	FH	普通	灰黄褐	15%	外面に煤付着
SK 9	132	甕	(15.8)	[4.4]	—	CEGHJK	普通	にぶい黄橙	15%	外面に煤付着
SK 9	133	甕	(13.6)	[10.4]	—	AFGH	良好	にぶい黄橙	25%	No.9 外面に煤付着
SK 9	134	甕	(14.4)	[10.7]	—	BEFGH	普通	にぶい黄橙	25%	No.3 外面に煤付着
SK 9	135	甕	(17.6)	[7.7]	—	AEF	普通	にぶい橙	25%	内外面に黒斑
SK 9	136	甕	(20.0)	[5.6]	—	CEHK	良好	にぶい褐	10%	内面に黒斑
SK 9	137	甕	18.0	22.3	6.4	ACEF	良好	にぶい黄橙	80%	No.1 内面に煤付着 口縁端部は指頭圧痕
SK 9	138	台付甕	14.6	19.5	8.0	EFGHK	普通	灰黄褐	95%	No.7 外面に煤付着 外面の器面剥落
SK 9	139	台付甕	—	[4.4]	(8.4)	FGH	良好	浅黄橙	25%	外面は摩滅
SK 9	140	台付甕	—	[7.0]	(9.4)	DE	普通	浅黄橙	60%	No.10 胴部内面に煤付着
SK 9	141	台付甕	—	[6.5]	(10.0)	CEFGHJ	普通	にぶい黄橙	50%	No.8 外面・胴部内面に煤付着
SK 9	142	甕	—	[2.9]	4.0	AG	普通	にぶい橙	35%	多孔の底面 孔径2~3mm
SK 9	143	高坏	—	[6.4]	(11.6)	ACFGH	良好	にぶい黄橙	75%	
SK 9	144	器台	(8.0)	9.4	12.3	AG	良好	灰白	70%	脚部内面に黒斑
SK 9	145	器台	6.4	[2.1]	—	EH	良好	橙	100%	No.6 口縁部内外面に黒斑
SK 9	146	器台	—	[2.8]	—	AEG	普通	淡黄	35%	内外面に赤彩
SK 9	147	器台	—	[3.9]	—	AEGJ	普通	にぶい褐	90%	No.2 透孔4 外面に煤付着 赤彩?
SK10	148	壺	—	[7.7]	5.0	CEG	普通	橙	70%	No.1 外面に赤彩 摩滅が著しい
SK10	149	台付甕	—	[3.1]	(7.3)	EG	普通	明赤褐	35%	
SK10	150	台付甕	—	[4.7]	(9.2)	G	普通	橙	20%	S字甕か? 摩滅が著しい
SK10	151	台付甕	—	[4.9]	9.4	EG	普通	にぶい黄橙	70%	
SK10	152	甕	(17.0)	[10.3]	—	EFHK	普通	橙	20%	No.1 外面に煤付着 器面が剥落
SK11	153	台付甕	—	[5.7]	7.4	AEEFG	普通	明赤褐	95%	No.1
SK14	154	壺	(13.1)	[6.8]	—	CFI	良好	にぶい橙	30%	No.9 内面は黒く変色
SK14	155	壺	—	[3.1]	3.2	AEFK	良好	灰褐	70%	No.8・9 外面に煤付着
SK14	156	甕	(16.5)	[8.9]	—	EFK	普通	橙	60%	No.5 内外面に煤付着
SK14	157	甕	(19.6)	[7.9]	—	EFK	普通	にぶい赤褐	25%	内外面に煤付着
SK14	158	甕	(22.4)	[8.2]	—	DEF	普通	にぶい黄橙	35%	外面に煤付着 外面は摩滅
SK14	159	台付甕	—	[5.1]	8.0	CDEF	普通	灰白	100%	No.12 外面に煤付着 内外面に黒斑
SK14	160	台付甕	—	[5.8]	8.5	DEF	普通	橙	95%	No.16 外面に煤付着
SK14	161	台付甕	—	[5.5]	9.6	EHK	普通	にぶい橙	100%	No.3 胴部内面に煤付着
SK14	162	台付甕	—	[6.1]	9.3	DEFG	普通	にぶい橙	85%	No.16 摩滅が著しい
SK14	163	台付甕	—	[6.4]	9.6	CDEF	普通	にぶい橙	70%	胴部内面に煤付着
SK14	164	台付甕	—	[6.2]	10.0	CDEF	普通	にぶい黄橙	75%	No.9 外面に煤付着
SK14	165	台付甕	—	[6.3]	10.0	EFK	普通	にぶい橙	95%	内外面に煤付着 摩滅が著しい
SK14	166	台付甕	—	[7.5]	10.3	CEFK	普通	橙	100%	
SK14	167	高坏	—	[7.5]	11.2	EFK	普通	橙	95%	透孔3 外面に黒斑
SK14	168	高坏	—	[5.1]	9.6	CEFK	普通	明赤褐	80%	No.4 透孔3 器面が剥落

第15表 土壌出土遺物観察表(4)

遺構	番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
SK14	169	鉢	(16.5)	9.9	6.2	EFK	普通	にぶい橙	70%	No.7 内外面に赤彩 胴部に黒斑
SK15	170	壺	(15.0)	[8.3]	—	EG	普通	橙	70%	E-6GNo.26
SK15	171	S字甕	(16.0)	—	—	FG	良好	淡黄	35%	E-6GNo.19,SD26 外面に煤付着 摩滅が著しい
SK15	172	甕	(15.4)	[8.0]	—	EG	普通	にぶい黄橙	35%	E-6GNo.20 摩滅が著しい
SK15	173	台付甕	—	[6.5]	9.1	EG	普通	橙	70%	E-6GNo.24 胴部内面に煤付着
SK15	174	台付甕	—	[6.6]	10.0	EFG	普通	橙	75%	E-6GNo.25 摩滅が著しい
SK15	175	手捏	—	[2.9]	3.9	GH	普通	にぶい黄橙	90%	E-6GNo.16
SK19	176	壺	—	[9.8]	—	DEFIK	普通	にぶい橙	35%	No.8 摩滅が著しい 赤彩?
SK19	177	壺	—	[4.8]	9.3	CEFHK	普通	黄橙	65%	No.8 摩滅が著しい
SK19	178	壺	(11.5)	[7.7]	—	EFIK	普通	にぶい黄橙	50%	No.2 頸部に突帯 摩滅が著しい
SK19	179	S字甕	(17.0)	[3.0]	—	CEFI	普通	にぶい橙	10%	
SK19	180	甕	(17.0)	[6.9]	—	FHI	普通	にぶい橙	20%	外面に煤付着
SK19	181	台付甕	—	[4.8]	9.0	CEF	普通	にぶい黄橙	95%	No.1 外面に煤付着
SK19	182	台付甕	—	[6.5]	(10.4)	EFH	普通	橙	40%	No.5 胴部内面に煤付着 摩滅が著しい
SK19	183	台付甕	—	[6.6]	(10.2)	EFHIK	普通	にぶい黄橙	80%	No.7 摩滅が著しい
SK19	184	台付甕	—	[14.2]	8.6	CEFIK	普通	にぶい黄橙	35%	No.4 摩滅が著しい
SK19	185	高坏	—	[4.6]	(10.8)	CEFH	普通	橙	60%	透孔3 摩滅が著しい
SK19	186	罎	—	[3.2]	(4.2)	DEIK	普通	橙	45%	No.6 上げ底 摩滅が著しい 赤彩は不明
SK22	187	高坏	—	[10.4]	—	CEFIK	普通	浅黄橙	75%	透孔3 外面に赤彩 外面は摩滅
SK28	188	壺	(15.3)	[7.0]	—	EGHK	普通	にぶい橙	30%	内外面に赤彩 摩滅が著しい
SK28	189	壺	(14.2)	[6.8]	—	EFGK	普通	にぶい橙	50%	No.32 口縁部に単節LR縄文 摩滅が著しい
SK28	190	壺	(17.0)	[6.7]	—	CEGHK	普通	にぶい黄橙	75%	No.8・22
SK28	191	壺	(15.7)	[7.2]	—	EFGH	普通	橙	25%	No.13 摩滅が著しい
SK28	192	壺	(16.6)	[4.9]	—	AEFGH	良好	にぶい橙	25%	No.5 口縁端部に刻み目
SK28	193	壺	(19.0)	[3.3]	—	EFGH	普通	灰褐	10%	No.39 内外面に赤彩
SK28	194	壺	(18.0)	[5.5]	—	FG	良好	橙	35%	No.6
SK28	195	壺	(29.0)	[6.9]	—	DEFI	良好	浅黄橙	10%	大廓式 沈線4本1単位 胎土に混入物多量
SK28	196	壺	—	[3.7]	—	EFHK	普通	にぶい黄褐	35%	頸部に突帯 摩滅が著しい
SK28	197	壺	15.8	[19.0]	—	AEG	普通	暗灰黄	40%	No.16 外面に黒斑
SK28	198	壺	14.2	31.0	8.3	AEF	普通	にぶい橙	80%	No.32・34・42 胴部中に小孔 ドーナツ状底部
SK28	199	壺	(12.0)	—	7.1	AEFH	普通	灰黄	70%	No.30 胴部下半内外面に煤付着 摩滅が著しい
SK28	200	壺	(16.6)	[16.3]	—	FGH	普通	灰白	25%	No.30・32・42 外面に黒斑
SK28	201	壺	—	[3.0]	3.6	ACHI	良好	褐灰	80%	No.51 上げ底
SK28	202	壺	—	[3.6]	6.5	CEFH	普通	灰黄褐	85%	No.52 底部はドーナツ状 摩滅が著しい
SK28	203	壺	—	[3.7]	7.0	ACEFH	普通	灰黄褐	70%	No.53
SK28	204	壺	—	[15.5]	(8.0)	AFG	普通	にぶい黄橙	50%	No.33・42・43 内外面に煤付着
SK28	205	壺	—	—	—	CFIK	普通	にぶい橙	—	No.23・34・42・45 単節LR縄文
SK28	206	壺	—	[18.8]	—	CFK	普通	橙	60%	No.32単節LR縄文+ハケ目+単節LR縄文
SK28	207	壺	—	[7.0]	5.6	CEFH	普通	にぶい黄橙	50%	No.13 摩滅が著しい
SK28	208	壺	—	[8.1]	8.4	DEFIK	普通	橙	35%	No.42, D-6G 胴部外面に黒斑 摩滅が著しい
SK28	209	壺	—	[5.6]	10.8	AEH	普通	灰黄褐	80%	No.10・12 外面に煤付着
SK28	210	甕	13.6	[7.0]	—	AFG	普通	灰褐	55%	No.25 外面に煤付着
SK28	211	甕	14.5	[9.9]	—	EFHIK	普通	にぶい黄褐	60%	No.49・55 内外面に煤付着
SK28	212	甕	15.6	[5.1]	—	EHIK	良好	にぶい黄橙	70%	摩滅が著しい
SK28	213	甕	16.8	[6.8]	—	EFGHK	普通	にぶい黄橙	75%	No.23 内外面に煤付着
SK28	214	甕	(16.2)	[9.9]	—	ACEHK	良好	灰黄褐	20%	内外面に煤付着
SK28	215	甕	(18.4)	[7.0]	—	FGH	普通	にぶい褐	25%	
SK28	216	甕	19.0	[9.5]	—	DEFHK	普通	黄橙	55%	No.6・17・21 摩滅が著しい
SK28	217	台付甕	—	[9.8]	—	GH	普通	褐灰	65%	No.20 胴部内外面に煤付着
SK28	218	台付甕	—	[8.7]	8.8	FK	普通	にぶい褐	60%	外面に煤付着 摩滅が著しい
SK28	219	台付甕	—	[3.9]	(7.0)	AF	普通	にぶい橙	25%	
SK28	220	台付甕	—	[5.4]	9.8	AF	普通	にぶい黄橙	85%	
SK28	221	台付甕	—	[5.7]	9.4	AEGH	普通	にぶい橙	100%	No.44 内外面に煤付着
SK28	222	台付甕	—	[6.3]	(9.6)	F	普通	橙	80%	摩滅が著しい
SK28	223	台付甕	—	[7.0]	10.6	FG	普通	橙	75%	No.27
SK28	224	台付甕	—	[7.8]	10.0	FGK	普通	にぶい橙	70%	No.50 胴部内面に煤付着
SK28	225	甗	—	[2.6]	4.4	GHJK	普通	にぶい黄橙	75%	No.47 単孔 外面に黒斑
SK28	226	高坏	—	[7.1]	—	FG	普通	橙	95%	外面に赤彩
SK28	227	器台	6.4	6.6	(9.2)	AFG	普通	明赤褐	95%	No.15 透孔3 外面・器受部内面に赤

第16表 土壌出土遺物観察表(5)

遺構	番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
SK28	228	器台	(6.0)	[4.5]	—	GH	良好	にぶい赤褐	75%	No.19 内外面に赤彩 外面に黒斑 貫通孔なし
SK28	229	器台	8.0	[4.5]	—	F	普通	明赤褐	90%	透孔3 摩滅が著しい
SK28	230	埴	—	[4.5]	2.0	FG	良好	明赤褐	55%	No.6 内外面に赤彩 上げ底
SK28	231	甕	—	[2.8]	—	CEF	普通	浅黄	—	外面に工具痕 砥石に転用?
SK28	232	甕	—	[3.4]	—	CFI	普通	浅黄	—	
SK29	233	壺	—	[3.3]	9.4	AFG	普通	明赤褐	80%	外面は摩滅
SK33	234	台付甕	—	[6.6]	8.9	EFK	普通	橙	95%	
SK35	235	壺	—	[4.5]	5.2	CEFH	普通	灰黄褐	80%	外面に煤付着・黒斑
SK35	236	壺	—	[19.8]	7.0	DEF	普通	淡黄	60%	No.1 胴部外面下半に黒斑 摩滅が著しい
SK36	237	甕	12.6	[12.8]	—	DFH	普通	橙	35%	No.1 内外面に煤付着
SK37	238	台付甕	15.0	[21.2]	—	BDEFGH	普通	浅黄	60%	No.1・2 胴部外面に黒斑 器面が剥落
SK37	239	甕	14.6	[10.8]	—	DFH	良好	灰黄褐	65%	No.2 内外面に煤付着
SK37	240	甕	(19.4)	(11.6)	(6.6)	AEG	普通	にぶい黄橙	45%	No.2 口縁の折り返し部が剥落か? 黒斑
SK37	241	器台	—	[5.7]	(11.8)	BEH	普通	黒	70%	透孔3
SK38	242	壺	—	[4.5]	—	CFIK	普通	灰白	—	頸部に赤彩 口縁部・口唇部に網目状捺糸文
SK39	243	甕	—	[8.7]	5.0	ADFH	良好	にぶい黄橙	50%	No.11 胴部外面に黒斑
SK45	244	甕	(20.0)	[5.0]	—	CEF	普通	暗灰黄	10%	内外面に煤付着
SK46	245	壺	—	[1.6]	5.6	EFG	普通	橙	95%	No.1 上げ底状 外面に黒斑
SK46	246	台付甕	—	—	(9.4)	CDFGH	普通	橙	25%	No.1
SK48	247	高坏	—	—	(9.1)	FGH	良好	にぶい黄橙	80%	No.1 脚部内面に黒斑

6. 溝跡

溝跡は、A区で4条、B区で31条の総数35条が検出された。調査範囲が狭小であったため、全体を調査できた遺構が少ない。検出できた範囲が部分的であるため、周溝や土壇として考えた方がよい遺構も少なからずあるが、調査時の番号を変更せずにそのまま掲載した。第9・38号溝跡については、住居跡の壁溝として調査を行ったが、溝跡が全周せず部分的な検出であること、炉跡・柱穴などの付属施設を検出できなかったことなどから、溝跡として報告することにした。

第3号溝跡(第39図)

C-2・3グリッドにかけて検出され、東側は調査区域外に延びていた。第1号周溝と重複していたが、新旧関係は不明である。規模は、検出長6.2m、幅0.77m、深さが0.12~0.31mであった。

遺物は、図示した他に古式土師器が少量出土した。

第4号溝跡(第39図)

A・B-3グリッドにかけて検出され、西側は調査区域外に延びていた。谷部に直交する直線的な溝跡である。第5号溝跡と重複しており、本遺構の方が新しい。規模は、検出長11.94m、幅0.58~

1.01m、深さが0.39~0.59mであった。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

第5号溝跡(第39図)

A-2・3、B-1・2グリッドにかけて検出され、南側は調査区域外に延びていた。谷部に沿って直線的に延びる溝跡である。規模は、検出長18.78m、幅0.42m、深さが0.26mであった。

遺物は、古式土師器片が少量出土した。5の壺は、胴部外面から底面にかけて鋭利な工具痕が無数に付けられており、砥石に転用されたと考えられる。

第6a号溝跡(第40・42図)

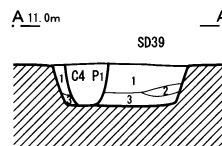
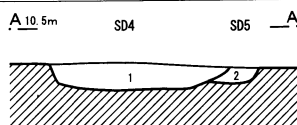
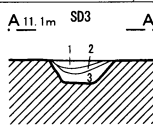
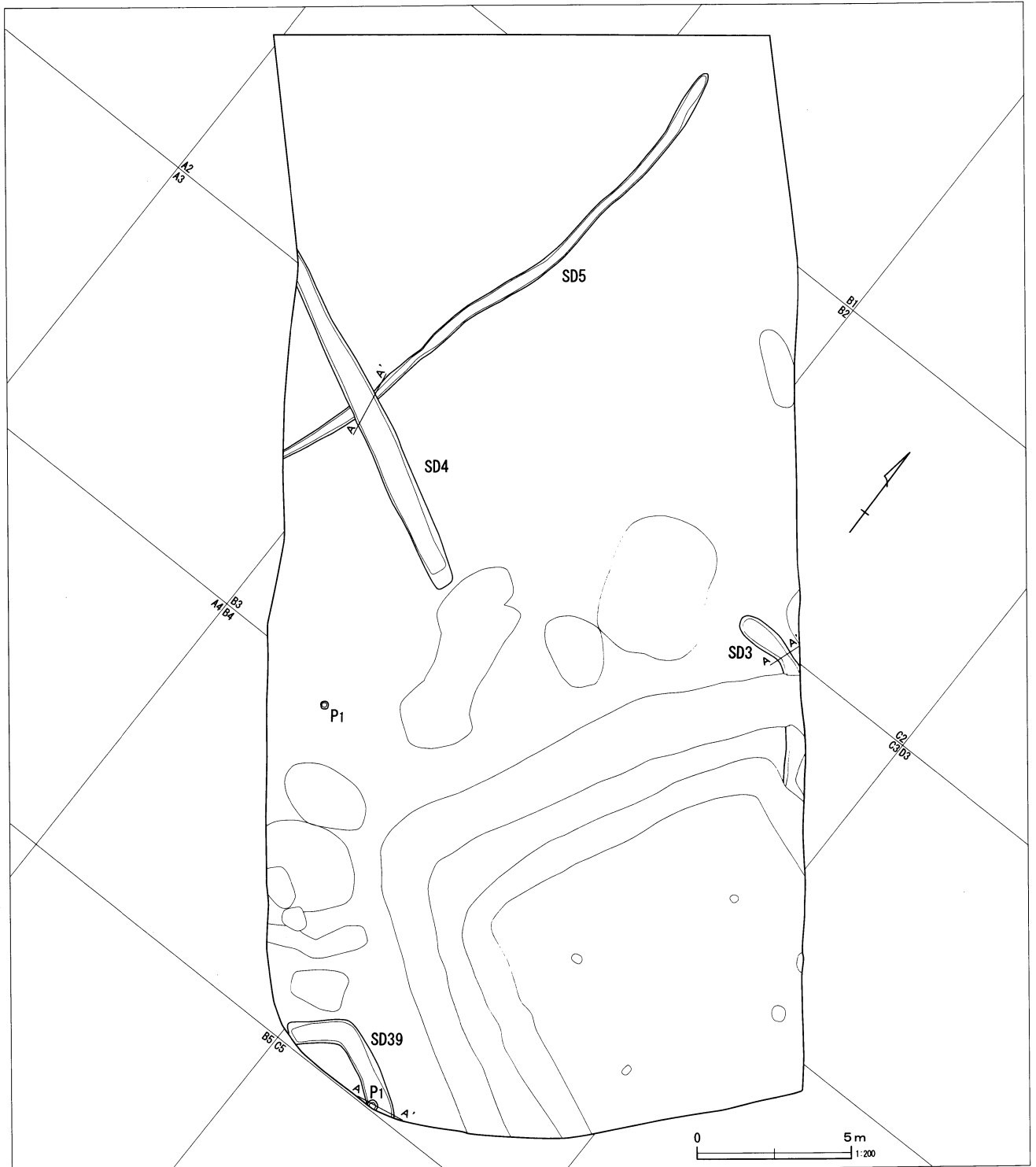
C-5・6、D-5グリッドで検出され、南側は調査区域外に延びていた。第1号土壇、第6b号溝跡と重複し、本遺構の方が古かった。規模は、検出長5.38m、幅1.36m、深さが0.42~0.53mであった。

遺物は、北辺部の下層に投棄された状態で、古式土師器が多量に出土した。9の甕は歪みが著しい。

第6b号溝跡(第40・42図)

C・D-5・6グリッドにかけて検出され、南側は調査区域外に延びていた。規模は、検出長4.12m、幅1.17m以上、深さが0.38mであった。

出土遺物が少量で、図示できるものはなかった。



第3号溝跡

- | | | | | | |
|---|------|-----------|-------------------|-------|--------|
| 1 | 黒褐色土 | 褐色地山粒子を少量 | 焼土粒子を微量 | しまりあり | 粘性ややあり |
| 2 | 黒褐色土 | 褐色地山粒子を多量 | 炭化物粒子・焼土粒子を微量 | しまりあり | 粘性ややあり |
| 3 | 褐色粘土 | 黒褐色粒子を極多量 | 黒褐色土ブロック(φ1cm)を少量 | しまり | 粘性あり |

第4・5号溝跡

- | | | | |
|---|-------|------------|---------------------------------------|
| 1 | 黒色粘土 | 灰白色粘土粒子を少量 | しまり・粘性あり(SD4) |
| 2 | 暗灰色粘土 | 灰白色粘土粒子を少量 | 灰白色粘土ブロック(φ0.5cm)を微量
しまり・粘性あり(SD5) |

第39号溝跡

- | | | | |
|---|------|----------------------------------|-----------------------|
| 1 | 黒褐色土 | 褐色地山ブロック(φ0.5~1cm)・褐色地山粒子を多量 | しまりあり |
| 2 | 褐色粘土 | 褐色地山土を主体 | 黒褐色土粒子を少量
しまり・粘性あり |
| 3 | 黒色粘土 | 青灰色地山粘土ブロック(φ1~2cm)・青灰色地山粘土粒子を少量 | しまり・粘性あり |

第39図 A区溝跡・ピット

第7 a号溝跡 (第40・42図)

D・E-5グリッドにかけて検出され、西側は調査区域外に延びていた。第2号井戸跡、第2・3・6号土壌、第7 b・8号溝跡と重複する。新旧関係は、第7 b号溝跡より新しく、第2号井戸跡より古かった。規模は、検出長7.45 m、幅1.04 m、深さが0.31～0.52 mであった。

遺物は、上層から多量の古式土師器片が出土した。

第7 b号溝跡 (第40・42図)

D-5グリッドで検出され、西側は調査区域外に延びていた。第2号井戸跡、第2・3・49・51号土壌、第7 a・8号溝跡と重複しており、第2号井戸跡、第7 a号溝跡より古かった。規模は、検出長6.28 m、幅1.54 m以上、深さが0.11～0.35 mであった。

遺物は、上層から古式土師器が多量に出土した。

第8号溝跡 (第40図)

D-5グリッドで検出され、東側は攪乱に壊されていた。第7 a・b号溝跡と重複していたが、新旧関係は不明である。規模は、検出長7.58 m、幅0.58 m、深さが0.10～0.31 mであった。

出土遺物が少量で、図示できるものはなかった。

第9号溝跡 (第40図)

D-5・6グリッドにかけて検出され、西側は調査区域外に延びていた。溝の北側にピットが集中するため、住居跡の壁溝の可能性もある。規模は、検出長7.63 m、幅0.34 m、深さが0.31 mであった。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

第10号溝跡 (第40図)

D・E-6・7グリッドにかけて検出された。第1号住居跡、第1号掘立柱建物跡、第2・3号周溝、第7・10・19・25・28号土壌、第13・23・33号溝跡と重複していた。規模は、幅1.40 m、深さが0.43～0.70 mであった。コの字形に巡る方形の溝で、周溝である可能性も考えられる。

遺物は、上層から古式土師器が多量に出土した。

第12号溝跡 (第40図)

E-6グリッドで検出された。東側は攪乱に壊さ

れ、西側は第31号土壌と重複していた。規模は、幅0.78 m、深さが0.08 mであった。

遺物は、73の甕などが少量出土している。

第13号溝跡 (第40図)

D-7、E-6グリッドで検出され、東側は攪乱に壊されていた。第2号周溝、第31号土壌、第10号溝跡と重複する。本遺構は、第31号土壌より古かった。規模は、幅0.45 m、深さが0.13 mであった。

出土遺物が少量で、図示できるものはなかった。

第14号溝跡 (第40図)

D・E-5グリッドにかけて検出された。規模は、長さ2.82 m、幅0.91 m、深さが0.13 mであった。

遺物が出土しなかったため、時期は不明である。

第17号溝跡 (第41図)

E-7・8、F-7グリッドにかけて検出された。中央部を攪乱に壊されていたが、直線的に延びる溝跡であった。第3号周溝、第35号溝跡と重複する。新旧関係は、第35号溝跡より新しかった。規模は、検出長13.64 m、幅0.76 m、深さが0.38 mであった。

出土遺物が少量で、図示できるものはなかった。

第18号溝跡 (第40図)

E-5グリッドで検出され、東側は調査区域外に延びていた。規模は、検出長3.36 m、幅0.96 m、深さが0.27 mであった。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

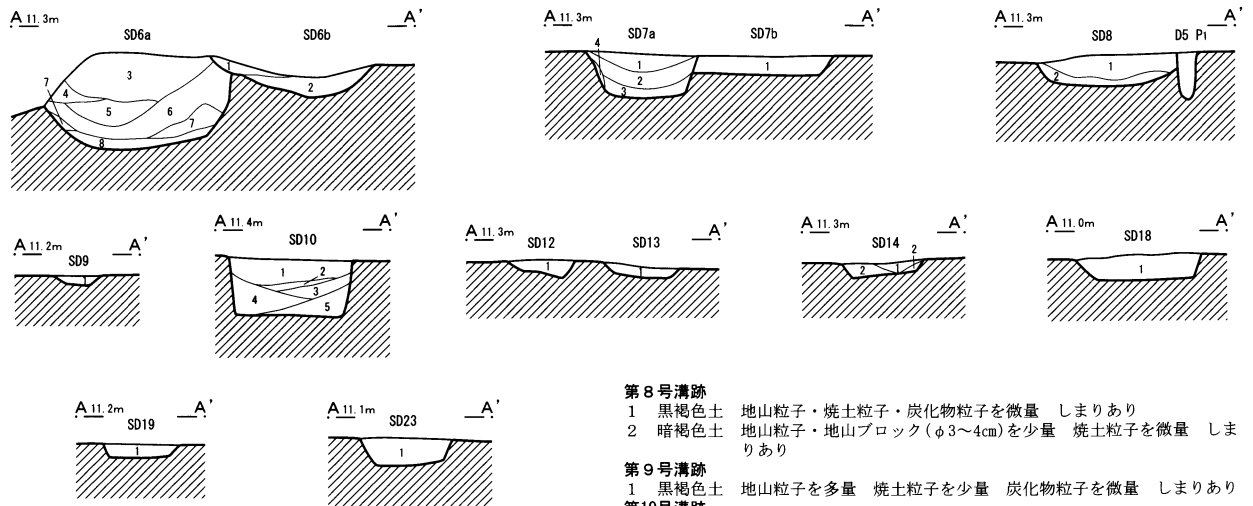
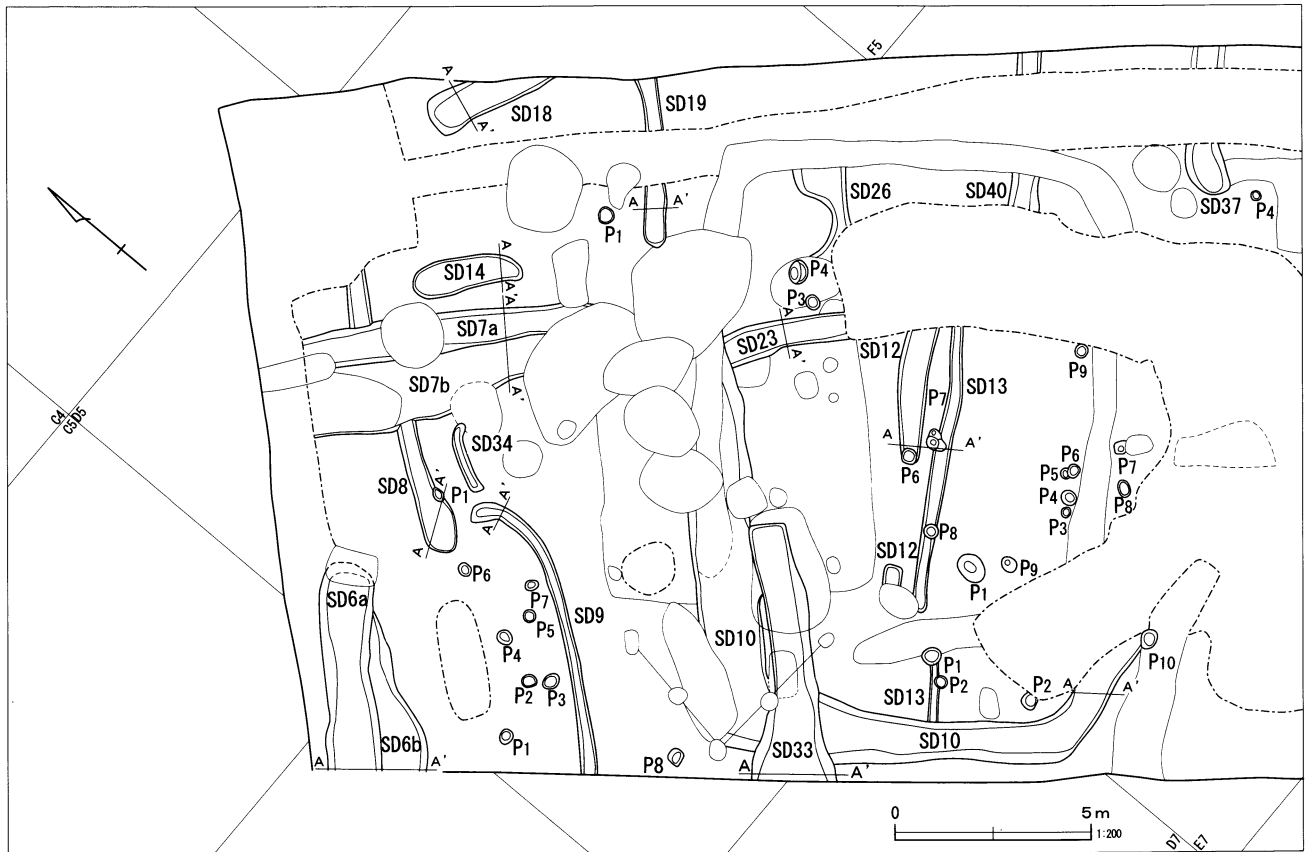
第19号溝跡 (第40図)

E-5グリッドで検出され、東側は調査区域外に延びていた。第4号土壌と重複しており、本遺構の方が新しかった。規模は、検出長4.31 m、幅0.57 m、深さが0.15 mであった。

遺物が出土しなかったため、時期は不明である。

第21 a号溝跡 (第41図)

F-8・9グリッドにかけて検出され、西側は調査区域外に延びていた。第4号周溝、第14・20・50号土壌、第21 b号溝跡と重複する。新旧関係は、重複する全ての遺構より本遺構の方が新しい。規模は、検出長5.98 m、幅1.32 m、深さが0.30 mであ



第6a・6b号溝跡

- 1 黒褐色土 地山粒子を微量 しまりあり (SD6b)
- 2 黒褐色土 地山粒子・地山ブロック (φ1~2cm) を少量 しまりあり (SD6b)
- 3 黒褐色土 地山粒子・地山ブロック (φ0.5~1cm)・炭化物粒子を少量 しまりあり (SD6a)
- 4 暗褐色土 地山粒子を極多量 地山ブロック (φ0.5~1cm) を多量 しまりあり (SD6a)
- 5 灰白色土 地山ブロック (φ0.5~1cm)・黒褐色土ブロック (φ0.5~1cm) を少量 しまりあり (SD6a)
- 6 黒褐色土 地山粒子を多量 焼土粒子・炭化物粒子を微量 しまりあり (SD6a)
- 7 灰白色土 混入物を殆ど含まない しまり・粘性やあり (SD6a)
- 8 黒色土 地山粒子を微量 しまりあり (SD6a)

第7a・7b号溝跡

- 1 黒褐色土 褐色地山粒子を多量 褐色地山ブロック (φ0.5~3cm)・焼土粒子・炭化物粒子を少量 しまりあり (SD7a・7b)
- 2 黒褐色土 褐色地山粒子を極多量 炭化物粒子を多量 灰白色地山ブロック (φ0.5~1cm)・焼土粒子を少量 焼土ブロック (φ0.5cm) を微量 しまりあり
- 3 黒褐色土 褐色地山粒子・褐色地山ブロック (φ1~2cm) を多量 しまりあり
- 4 黒褐色土 褐色地山粒子を多量 褐色地山ブロック (φ0.5~1cm) を少量 しまりあり

第8号溝跡

- 1 黒褐色土 地山粒子・焼土粒子・炭化物粒子を微量 しまりあり
- 2 暗褐色土 地山粒子・地山ブロック (φ3~4cm) を少量 焼土粒子を微量 しまりあり

第9号溝跡

- 1 黒褐色土 地山粒子を多量 焼土粒子を少量 炭化物粒子を微量 しまりあり

第10号溝跡

- 1 黒褐色土 褐色地山粒子を多量 灰白色地山粒子を少量 しまりあり
- 2 黒色土 褐色地山粒子を少量 しまりあり
- 3 褐色土 褐色地山土を主体 黒褐色土ブロック (φ0.5~1cm) を微量 しまりあり 粘性やあり
- 4 黒色土 褐色地山粒子を極多量 炭化物粒子を少量 焼土粒子を極微量 しまりあり
- 5 暗褐色土 褐色地山ブロック (φ2~3cm)・褐色地山粒子を多量 しまりあり

第12・13号溝跡

- 1 暗褐色土 褐色地山粒子を少量 しまりあり (SD12・13)

第14号溝跡

- 1 暗褐色土 褐色地山粒子を少量 しまりあり
- 2 暗褐色土 褐色地山粒子を多量 しまりあり

第18号溝跡

- 1 暗褐色土 褐色地山ブロック (φ3~4cm) を多量 褐色地山粒子を少量 しまりあり

第19号溝跡

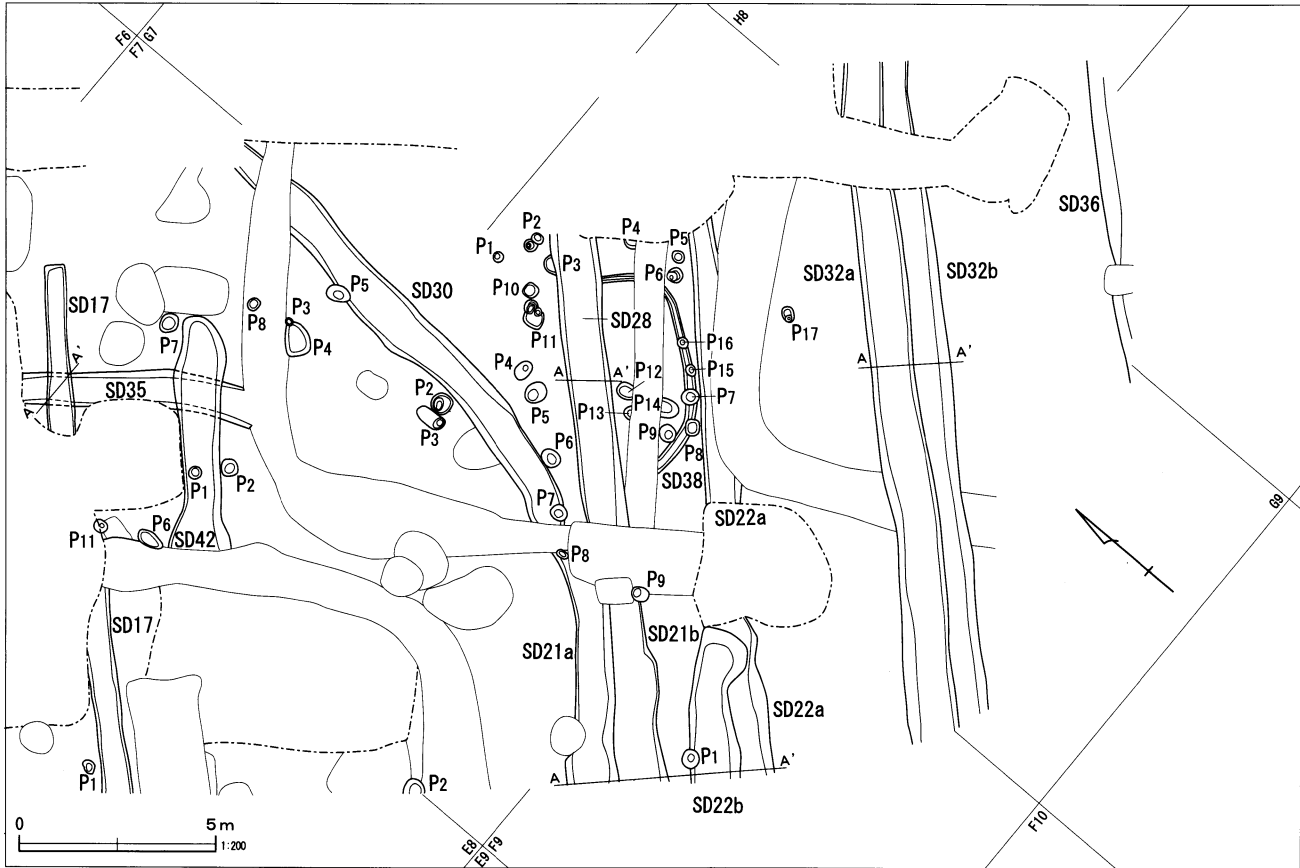
- 1 暗褐色土 褐色地山粒子を多量 しまりあり

第23号溝跡

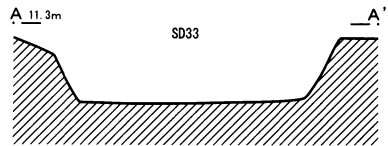
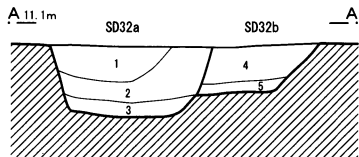
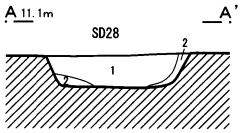
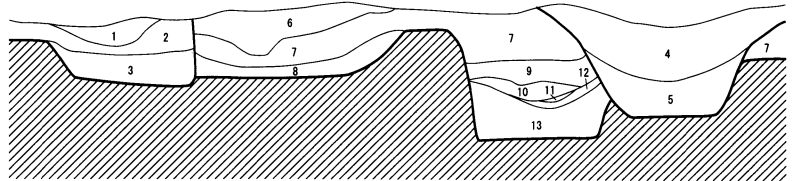
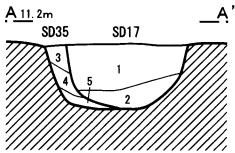
- 1 黒褐色土 褐色地山粒子を少量 しまりあり



第40図 B区溝跡・ピット (1)



A 11.9m SD21a SD21b SD22b SD22a A'



第17・35号溝跡

- 1 黒褐色土 褐色地山粒子を少量 しまりあり (SD17)
- 2 黒褐色土 褐色地山粒子・褐色地山ブロック (φ1~2cm)を少量 しまり・粘性あり (SD17)
- 3 暗褐色土 褐色地山粒子を少量 しまりあり (SD35)
- 4 暗褐色土 褐色地山粒子を多量 しまりあり (SD35)
- 5 黒褐色土 褐色地山粒子を少量 しまり・粘性あり (SD35)

第21a・21b、22a・22b号溝跡

- 1 褐色土 褐色地山土を主体 暗褐色土ブロック (φ0.5~3cm)を少量 しまりあり 粘性ややあり (SD21a)
- 2 暗灰褐色土 褐色地山粒子・焼土粒子を微量 しまり・粘性あり (SD21a)
- 3 暗灰褐色土 褐色地山粒子を少量 しまり・粘性あり (SD21a)
- 4 暗褐色土 褐色地山粒子・焼土粒子を少量 しまり・粘性あり (SD22a)
- 5 暗褐色土 褐色地山ブロック (φ0.5~1cm)を少量 炭化物粒子・焼土粒子を微量 しまり・粘性あり (SD22a)
- 6 褐色土 褐色地山土を主体 暗褐色土ブロック (φ0.5~1cm)を少量 しまり・粘性あり (SD21b)
- 7 暗灰褐色土 褐色地山粒子を少量 しまりあり 粘性ややあり (SD21b・22b)
- 8 暗灰褐色土 褐色地山ブロック (φ1~2cm)・褐色地山粒子を少量 しまり・粘性あり (SD21b)
- 9 暗褐色土 褐色地山ブロック (φ1~2cm)・褐色地山粒子を多量 暗褐色土ブロック (φ0.5~1cm)を少量 しまりあり 粘性ややあり (SD22b)

- 10 褐色土 褐色地山土を主体 暗褐色土粒子を多量 暗褐色土ブロック (φ1cm)を少量 しまりあり (SD22b)
- 11 黒褐色土 焼土粒子・炭化物粒子を微量 しまり・粘性あり (SD22b)
- 12 暗褐色土 褐色地山粒子を多量 しまりあり (SD22b)
- 13 黒褐色土 褐色地山ブロック (φ0.5~1cm)・褐色地山粒子を少量 しまりあり (SD22b)

第28号溝跡

- 1 暗褐色土 褐色地山ブロック (φ2~3cm)を少量 褐色地山粒子を微量 しまりあり
- 2 褐色土 褐色地山土を主体 暗褐色土ブロック (φ0.5~1cm)を少量 しまりあり

第32a・32b号溝跡

- 1 褐色土 褐色地山土主体 暗褐色土ブロック (φ2~3cm)・暗褐色土粒子を少量 しまりあり (SD32a)
- 2 黒褐色土 褐色地山粒子を多量 褐色地山ブロック (φ0.5~1cm)を少量 炭化物粒子を極微量 しまりあり (SD32a)
- 3 暗灰色粘土 灰白色地山ブロック (φ1cm)・青灰色粘土ブロック (φ1~2cm)を少量 しまり・粘性あり (SD32a)
- 4 暗褐色土 褐色地山粒子を少量 しまりあり 粘性ややあり (SD32b)
- 5 黒褐色土 褐色地山ブロック (φ3~4cm)を多量 褐色地山粒子を少量 しまり強 (SD32b)



第41図 B区溝跡・ピット (2)

った。埋土や出土遺物が類似し、走行方向も一致することから、第30号溝跡とは同一の遺構である。

遺物は、羽口の破片や鉄滓などが出土していることから、近世以降と考えられる。

第21 b号溝跡 (第41図)

F-8・9グリッドにかけて検出され、西側は調査区域外に延びていた。第14・20号土壌、第21 a号溝跡と重複する。新旧関係は、第14・20号土壌より新しく、第21 a号溝跡より古い。規模は、検出長4.64 m、幅1.12 m、深さが0.28 mであった。埋土や走行方向が一致することから、第28号溝跡とは同一の遺構と考えられる。

出土遺物が少量で、図示できるものはなかった。

第22 a号溝跡 (第41図)

F-9、G-8グリッドにかけて検出され、西側は調査区域外に延びていた。第5号周溝、第22 b号溝跡と重複しており、本遺構の方が新しい。規模は、検出長14.32 m、幅0.94 m、深さが0.60 mであった。

遺物は、肥前系磁器などが少量出土していることから、近世以降と考えられる。

第22 b号溝跡 (第41図)

F-9グリッドで検出され、西側は調査区域外に延びていた。規模は、検出長4.00 m、幅1.27 m、深さが0.54～0.71 mであった。

遺物は、76～78の古式土師器が少量出土している。

第23号溝跡 (第40・42図)

E-6グリッドで検出され、南側は攪乱に壊されていた。第1号住居跡、第2号周溝、第7・54号土壌、第10号溝跡と重複していた。規模は、検出長3.15 m、幅0.82 m、深さが0.38 mであった。

遺構確認時に多量の古式土師器が出土している。

第25号溝跡 攪乱のため欠番

第26号溝跡 (第40図)

E-6グリッドで検出され、南側は攪乱に壊されていた。第2号周溝、第15号土壌と重複しており、本遺構の方が新しかった。規模は、検出長2.32 m、幅0.42～1.31 m、深さが0.11 mであった。

遺物は、89の古式土師器の甕の破片や砂岩製の砥石などが出土しているが、埋土の状況から近・現代の遺構である可能性が高い。

第28号溝跡 (第41図)

F・G-8グリッドにかけて検出され、東側は調査区域外に延びていた。第4号周溝、第14号土壌、第38号溝跡と重複する。新旧関係は、重複する全ての遺構より本遺構の方が新しかった。第21 b号溝跡とは同一のものである。規模は、検出長7.45 m、幅1.12 m、深さが0.29 mであった。

出土遺物が少量で、図示できるものはなかった。

第30号溝跡 (第41図)

F-7・8グリッドにかけて検出され、北側は調査区域外に延びていた。第4号周溝、第21号土壌と重複し、本遺構の方が新しかった。第21 a号溝跡とは同一のものである。規模は、検出長12.47 m、幅0.66～1.20 m、深さが0.22～0.42 mであった。

羽口の破片、鉄滓、瓦などが出土していることから、時期は近世以降と考えられる。

第32 a号溝跡 (第41図)

F-9、G-8・9、H-8グリッドにかけて検出され、東西は調査区域外に延びていた。第5号周溝、第32 b号溝跡と重複し、本遺構が新しい。規模は、長さ17.51 m、幅1.28 m、深さ0.61 mであった。

出土遺物が少量で、図示できるものはなかった。

第32 b号溝跡 (第41図)

G-8・9、H-8グリッドにかけて検出され、東西は調査区域外に延びていた。第5号周溝、第32 a号溝跡と重複する。規模は、検出長17.08 m、幅0.96 m以上、深さが0.50 mであった。

出土遺物が少量で、図示できるものはなかった。

第33号溝跡 (第40図)

D-6・7グリッドにかけて検出された。第1号住居跡、第1号掘立柱建物跡、第2号周溝、第19・25号土壌、第10号溝跡と重複する。新旧関係は、第1号住居跡よりも新しく、第19・25号土壌、第10号溝跡より古い。規模は、検出長6.62 m、幅

0.96～2.23 m、深さが0.24 mであった。

遺物は、92の高坏など古式土師器が少量出土した。

第34号溝跡 (第40図)

D-5グリッドで検出された。規模は、長さ1.78 m、幅0.30 m、深さが0.08 mであった。

遺物は出土しなかったが、埋土の状況から近・現代の遺構であると考えられる。

第35号溝跡 (第41図)

F-7グリッドで検出された。第4号周溝、第17・42号溝跡と重複する。新旧関係は、第17号溝跡より古く、第42号溝跡より新しい。規模は、検出長5.71 m、幅0.92 m、深さが0.61 mであった。

遺物は、用途不明の加工材や少量の古式土師器が出土している。

第36号溝跡 (第41図)

H-8・9グリッドで検出され、大半が調査区域外に延びていた。第8号井戸跡と重複し、本遺構の方が新しかった。規模は、検出長8.40 m、幅1.35 m以上、深さが0.21～1.02 mであった。

遺物は、古式土師器が少量出土している。

第37号溝跡 (第40図)

F-6グリッドで検出され、東側は調査区域外に延びていた。第32号土壇と重複していた。規模は、検出長3.77 m、幅0.86 m、深さが0.35 mであった。

遺物は、101の高坏などが少量出土した。

第38号溝跡 (第41図)

G-8グリッドで検出された。第4号周溝、第28号溝跡などと重複していた。溝の西側にピットが集中するため、住居跡の壁溝の可能性もある。規模は、幅0.27 m、深さが0.12 mであった。

出土遺物が少量で、図示できるものはなかった。

第39号溝跡 (第39図)

C-4グリッドで検出され、南側は調査区域外に延びていた。規模は、幅0.73 m、深さ0.43 mであった。L字形に屈曲し、立ち上がりがあることから、西側に開口部をもつ周溝の可能性も考えられる。

遺物は、古式土師器が少量出土しており、図示できたのは102の壺口縁部片1点だけである。

第40号溝跡 (第40図)

E・F-6グリッドにかけて検出され、東側は調査区域外に延びていた。第2号周溝と重複し、西側を攪乱で壊されていた。規模は、検出長4.18 m、幅0.81 m、深さが0.28 mであった。

出土遺物が少量で、図示できるものはなかった。

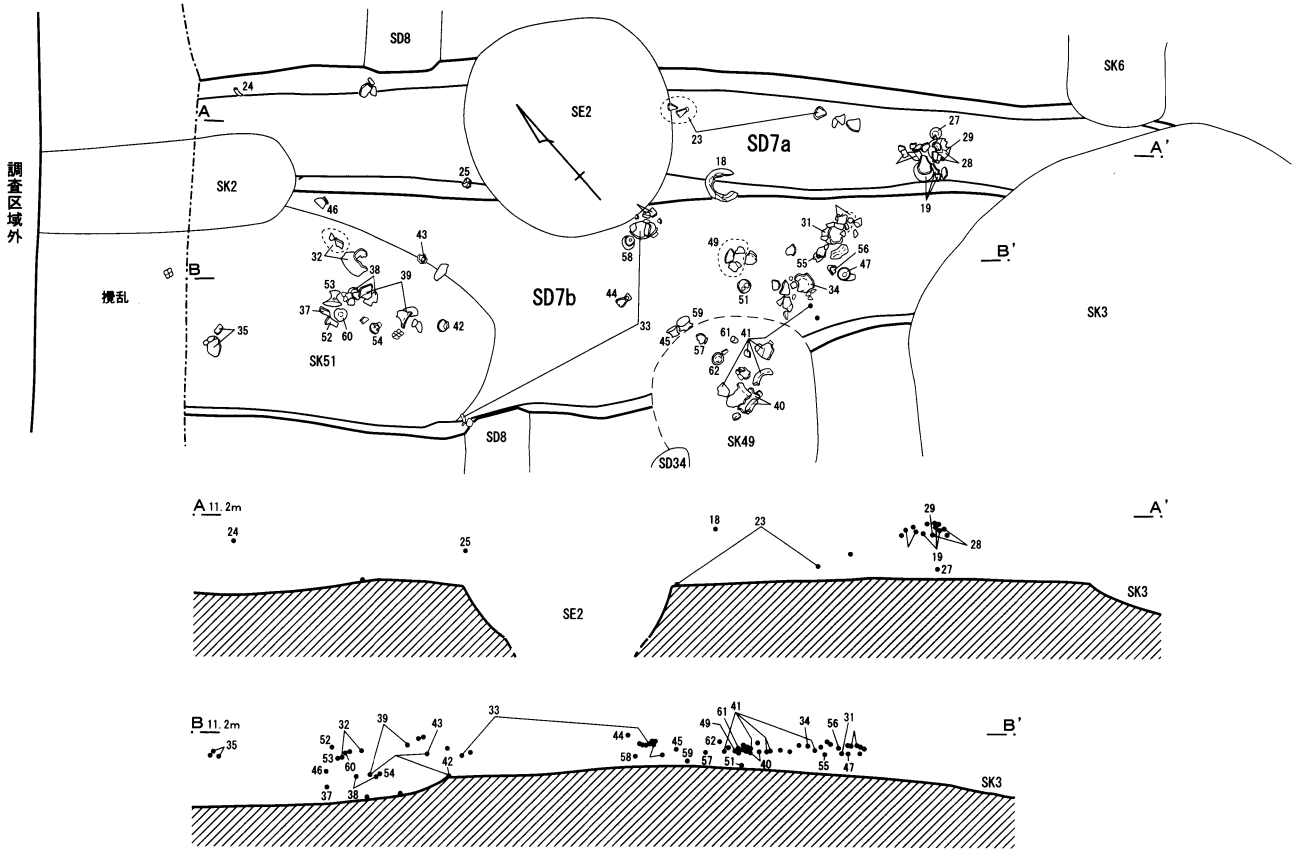
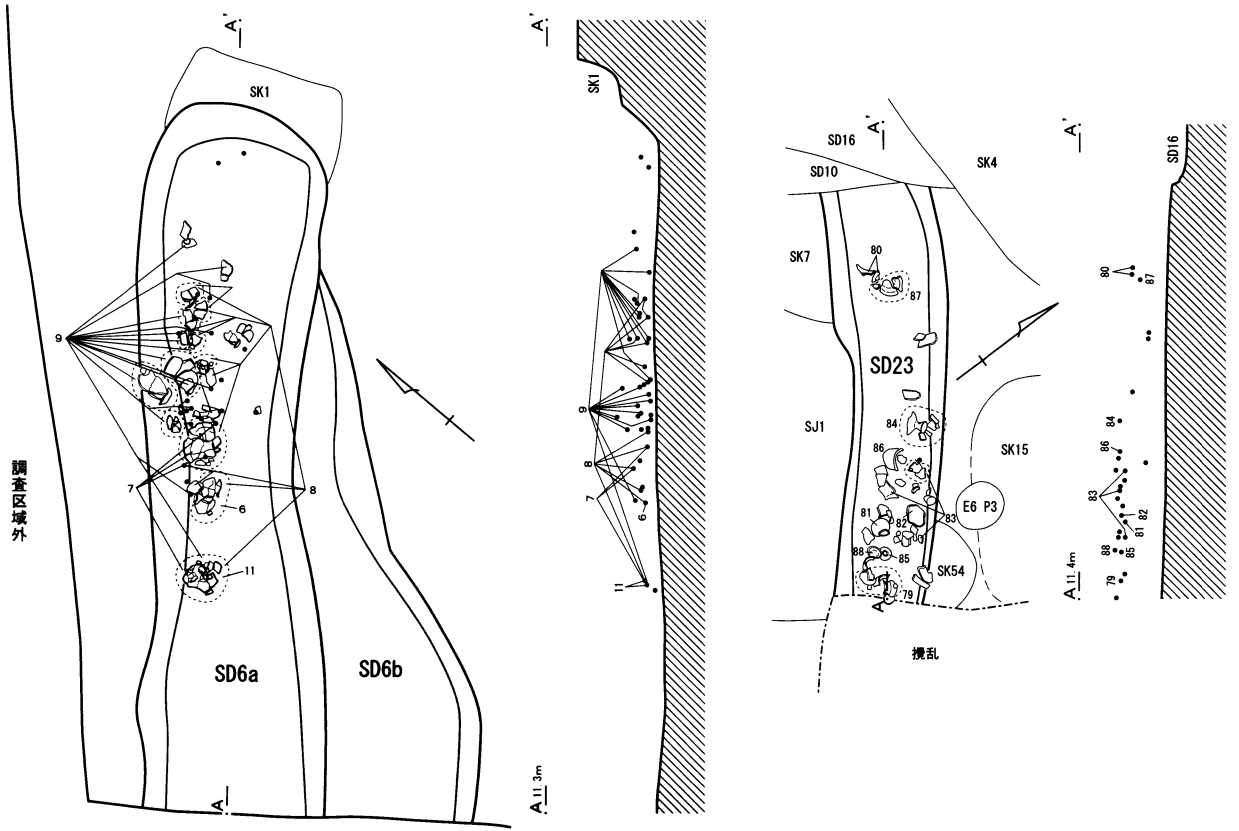
第42号溝跡 (第41図)

F-7グリッドで検出された。第3号周溝、第35号溝跡と重複していた。規模は、検出長5.96 m、幅1.23 m、深さが0.21 mであった。

遺物は、少量の古式土師器片が出土したが、埋土の状況から近・現代の遺構と考えられる。

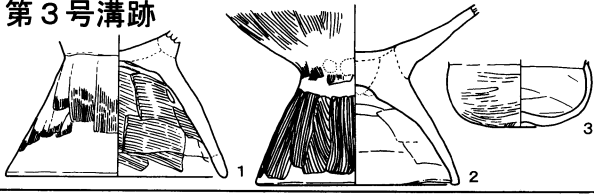
第17表 溝跡一覧表

番号	グリッド	幅	長さ	深さ	時期	番号	グリッド	幅	長さ	深さ	時期
3	C-2・3	0.8	(6.2)	0.3	古墳前期	22a	F-9、G-8	0.9	(14.3)	0.6	近世以降
4	A・B-3	1.0	(11.9)	0.6	不明	22b	F-9	1.3	(4.0)	0.7	古墳前期
5	A-2・3、B-1・2	0.4	(18.8)	0.3	古墳前期	23	E-6	0.8	(3.2)	0.4	古墳前期
6a	C-5・6、D-5	1.4	(5.4)	0.5	古墳前期	25	欠番				
6b	C・D-5・6	(1.2)	(4.1)	0.4	古墳前期	26	E-6	1.3	(2.3)	0.1	近・現代?
7a	D・E-5	1.0	(7.5)	0.5	古墳前期	28	F・G-8	1.1	(7.5)	0.3	古墳前期
7b	D-5	(1.5)	(6.3)	0.4	古墳前期	30	F-7・8	1.2	(12.5)	0.4	近世以降
8	D-5	0.6	(7.6)	0.3	古墳前期	32a	F-9、G-8・9、H-8	1.3	(17.5)	0.6	古墳前期
9	D-5・6	0.3	(7.6)	0.3	不明	32b	G-8・9、H-8	(1.0)	(17.1)	0.5	古墳前期
10	D・E-6・7	1.4	-	0.7	古墳前期	33	D-6・7	2.2	(6.6)	0.2	古墳前期
12	E-6	0.8	-	0.1	古墳前期	34	D-5	0.3	1.8	0.1	近・現代?
13	D-7	0.5	-	0.1	古墳前期	35	F-7	0.9	(5.7)	0.6	古墳前期
14	D・E-5	0.9	2.8	0.1	不明	36	H-8・9	(1.4)	(8.4)	1.0	古墳前期
17	E-7・8、F-7	0.8	(13.6)	0.4	古墳前期	37	F-6	0.9	(3.8)	0.4	古墳前期
18	E-5	1.0	(3.4)	0.3	不明	38	G-8	0.3	-	0.1	古墳前期
19	E-5	0.6	(4.3)	0.2	不明	39	C-4	0.7	-	0.4	古墳前期
21a	F-8・9	1.3	(6.0)	0.3	近世以降	40	E・F-6	0.8	(4.2)	0.3	古墳前期
21b	F-8・9	1.1	(4.6)	0.3	古墳前期	42	F-7	1.2	(6.0)	0.2	近・現代?

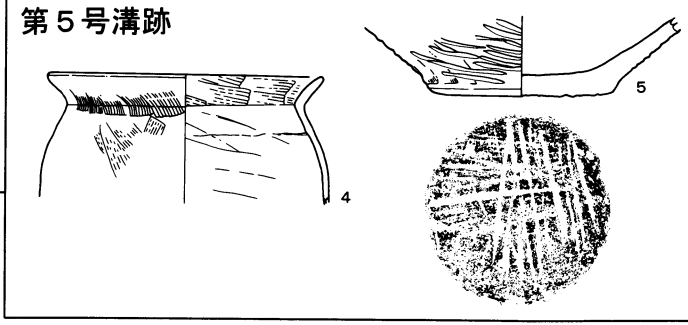


第 42 図 溝跡遺物出土状況

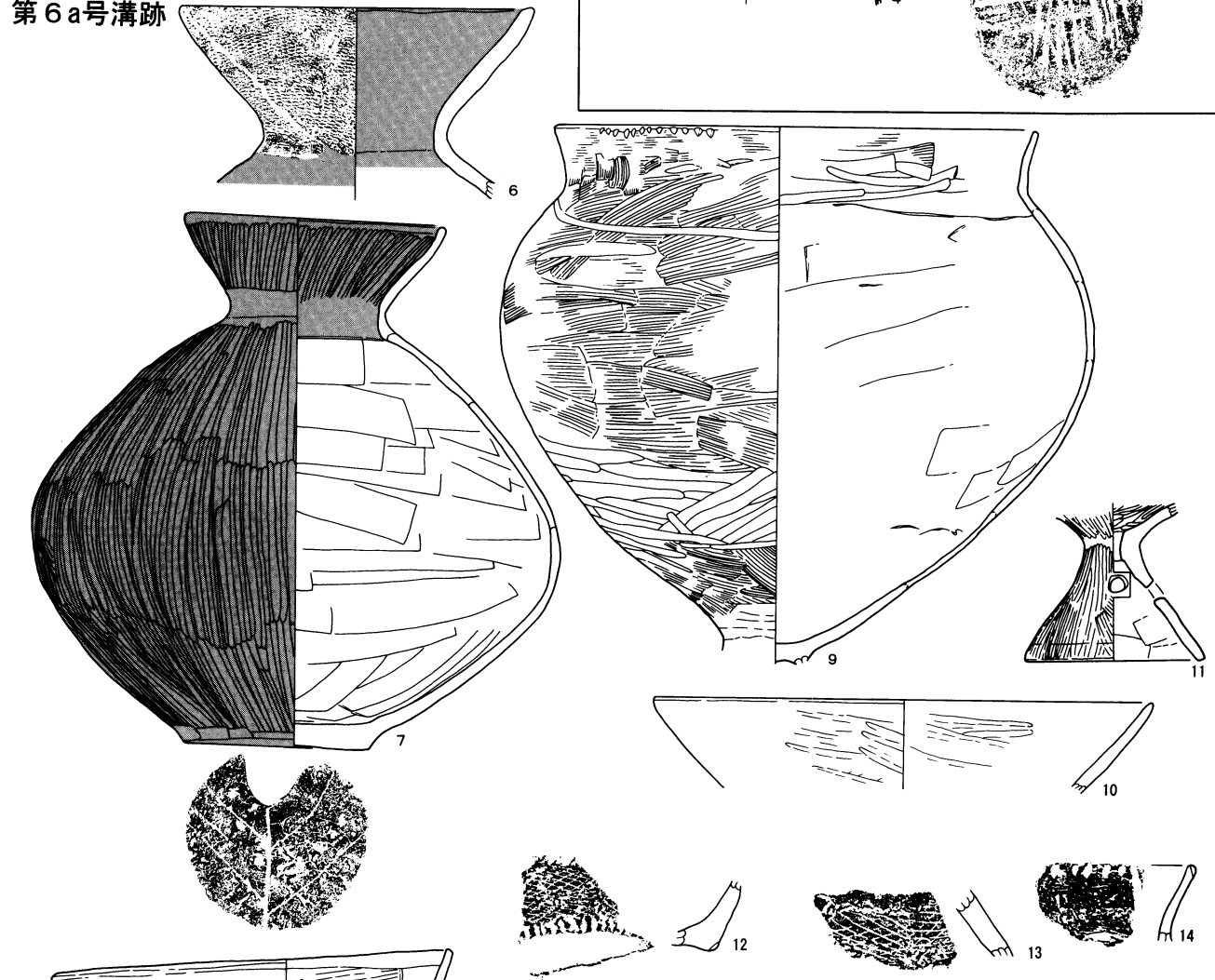
第3号沟迹



第5号沟迹

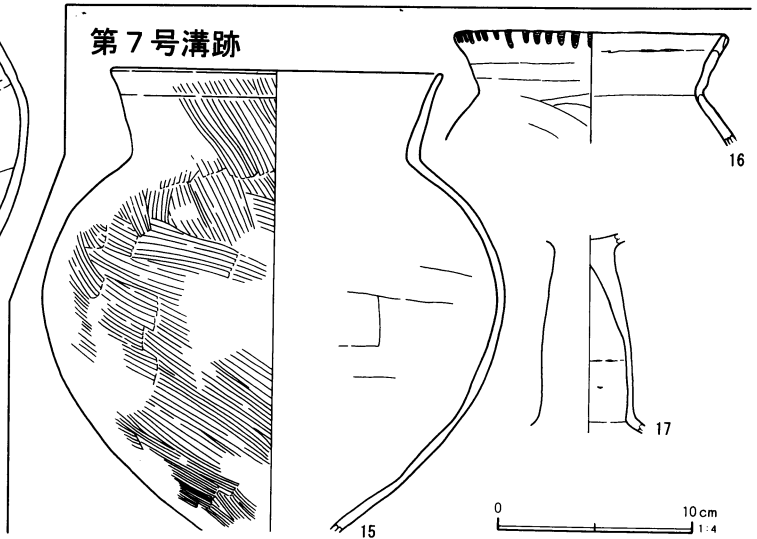


第6a号沟迹



0 5 cm
1:3

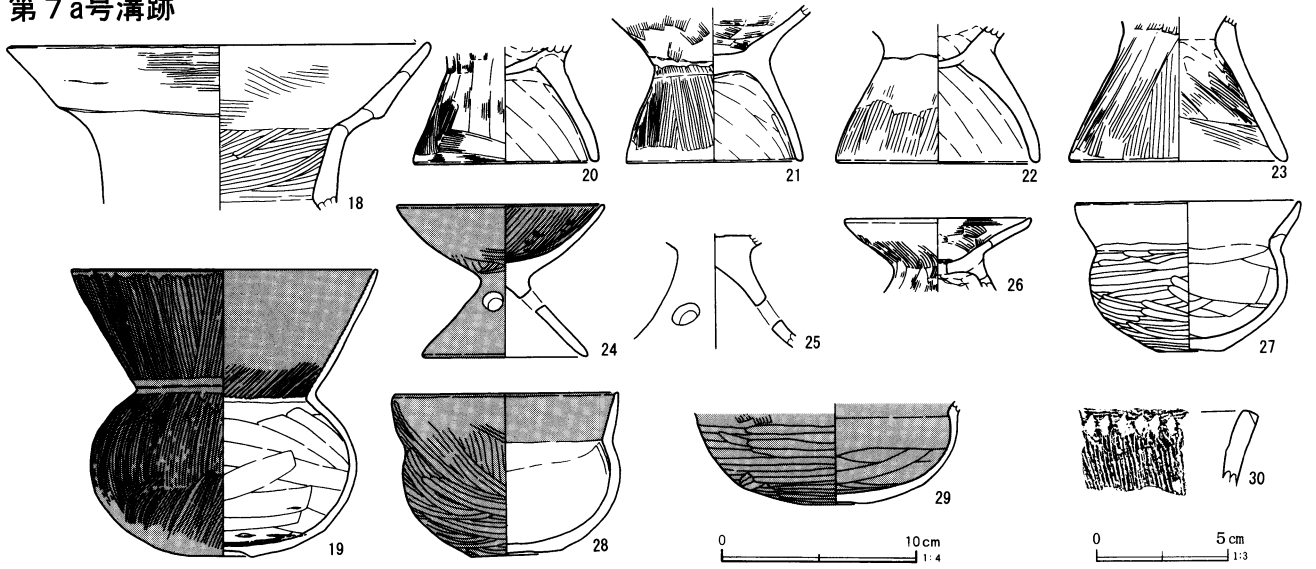
第7号沟迹



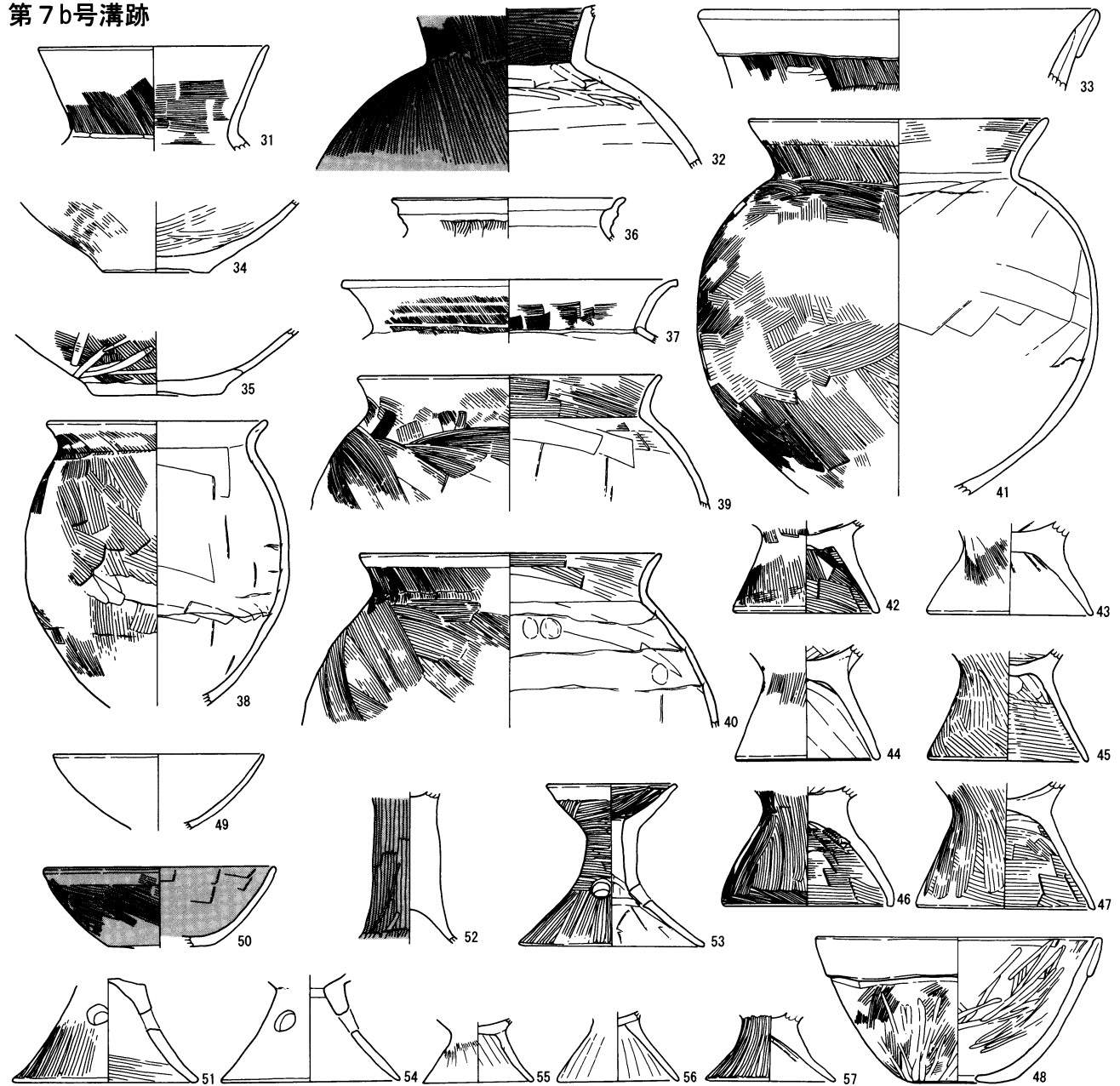
0 10 cm
1:4

第43图 沟迹出土遗物(1)

第7a号沟迹

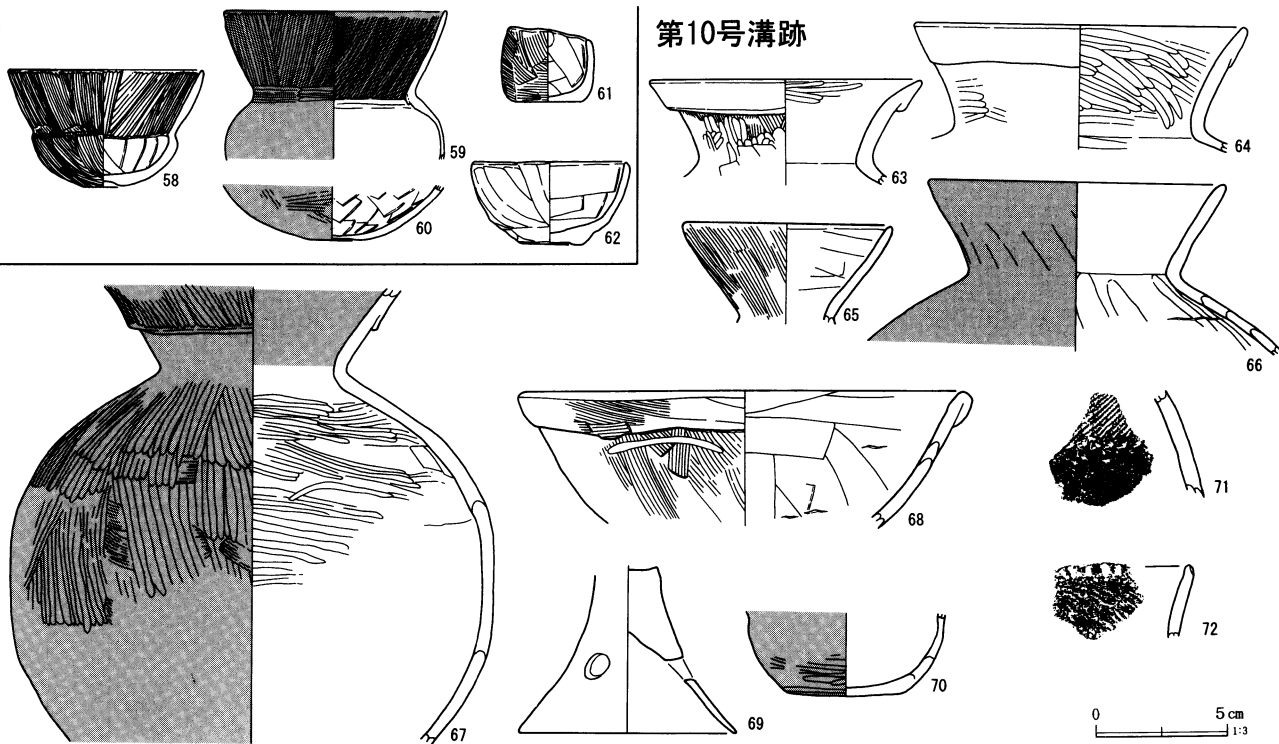


第7b号沟迹

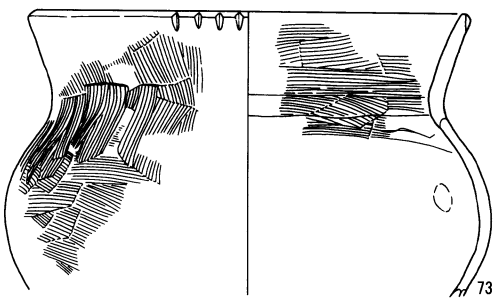


第44图 沟迹出土遗物(2)

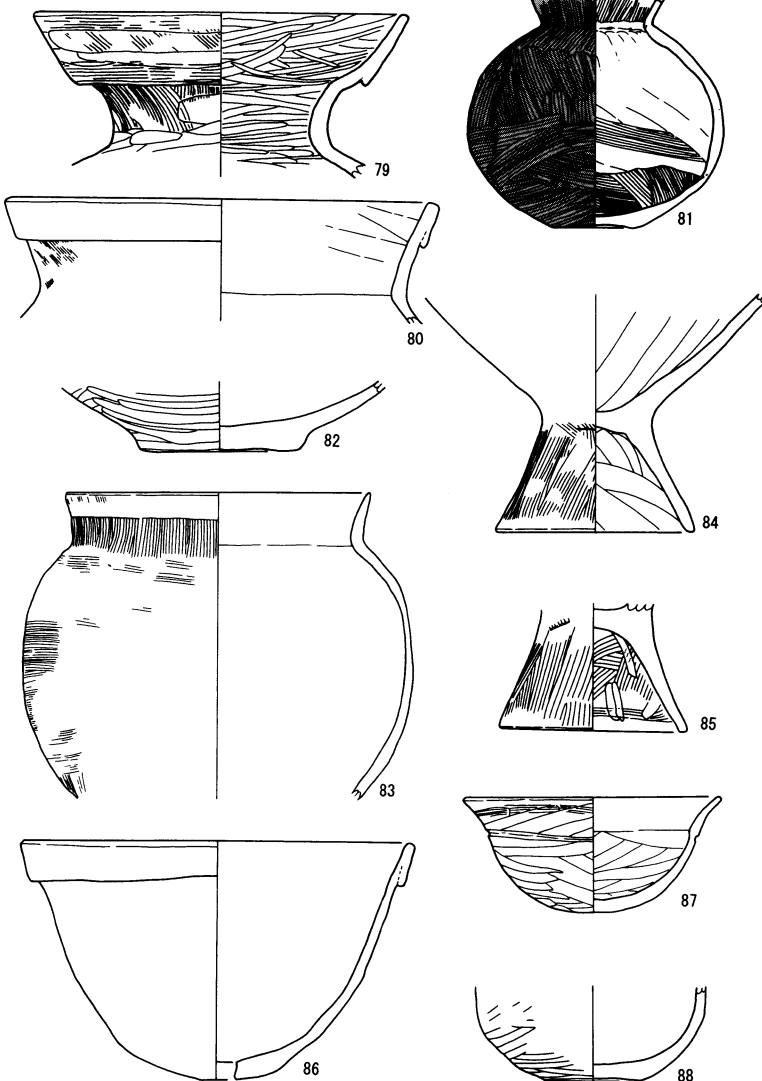
第10号沟迹



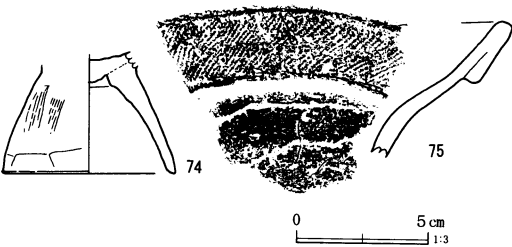
第12号沟迹



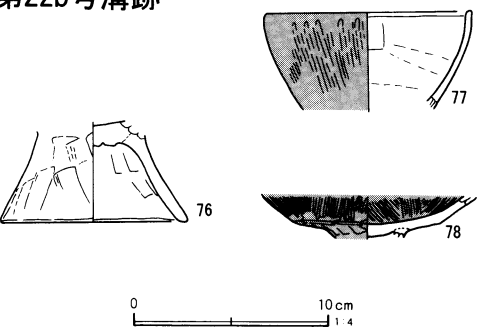
第23号沟迹



第22号沟迹

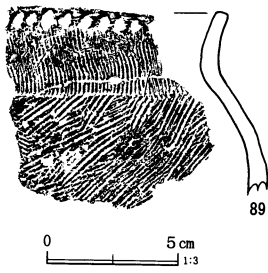


第22b号沟迹

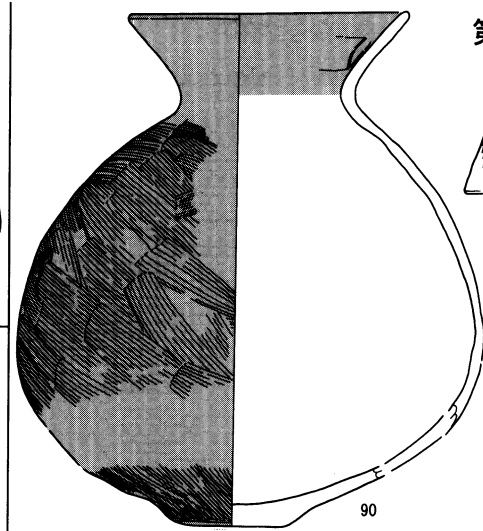
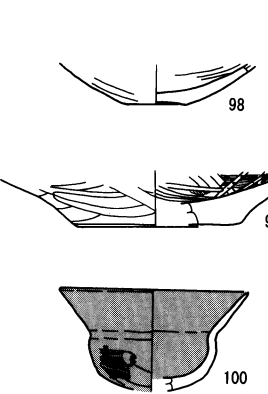


第45图 沟迹出土遗物(3)

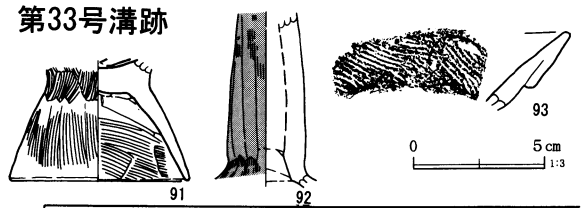
第26号溝跡



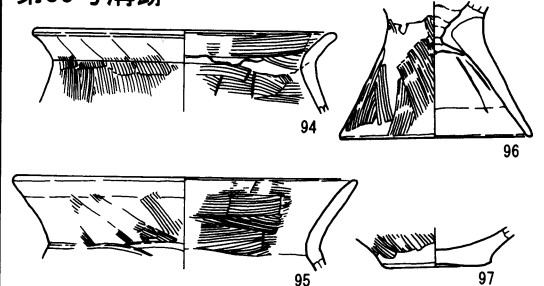
第36号溝跡



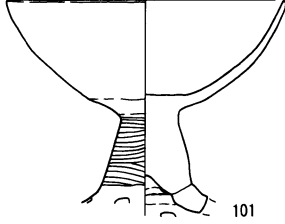
第33号溝跡



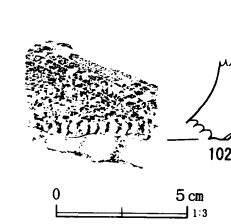
第35号溝跡



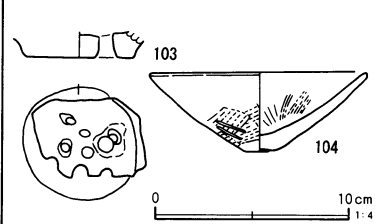
第37号溝跡



第39号溝跡



第42号溝跡



第46図 溝跡出土遺物(4)

第18表 溝跡出土遺物観察表(1)

遺構	番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
SD 3	1	台付甕	—	[7.2]	11.0	EFGH	良好	橙	100%	No.2
SD 3	2	台付甕	—	[9.1]	10.0	ACEFH	良好	にぶい橙	80%	No.1 外面・胴部内面に煤付着
SD 3	3	埴	—	[3.4]	2.3	AFGH	普通	にぶい黄褐	70%	外面に黒斑 底部は上げ底
SD 5	4	甕	(13.8)	[6.5]	—	EFG	良好	赤褐色	20%	外面は摩滅
SD 5	5	壺	—	[4.1]	9.4	AEFG	良好	橙	65%	外面に工具痕 砥石に転用?
SD6a	6	壺	(19.0)	[10.4]	—	FGH	普通	淡橙	25%	口唇部・口縁部外面に網目状燃糸文 赤彩
SD6a	7	壺	(14.2)	28.8	10.2	H	良好	茶褐	75%	No.14・18・26・41 木葉痕 赤彩 胴下半に煤
SD6a	8	台付甕	(22.1)	32.6	11.3	FGI	普通	灰黄褐	70%	No.10・11・14・17・39 内外面に煤付着
SD6a	9	台付甕	(25.8)	[29.2]	—	ACFI	普通	褐	75%	No.4・7~9・22~25・35~37・43 内外面に煤付着
SD6a	10	高坏	(27.1)	[4.8]	—	ACEH	良好	褐灰	10%	
SD6a	11	器台	—	[8.5]	9.8	FGH	良好	灰白	90%	No.27 透孔4
SD6a	12	壺	—	[2.8]	—	AEI	普通	淡黄	—	口縁部外面に網目状燃糸文 端部に刻み目
SD6a	13	壺	—	—	—	ACEFK	普通	浅黄	—	胴部外面に網目状燃糸文
SD6a	14	甕	—	[3.1]	—	ACEF	普通	褐灰	—	内外面に煤付着
SD 7	15	台付甕	(16.6)	[23.3]	—	FHI	普通	にぶい赤褐	45%	南北ベルト 胴部下半外面に煤付着
SD 7	16	甕	13.8	[5.7]	—	AEG	普通	褐	35%	南北ベルト 摩滅が著しい
SD 7	17	高坏	—	[10.0]	—	CEDI	普通	浅黄橙	70%	南北ベルト 摩滅が著しい 赤彩?
SD7a	18	壺	21.2	[8.4]	—	CEFK	普通	浅黄橙	60%	No.5 摩滅が著しい
SD7a	19	壺	(15.4)	14.5	2.9	ACEFG	良好	にぶい黄橙	70%	No.8 外面・口縁部内面に赤彩 上げ底
SD7a	20	台付甕	—	[5.9]	11.2	CFK	普通	橙	80%	摩滅が著しい
SD7a	21	台付甕	—	[7.9]	8.8	CEFH	普通	明黄褐	80%	胴部外面に煤付着
SD7a	22	台付甕	—	[6.9]	10.1	EFK	普通	にぶい黄橙	80%	
SD7a	23	台付甕	—	[7.4]	11.0	CEFK	普通	赤褐	65%	No.4・6
SD7a	24	高坏	10.4	7.7	(10.3)	CFH	良好	灰白	60%	No.1 赤彩 透孔3 外面に黒斑 摩滅
SD7a	25	高坏	—	[5.7]	—	EFK	普通	橙	85%	No.3 透孔3 摩滅が著しい
SD7a	26	器台	(9.3)	[3.7]	—	FI	普通	褐灰	60%	
SD7a	27	鉢	11.4	7.6	3.4	FK	普通	橙	90%	No.21
SD7a	28	鉢	12.3	8.2	4.2	CFI	普通	にぶい橙	90%	No.15・18 赤彩 外面に黒斑
SD7a	29	碗	—	[5.2]	3.1	CEF	普通	にぶい赤橙	80%	No.18 内外面に赤彩 外面は黒斑
SD7a	30	甕	—	[2.9]	—	FI	良好	灰黄	—	
SD7b	31	壺	(13.6)	[6.2]	—	AEG	普通	橙	50%	No.61

第19表 溝跡出土遺物観察表(2)

遺構	番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
SD7b	32	壺	—	[9.8]	—	CEFG	普通	にぶい黄橙	50%	No.11・12 南北ベルト 赤彩 胴部外面に黒斑
SD7b	33	壺	(23.2)	[4.8]	—	AEG	普通	褐	20%	No.19・30
SD7b	34	壺	—	[4.3]	6.5	ACEGHJ	普通	灰黄褐	80%	No.53 底部はドーナツ状 外面に煤付着
SD7b	35	壺	—	[3.7]	8.0	AIEFG	普通	褐	60%	No.2・3 外面に黒斑
SD7b	36	S字甕	(14.0)	[2.5]	—	FG	普通	にぶい黄橙	10%	
SD7b	37	甕	(19.9)	[3.8]	—	CEFH	良好	灰黄褐	10%	No.72 内外面に煤付着
SD7b	38	甕	(13.0)	[17.0]	—	CFH	普通	褐	25%	No.9・71 外面に煤付着 器面の一部剥落
SD7b	39	甕	(17.6)	[8.0]	—	FGI	良好	にぶい黄橙	25%	No.8・13
SD7b	40	甕	(18.0)	[10.4]	—	FG	普通	灰黄褐	40%	No.41・42 外面に煤付着
SD7b	41	台付甕	17.7	[22.4]	—	EFH	良好	灰黄褐	50%	No.40・48~50・66 外面に煤付着
SD7b	42	台付甕	—	[5.5]	(8.6)	ACEH	良好	灰黄	50%	No.16
SD7b	43	台付甕	—	[5.5]	10.0	FGH	普通	にぶい黄橙	50%	No.17 外面に煤付着
SD7b	44	台付甕	—	[6.8]	(8.5)	CEFH	普通	にぶい橙	40%	No.21 摩滅が著しい
SD7b	45	台付甕	—	[6.5]	9.6	CEFGH	普通	にぶい橙	100%	No.31
SD7b	46	台付甕	—	[7.1]	10.2	CFGH	良好	にぶい黄橙	100%	No.70 胴部内面に煤付着
SD7b	47	台付甕	—	[7.5]	10.6	AEGIK	普通	にぶい黄橙	100%	No.55 外面は摩滅
SD7b	48	甕	(16.8)	8.7	(5.8)	ABCEGH	普通	にぶい黄橙	20%	底面は多孔か?
SD7b	49	高坏	12.5	[4.5]	—	CEFG	普通	明赤褐	80%	No.38 摩滅が著しい
SD7b	50	高坏	13.7	[4.2]	—	CEFH	良好	にぶい黄橙	75%	内外面に赤彩 摩滅が著しい
SD7b	51	高坏	—	[6.2]	(11.0)	ACEGH	普通	にぶい橙	80%	No.37 透孔3 摩滅が著しい
SD7b	52	高坏	—	[8.7]	—	EFG	普通	赤	90%	No.4 外面は赤彩
SD7b	53	器台	7.7	9.6	11.0	CEFGH	良好	にぶい橙	95%	No.6
SD7b	54	器台	—	[6.3]	(10.6)	EFGH	良好	浅黄橙	60%	No.10 透孔3 摩滅が著しい
SD7b	55	器台	—	[3.7]	6.6	EGH	普通	にぶい黄橙	90%	No.68
SD7b	56	器台	—	[4.1]	7.2	EFG	普通	橙	60%	No.57 摩滅が著しい
SD7b	57	器台	—	[3.9]	7.7	ACEH	普通	橙	80%	No.33 脚部内面に黒斑
SD7b	58	埴	9.4	5.9	1.8	CEFGH	普通	にぶい橙	95%	No.22 上げ底 外面に黒斑 赤彩?
SD7b	59	壺	11.2	[7.5]	—	EG	普通	にぶい黄橙	80%	No.32 外面・口縁部内面に赤彩 摩滅
SD7b	60	壺	—	[2.7]	2.6	CEFGH	普通	にぶい橙	90%	No.5 外面に赤彩 外面は摩滅
SD7b	61	ミニチュア	4.0	3.8	3.6	EGH	普通	にぶい黄橙	95%	No.36 内外面に煤付着
SD7b	62	手捏	(7.8)	4.2	3.3	BCEG	普通	浅黄橙	75%	No.34 底部はドーナツ状
SD10	63	壺	(13.6)	[5.3]	—	EG	普通	橙	25%	No.4 摩滅が著しい
SD10	64	壺	(16.6)	[6.3]	—	EFG	普通	橙	20%	No.1 外面は摩滅
SD10	65	壺	(10.3)	[5.0]	—	EGH	普通	にぶい橙	25%	内外面に煤付着
SD10	66	壺	(14.8)	[8.5]	—	EGI	普通	にぶい赤褐	20%	No.3 外面に赤彩 内面は不明 摩滅が著しい
SD10	67	壺	—	[23.0]	—	CFK	良好	灰白	45%	No.2 外面・口縁部内面に赤彩
SD10	68	甕	22.3	[6.7]	—	EG	普通	橙	20%	外面は摩滅
SD10	69	高坏	—	[8.5]	(11.0)	EH	普通	明赤褐	50%	透孔3 摩滅が著しい
SD10	70	鉢	—	[4.2]	6.0	EGH	普通	橙	70%	外面に赤彩 摩滅が著しい
SD10	71	壺	—	—	—	DF	良好	淡黄	—	単節LR縄文+結節文 外面下半に赤彩
SD10	72	甕	—	[2.7]	—	FH	普通	黒褐	—	内外面に煤付着
SD12	73	甕	(21.6)	[14.2]	—	CFH	良好	黄褐	10%	内外面に煤付着
SD22	74	台付甕	—	[6.2]	(8.6)	ABDFH	普通	橙	70%	摩滅が著しい
SD22	75	壺	—	[5.1]	—	EFHI	普通	橙	—	口縁部外面に単節LR縄文 摩滅が著しい
SD22b	76	台付甕	—	[5.1]	9.6	FHI	普通	橙	100%	No.1 摩滅が著しい
SD22b	77	壺	(10.3)	[5.0]	—	AEGHJ	良好	にぶい黄褐	20%	No.4 外面に赤彩
SD22b	78	高坏	—	[3.2]	—	AIEFGH	良好	にぶい褐	90%	No.3 内外面に赤彩・煤付着
SD23	79	壺	(18.2)	[8.4]	—	EG	普通	明黄褐	25%	E-6GNo.53
SD23	80	壺	22.0	[6.1]	—	EFG	普通	淡黄	65%	E-6GNo.34・36 摩滅が著しい 赤彩?
SD23	81	壺	—	[11.9]	4.0	AIEFG	普通	橙	95%	E-6GNo.52 上げ底 外面に赤彩
SD23	82	壺	—	[3.6]	8.2	EG	普通	橙	90%	E-6GNo.46 底部に木葉痕が僅かに残る 摩滅
SD23	83	甕	(15.4)	[15.5]	—	DFG	普通	橙	30%	E-6GNo.41・45・49 外面に煤付着
SD23	84	台付甕	—	[12.0]	10.1	EG	普通	橙	90%	E-6GNo.37 摩滅が著しい
SD23	85	台付甕	—	[6.4]	9.6	EG	普通	橙	70%	E-6GNo.57 外面に煤付着 器面が剥落
SD23	86	甕	20.0	12.0	1.6	DEHIK	普通	黄橙	95%	E-6GNo.39 外面に煤付着 摩滅が著しい
SD23	87	埴	12.8	5.8	—	E	普通	にぶい橙	80%	E-6GNo.33 体部外面に黒斑
SD23	88	鉢	—	[4.8]	4.9	EG	普通	橙	70%	E-6GNo.55 摩滅が著しい
SD26	89	甕	—	[6.8]	—	FIK	良好	淡黄	—	外面に煤付着
SD33	90	壺	(14.0)	(26.0)	6.0	CFK	普通	橙	45%	No.4 外面・口縁部内面に赤彩 外面に黒斑

第20表 溝跡出土遺物観察表(3)

遺構	番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
SD33	91	台付甕	—	[6.1]	(9.0)	CEF	普通	灰白	35%	外面に煤付着
SD33	92	高坏	—	[8.7]	—	ACEFI	普通	明黄褐	95%	No.5 外面に赤彩
SD33	93	壺	—	[2.9]	—	ACEFK	普通	橙	—	内外面に赤彩 口縁部内外面には粗いハケ
SD35	94	甕	(15.0)	[4.0]	—	AEFH	普通	褐	20%	内外面に煤付着
SD35	95	甕	(17.4)	[4.6]	—	AEFH	普通	灰褐	10%	内外面に煤付着
SD35	96	台付甕	—	[6.9]	(9.6)	AEFK	普通	にぶい黄橙	35%	No.2
SD35	97	甕	—	[1.9]	3.6	FHI	普通	灰黄	50%	ドーナツ状底部 外面に煤付着
SD36	98	壺	—	[2.2]	2.9	CEFIK	良好	灰白	75%	上げ底状 外面に黒斑
SD36	99	壺	—	[2.9]	(8.8)	DEG	普通	明黄褐	20%	内面に煤付着
SD36	100	埴	(9.6)	[5.1]	—	CEFI	良好	黄橙	35%	内外面に赤彩 摩滅が著しい
SD37	101	高坏	(14.0)	[10.9]	—	FK	普通	にぶい黄橙	50%	透孔6 脚部外面は粗い横方向のハケ目
SD39	102	壺	—	[3.2]	—	CFH	普通	黄灰	—	口縁部外面に網目状燃糸文 端部に刻み目
SD42	103	甌	—	[1.3]	(6.0)	G	普通	淡橙	45%	不規則な穿孔
SD42	104	鉢	(10.8)	3.9	(1.5)	G	普通	淡橙	25%	上げ底状 摩滅が著しい

7. ピット

ピットは調査区全体で66本が検出された。(第39～41図)特に、D-6、E-6・7、G-8グリッドにおいて集中する傾向が見られた。

遺物が出土したピットが少ないため、時期を特定できた遺構は少数である。E6グリッドP4からは、S字状口縁台付甕の口縁部破片が出土している。

第21表 ピット一覧表

遺構名	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	時期	遺構名	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	時期
B4G P1	28	27	54	不明	F6G P3	欠番			
D5G P1	42	26	37	不明	F6G P4	29	24	19	不明
D6G P1	欠番				F7G P1	36	31	48	古墳前期
D6G P2	38	31	10	古墳前期	F7G P2	45	41	60	古墳前期
D6G P3	47	37	12	古墳前期	F7G P3	20	17	28	不明
D6G P4	42	36	22	古墳前期	F7G P4	88	61	14	不明
D6G P5	34	31	10	不明	F7G P5	61	41	69	不明
D6G P6	38	31	31	古墳前期	F7G P6	72	37	17	不明
D6G P7	35	26	19	古墳前期	F7G P7	56	47	12	古墳前期
D6G P8	48	41	17	不明	F7G P8	33	29	7	不明
D7G P1	49	44	20	不明	F8G P1	欠番			
D7G P2	33	31	9	不明	F8G P2	56	53	43	不明
E5G P1	43	40	11	不明	F8G P3	80	38	54	不明
E6G P1	欠番				F8G P4	52	36	23	不明
E6G P2	欠番				F8G P5	57	51	29	不明
E6G P3	38	34	11	不明	F8G P6	52	43	24	不明
E6G P4	61	48	33	古墳前期	F8G P7	44	39	41	不明
E6G P5	欠番				F8G P8	32	20	13	不明
E6G P6	38	37	37	不明	F8G P9	47	38	30	不明
E6G P7	54	51	47	不明	F9G P1	51	44	50	不明
E6G P8	38	36	26	古墳前期	G8G P1	27	27	11	古墳前期
E6G P9	37	33	19	不明	G8G P2	55	30	24	古墳前期
E7G P1	81	61	24	古墳前期	G8G P3	55	(25)	22	古墳前期
E7G P2	(36)	41	26	不明	G8G P4	(31)	(24)	14	古墳前期
E7G P3	26	24	10	不明	G8G P5	31	30	38	古墳前期
E7G P4	41	37	33	古墳前期	G8G P6	39	38	52	不明
E7G P5	28	27	36	不明	G8G P7	47	41	55	不明
E7G P6	36	30	36	不明	G8G P8	42	36	18	古墳前期
E7G P7	33	31	36	不明	G8G P9	46	41	21	不明
E7G P8	45	29	11	不明	G8G P10	36	35	35	不明
E7G P9	44	35	33	不明	G8G P11	78	54	42	不明
E7G P10	55	40	29	不明	G8G P12	(42)	41	13	不明
E7G P11	35	32	36	不明	G8G P13	35	(19)	25	不明
E8G P1	35	27	40	不明	G8G P14	(47)	49	34	不明
E8G P2	(43)	56	42	古墳前期	G8G P15	31	24	10	不明
F6G P1	欠番				G8G P16	31	26	17	不明
F6G P2	欠番				G8G P17	41	30	26	不明

8. その他の遺物

a. 石製品 (第47図)

石製品は、砥石が5点、石皿と考えられる石器1点の計6点が出土した。出土遺構は、砥石が土壇、溝跡から各2点、グリッドから1点、石皿が井戸跡から出土している。掲載した遺物以外には、B区内から近世以降の硯が1点出土している。

1～5は、砥石である。

1は、第6号土壇から出土した。下端部を欠損している。上部を除き全面研磨している。長さ5.9cm、幅2.3cm、高さ2.2cm、重さが34.7gである。石材は、砂岩である。

2は、第7号溝跡から出土した。全面研磨している。表裏右側面に深い溝が長軸方向に数条観察できる。長さ5.6cm、幅2.7cm、高さ2.3cm、重さが22.5gである。石材は、安山岩である。

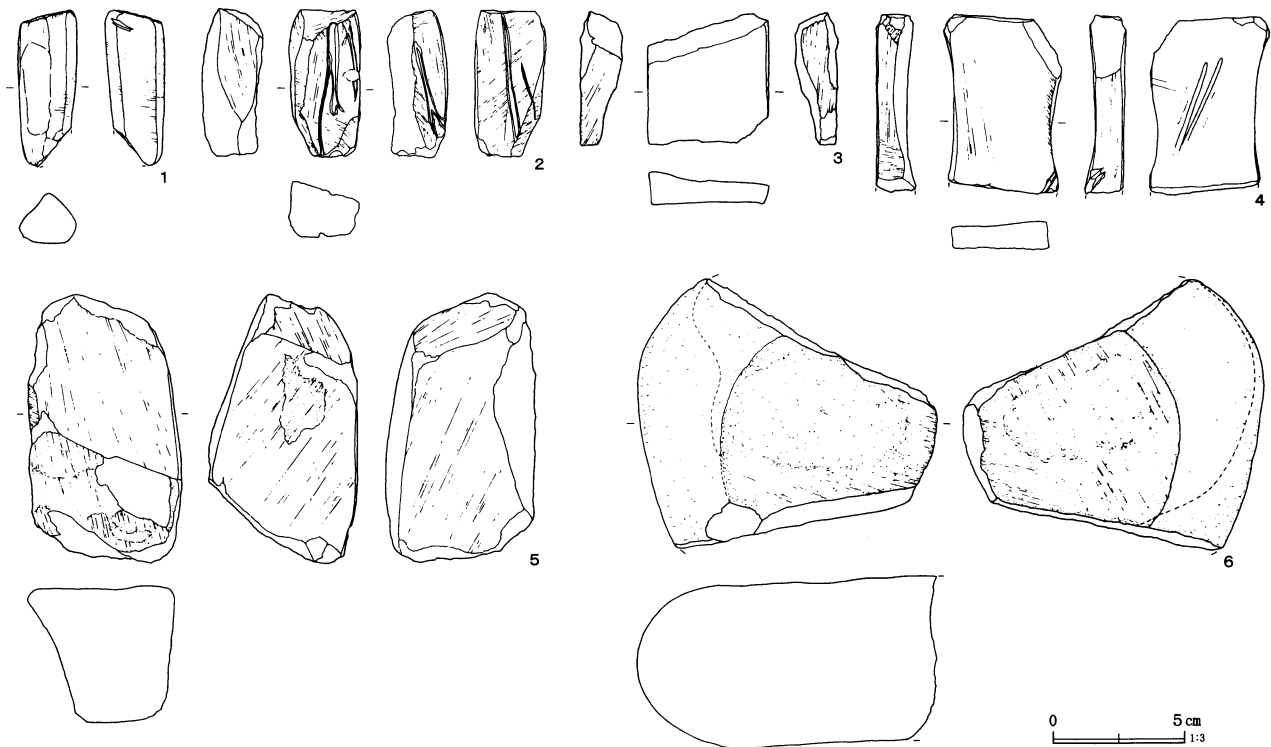
3は、E-6グリッド内から出土した。左側面部が欠損している。表裏面を研磨しており、擦痕が観

察できる。長さ5.0cm、幅1.6cm、高さ4.5cm、重さが37.0gである。石材は、砂岩である。

4は、第3号土壇から出土した。表裏両側面を研磨している。裏面に浅い溝が二条観察できる。正面右下部に刃ならし痕が認められる。長さ6.7cm、幅4.4cm、高さ1.5cm、重さが55.1gである。石材は、泥岩である。

5は、第26号溝跡から出土した。左側面と下面の一部に欠損がみられるが、全面研磨している。下面部の研磨がやや粗く礫面が残っている。長さ10.2cm、幅5.8cm、高さ5.7cm、重さが400.2gである。石材は、砂岩である。

6は、第2号井戸跡から出土した石皿と考えられる石器である。一部のみ残存しており、中央部が僅かに凹んでいる。被熱のため、側面部が黒く変色している。長さ9.8cm、幅11.3cm、高さ6.6cm、重さが1076.3gである。石材は、安山岩である。



第47図 石製品

b. 土製品 (第48図)

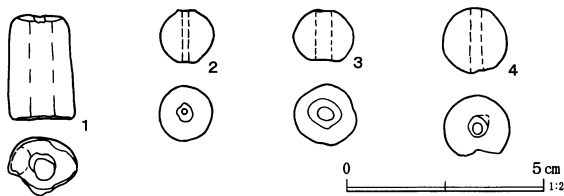
土製品は、B区内から土錘が1点、土壙・溝跡・グリッドから土玉が各1点出土した。

1は、B区内から出土した土錘である。如意遺跡で報告された土錘の形態分類によると(岩瀬・大谷・栗岡 2003)、A・B・B'・C・D・Eのうち、「上端と下端の径が一定だが、長さに対する径の割合が大きく、太く短い」E類に該当する。上下端面取りはない。長さ4.0cm、幅2.5cm、孔径0.8cmである。胎土は粒子が細かく、雲母、石英を含む。焼成は良好、残存率は70%、色調は橙色である。

2は、第9号土壙から出土した土玉である。下端にわずかな面を作り、上端は尖る。長さ2.0cm、幅2.0cm、孔径0.2cmである。白色粒子を多量に含み、その他角閃石を含む。焼成は普通、残存率は100%、色調はにぶい黄橙色である。

3は、D-6グリッド内から出土した土玉である。上下端がつぶれた玉形である。いびつに歪む。下端に面を作り、上端は尖る。長さ1.9cm、幅2.4cm、孔径0.6cmである。砂粒子、小礫を含む。焼成は普通、残存率は95%、色調はにぶい橙色である。

4は、第2号周溝から出土した土玉である。下端にわずかに面を作り、上端は尖る。長さ2.5cm、幅2.5cm、孔径0.4cmである。角閃石、石英、砂粒子、白色粒子を含む。焼成は普通、残存率は95%、色調はにぶい黄橙色である。



第48図 土製品

c. 木製品 (第49図)

古墳時代前期の周溝(第3・4号周溝)・井戸跡(第8号井戸跡)・溝跡(第35号溝跡)から容器の蓋・杭・加工材などが出土した。近世の井戸跡(第2・6号井戸跡)からは、漆碗が出土した。

1は、第2号井戸跡から出土した漆碗である。内面に朱漆、外面に黒漆が施される。口縁部・底部下端を欠損している。推定底径6.0cm、残存高5.1cmである。

2は、第6号井戸跡から出土した漆碗である。内外面に朱漆が施される。外面下部の一部に円形の加工痕が見られる。口縁部・底部下端を欠損している。推定底径5.6cm、残存高3.2cmである。

3は、第8号井戸跡から出土した加工材である。丸材の全面を約2.0cm～3.0cm幅で削って面を作る。残存長31.2cm、幅6.9cm、厚さ4.9cmである。

4は、第8号井戸跡から出土した容器の蓋で、刳物である。内側に種子様のものを充填し、伏せた状態で出土した。楕円形の容器と組み合わさるもので、笠状を呈する。下端には身と合わせるため0.2cm幅の溝がめぐらされる。内外面全面に、同方向へ規則的に加工した痕跡が見られる。推定長43.9cm、幅26.1cm、厚さ1.5cm～2.5cmである。同様の蓋が大坂府新家遺跡で出土している(大阪文化財センター1987)。

5は、第3号周溝から出土した加工材である。長方形の板状を呈する。残存長15.4cm、幅5.6cm、厚さ1.9cmである。

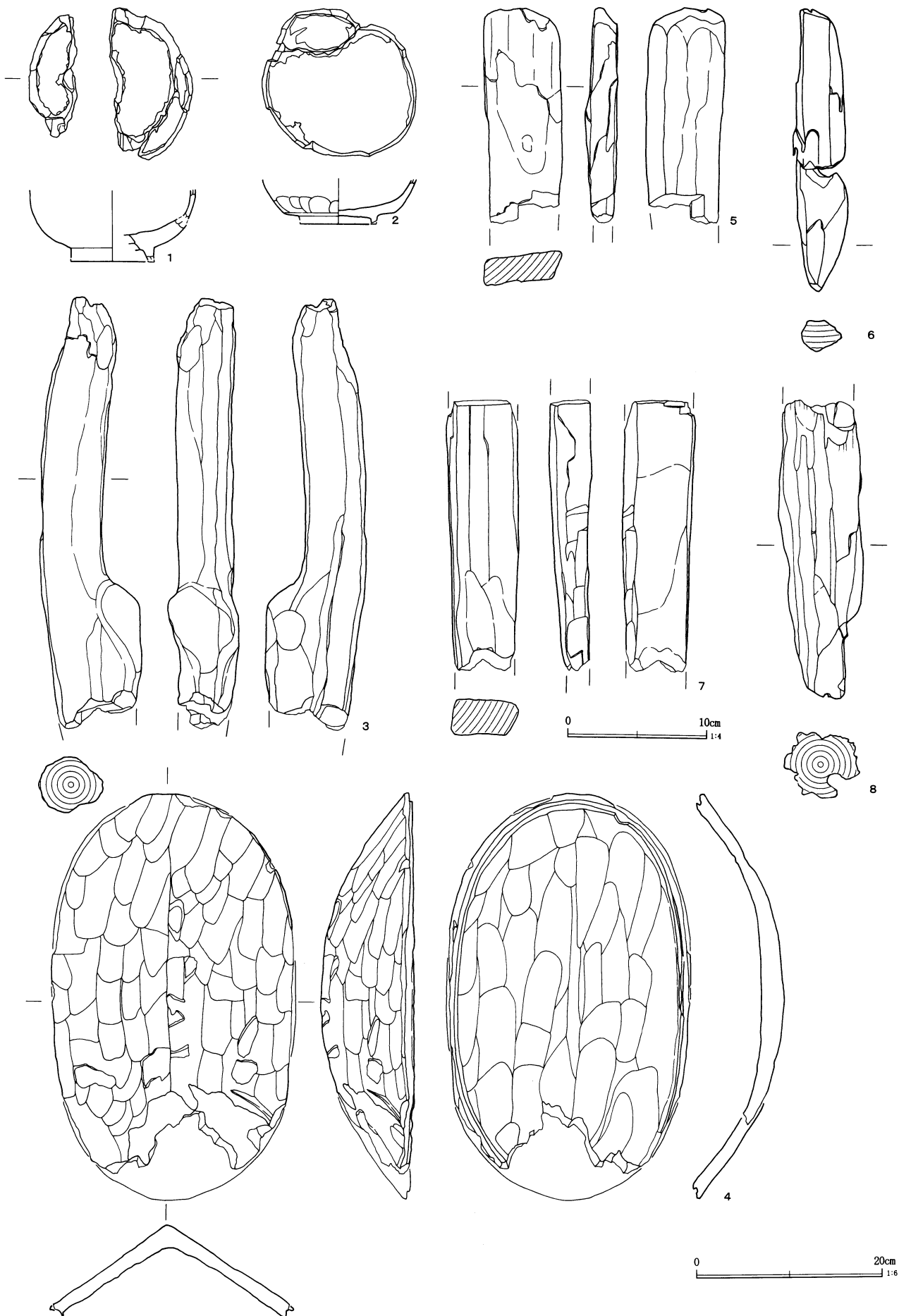
6は、第4号周溝から出土した杭である。割材を削りだしたもので、細長い。上部を欠損している。残存長20.3cm、幅3.6cm、厚さ2.2cmである。

7は、第35号溝跡から出土した加工材である。長方形でやや厚みのある板状を呈する。残存長19.4cm、幅5.1cm、厚さ2.6cmである。

8は、F7グリッドP2から出土した杭である。丸材を削りだしたものである。表面は凹凸が激しい。上部を欠損している。残存長21.6cm、幅5.8cm、厚さ4.7cmである。

岩瀬譲・大谷徹・栗岡潤 2003 『如意遺跡IV』財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団

中西靖人・入江正則・森屋美佐子ほか 1987 『新家(その1)』財団法人大阪文化財センター



第49图 木製品

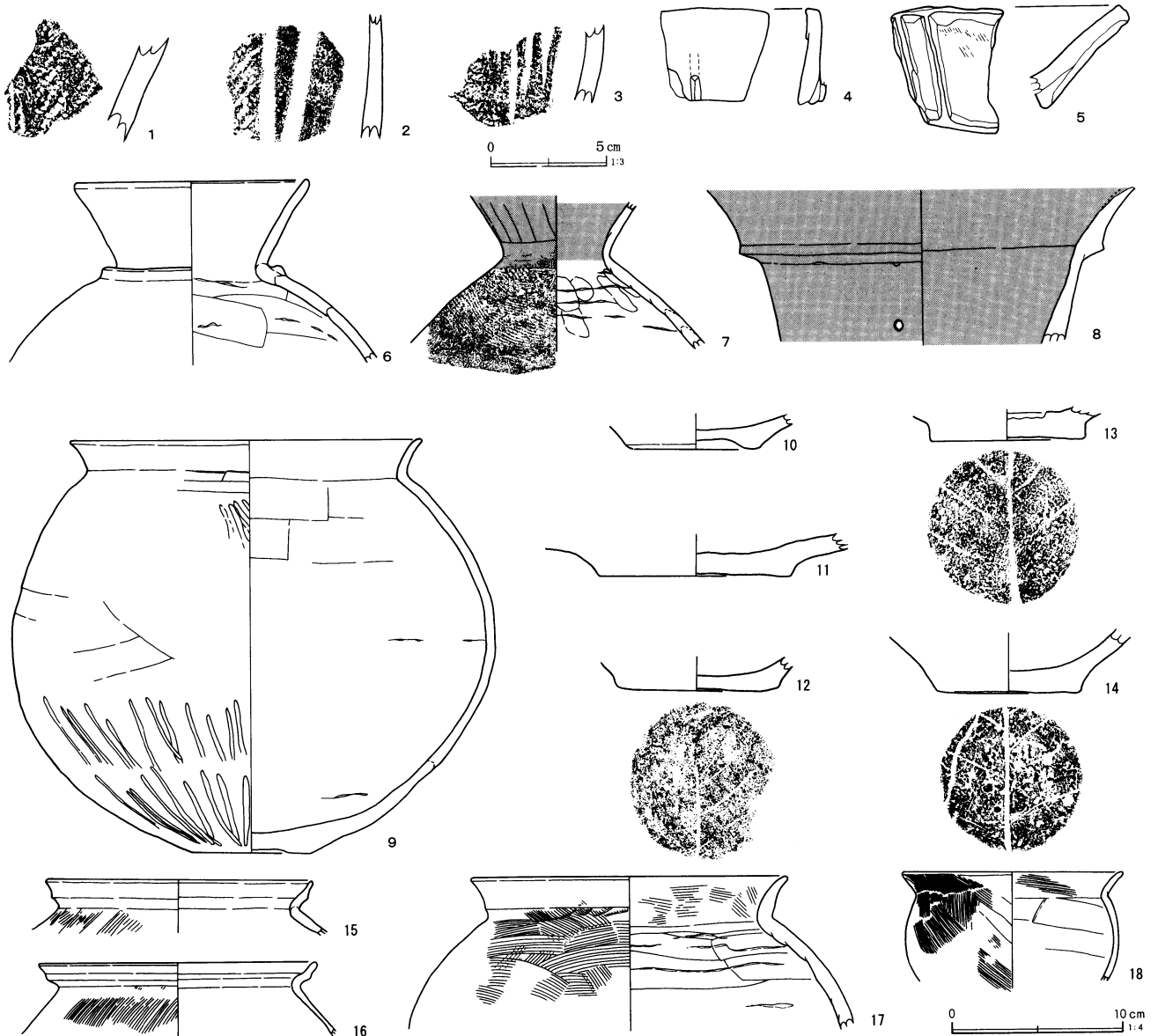
9. 遺構に伴わない出土遺物

帰属遺構が不明のグリッドから出土した土器や、出土遺構に伴わない土器を一括して掲載した。

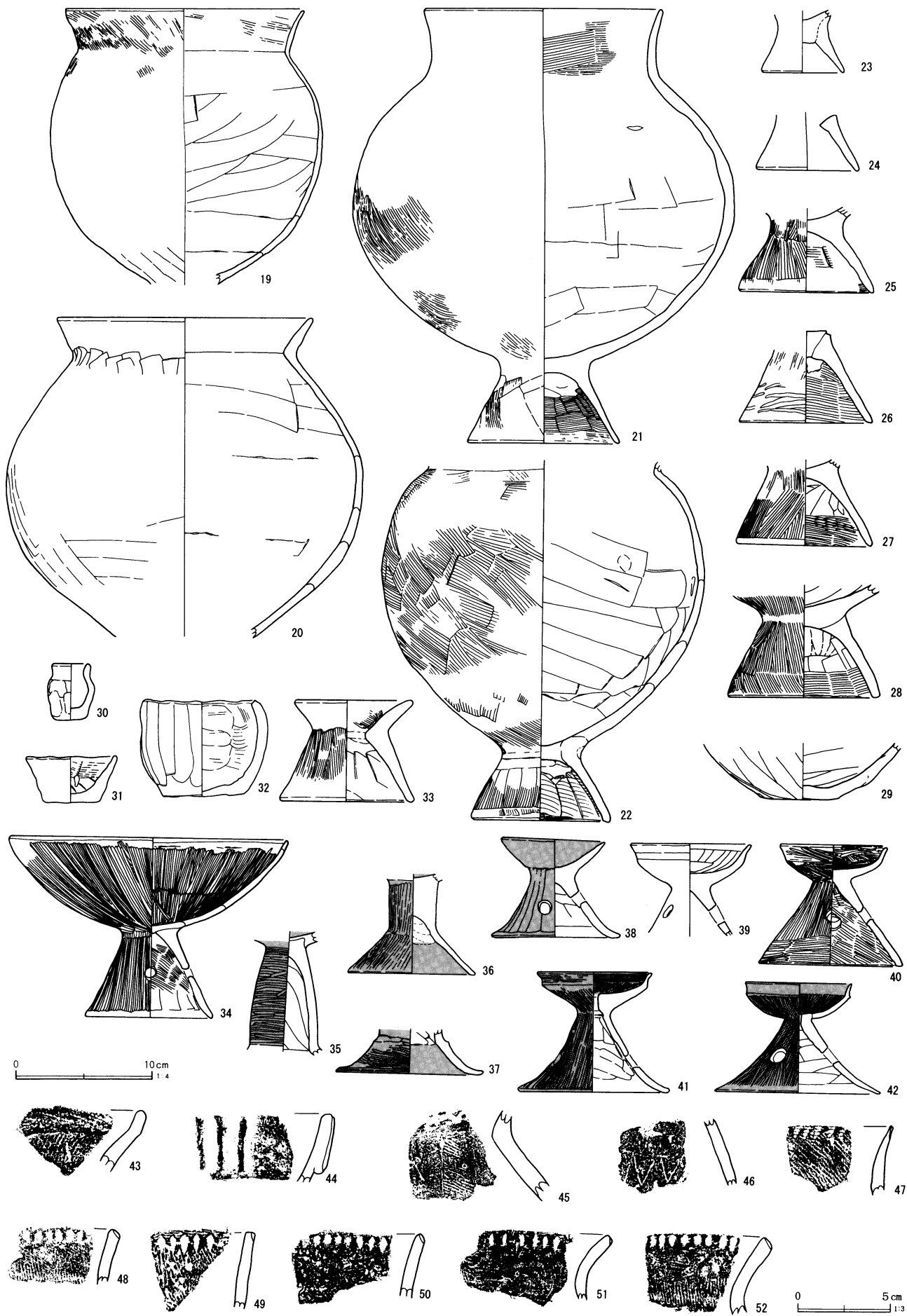
1～3は、縄文土器である。1・2は、中期加曾利EⅢ式の深鉢形土器の胴部片で、3は後期堀ノ内式と思われる深鉢形土器の胴部片である。

4～53は、古墳時代前期の古式土師器である。4～14は、壺形土器である。4は、外面に棒状浮文が1本のみ残存し、内面には幅1.7cmの折り返しがある。8は、大型の2重口縁壺で、頸部に径0.5cmの焼成前の小さな穿孔が1ヶ所認められる。11は、大廓式土器の底部と考えられる。色調が浅黄橙色で、胎土には多量の混入物が含まれており、他の土器と

は様相を異にする。12～14の底部外面には木葉痕が明瞭に残る。15～29は、甕形土器である。15・16はS字状口縁台付甕の口縁部である。30・31は、ミニチュア土器である。32は、手捏土器である。33は、器台形土器である。34～37は高坏形土器で、35～37は柱状の脚部をもつ。38～42は器台形土器で、38～40は、器受部と脚部との接合部分に貫通孔があげられていない。43～46は、壺形土器の拓影図である。45は、頸部から胴部にかけて浅い沈線で区画された範囲に単節RL縄文が充填される。46は、胴部外面に山形文が施文される。47～52は、口唇部に刻み目を施す甕形土器の口縁部片である。



第50図 遺構に伴わない出土遺物(1)



第51図 遺構に伴わない出土遺物(2)

第22表 遺構に伴わない出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	深鉢	—	—	—	FH	普通	灰黄	—	SE 8 縄文土器(加曽利 E III)
2	深鉢	—	—	—	FH	普通	黄灰	—	SD24 縄文土器(加曽利 E III)
3	深鉢	—	—	—	DEFG	普通	にぶい黄橙	—	SD 5 縄文土器(堀ノ内?)
4	壺	—	[5.5]	—	E	普通	橙	—	E-6G 棒状浮文の一部が残存 内面折り返し
5	壺	—	[5.9]	—	FGH	良好	にぶい黄橙	—	D-6G 棒状浮文が2本残る
6	壺	(13.4)	[10.5]	—	CEFK	普通	にぶい黄橙	20%	D-6G 頸部に突帯
7	壺	—	[8.7]	—	GI	普通	にぶい黄橙	95%	E-5GNo.3 口縁部内外面・胴部外面に赤彩
8	壺	—	[8.8]	—	EFGK	普通	橙	10%	E-5G 頸部に焼成前の穿孔 内外面に赤彩
9	広口壺	20.3	[23.8]	6.8	ADFH	普通	黄橙	70%	F-6GNo.1 胴部外面に黒斑 底部はドーナツ状
10	壺	—	[2.0]	7.8	EG	普通	にぶい橙	85%	E-6G 底部はドーナツ状 摩滅が著しい
11	壺	—	[2.4]	11.0	EFIK	良好	浅黄橙	90%	D-6G 大廓式 胎土に混入物多量
12	壺	—	[2.0]	9.3	CFIK	普通	橙	95%	E-6G 底部に木葉痕
13	壺	—	[1.8]	8.8	EHIK	普通	灰白	70%	表採 底部に木葉痕
14	壺	—	[3.5]	8.2	CEF	普通	橙	85%	D-6G 底部に木葉痕 外面に黒斑
15	S字甕	(15.2)	[3.1]	—	CEF	普通	灰白	60%	D-6G 内外面に煤付着
16	S字甕	(16.0)	[4.3]	—	DEFH	普通	淡黄	30%	E-6GNo.59 内外面に煤付着
17	甕	(18.0)	[8.8]	—	EG	普通	橙	25%	E-6GNo.3 内面の輪積み明瞭
18	甕	(12.6)	[6.3]	—	EH	普通	にぶい黄橙	25%	E-6G 外面に黒斑
19	台付甕	17.4	[19.9]	—	CDEFG	普通	橙	90%	E-5GNo.58 内外面に煤付着 外面は摩滅
20	台付甕	18.4	[23.2]	—	ACDEFG	普通	黄橙	55%	F-6GNo.2 胴部外面に黒斑・煤付着
21	台付甕	(17.2)	[31.3]	11.0	AEFHK	良好	灰褐	55%	E-5GNo.50・51 外面に煤付着 摩滅が著しい
22	台付甕	—	[26.2]	9.8	EF	普通	浅黄	45%	B-3G 外面に煤付着 器面が剥落
23	台付甕	—	[4.5]	5.8	ACEFG	普通	淡赤橙	90%	SD25 摩滅が著しい
24	台付甕	—	[3.9]	(7.4)	EFGH	普通	明褐	50%	E-5G 摩滅が著しい
25	台付甕	—	[5.2]	9.6	CEF	普通	灰黄	75%	D-6G
26	台付甕	—	[6.6]	9.6	ADFK	普通	橙	60%	B-3G 摩滅が著しい
27	台付甕	—	[6.2]	9.8	EG	普通	橙	100%	E-6GNo.30 脚台部内面に煤付着
28	台付甕	—	[8.1]	11.0	EFK	普通	橙	85%	B-2G
29	甕	—	[4.2]	5.6	EGH	普通	にぶい黄橙	75%	E-5GNo.1
30	ミニチュア	2.8	4.1	2.1	FH	良好	淡黄	100%	B区表土
31	ミニチュア	6.6	3.3	4.0	G	普通	浅黄橙	95%	E-6G 外面に黒斑 赤彩?
32	手捏	7.9	[7.1]	5.7	FHK	普通	灰黄	70%	表採 底部はドーナツ状
33	器台	8.9	7.3	(9.5)	FHK	普通	明赤褐	60%	D-6G
34	高坏	(20.2)	13.0	9.2	AEG	良好	浅黄橙	70%	B-3G 透孔4
35	高坏	—	[8.8]	—	AEGH	良好	にぶい褐	90%	E-6G 外面・坏部内面に赤彩
36	高坏	—	[7.3]	(9.1)	ABGH	良好	褐灰	75%	SD25 内外面に赤彩
37	高坏	—	[3.3]	(10.7)	CEF	良好	にぶい橙	45%	E-7G 内外面に赤彩
38	器台	7.3	7.2	9.3	CEG	普通	橙	90%	E-5GNo.40 外面・器受部内面に赤彩 透孔3
39	器台	(8.7)	[6.5]	—	ACEG	普通	橙	35%	E-5GNo.46 透孔3 摩滅が著しい
40	器台	7.7	8.6	(10.5)	CFH	良好	浅黄橙	70%	B-3G 透孔4
41	器台	8.2	8.6	10.9	FH	普通	にぶい褐	75%	B-2No.1 内外面赤彩 透孔3
42	器台	(7.7)	7.9	(12.0)	EFHI	良好	淡黄	75%	SE 2 内外面に赤彩 透孔3
43	壺	—	[3.4]	—	ACEF	普通	灰黄褐	—	E-6G 口縁部に単節 R L 縄文
44	壺	—	[3.8]	—	CEFK	普通	橙	—	E-6G 内外面に赤彩 棒状浮文が3本残る
45	壺	—	—	—	CFH	普通	灰白	—	D-6G 外面に赤彩・黒斑 単節 R L 縄文
46	壺	—	—	—	DFGK	普通	黄橙	—	D-6G 山形文
47	甕	—	[3.7]	—	CEF	普通	灰白	—	D-6G
48	甕	—	[2.9]	—	EFK	普通	にぶい黄橙	—	D-6G 外面に煤付着
49	甕	—	[4.1]	—	FHK	普通	淡黄	—	E-5G
50	甕	—	[3.4]	—	FIK	普通	浅黄橙	—	E-6G
51	甕	—	[3.5]	—	EFI	普通	淡黄	—	E-5G
52	甕	—	[4.2]	—	FHI	普通	灰褐	—	E-5G 内外面に煤付着

V まとめ

白井沼遺跡の第1・3次調査分は現在整理中で、詳細が明らかになっていないため、遺物等の検討については、平成18年度刊行予定の報告書に譲りたい。本書では、今回の調査で検出された周溝と蓋形木製品について若干の検討を加え、まとめとする。

1. 「周溝」について

第2次調査では、一辺10m前後の溝を方形に巡らせる遺構が、全容をほぼ確認できるもので5基検出された。調査区が狭小であったため、全体を調査できた遺構が少なく、溝跡と土壌として報告した遺構についても、同様の遺構である可能性が考えられる。

1990年代後半までは、低地で発見された同様の遺構は、盲目的に方形周溝墓として認識され、調査・報告がなされてきた。しかし、飯島（飯島1998）と及川（及川1998）の研究により、「墓」としてきたものの一部は「建物跡」である可能性が指摘され、今までの周溝墓研究は再考を余儀なくされた。従来の低地部における周溝墓研究は大きな変換点を迎えることになったのである。また、遺構の性格が変わるにつれ、「周溝をもつ建物」、「周溝を有する建物跡」、「周溝」とさまざまな名称が使用されているのが現状である。

近年、当事業団では同様の遺構を、さいたま市（旧浦和市）外東遺跡（君島1999）、騎西町小沼耕地遺跡（木戸1999）の2遺跡で調査・報告を行い、「周溝」という名称を使用してきた。本書でも、遺構の性格が明らかになった時点で名称の統一を図ることにして、低地部におけるこれらの遺構の性格が定まらない現時点においては、従来の報告を踏襲して、「周溝」と呼称することにした。

古墳時代前期を中心に低地部で検出される溝を方形に巡らせる遺構については、福田が精力的に検討を行っている。（福田1999以降の一連の論考）福田は、埼玉県内の低地部で検出された事例を遺跡毎に綿密に検証を試みた。その結果、方形周溝墓については、方台部が直線的な辺をもつ、周溝の幅が広く浅いものは少ない、壺の出土率が高い、整然とした群構成であることなどの8項目の目安を提示した。また、「周溝を有する建物跡」についても、一辺の中央が切れる、またはそれに加えコーナーの一つが切れる、周溝内の規模が10か13m前後、出土土器に甕が多い、周溝の幅と深さが相対的に狭く、浅いという4項目の認定方法を提示したことで、低地における方形周溝墓研究は大きく前進したのである。

そこで、これまでの研究成果を踏まえ、今回の調査で検出された周溝の特徴を抽出し、遺構の性格について考えてみたい。各周溝の計測値は第23表に示したとおりである。

- 1 本遺跡は、古墳時代前期の短期間に土壌や溝跡が複雑に重複するなか、遺跡に占める占有面積が広い周溝に限っては重複関係が認められない。
- 2 ほぼ同時期の周溝と竪穴住居跡が併存する。第1号住居跡と第2号周溝は切り合っており、周溝の方が新しい。第1号住居跡は、他の遺構にも切られており、本遺跡の中では一番古い部類の遺構である可能性が考えられる。
- 3 周溝内の平坦部の規模は、第3号周溝が最大で一辺が14mを測るが、その他は10m前後の遺構が多い。溝幅は0.6～2mで、深さは0.3～0.9mと、狭くて浅い。
- 4 第1号周溝を除く他の4基の周溝は、ほぼ同じ

第23表 白井沼遺跡第2次周溝一覧表

遺構名	南北	東西	溝・幅	溝・深さ	平坦部南北	平坦部東西	開口部	付属施設	主軸方位	出土遺物
SX1(内)	12.08	(10.31)	0.89~1.21	0.66~0.73	10.13	(9.30)	不明	ピット4本	N-27° - E	壺8、甕2
SX1(外)	(15.12)	(13.31)	1.13~2.03	0.49~0.66	(13.03)	(11.40)	不明	同上	同上	壺17、甕16、高坏5、鉢5、器台2
SX2	10.86	13.19	0.59~1.09	0.37~0.54	9.48	11.55	有(北西部)	-	N-51° - E	甕14、壺4、高坏1
SX3	(6.60)	17.26	0.96~1.68	0.60~0.94	(5.24)	14.16	不明	-	N-36° - W	壺6、甕4、高坏1
SX4	10.76	(10.44)	0.69~2.00	0.27~0.77	8.91	(8.96)	不明	-	N-41° - W	甕5、高坏3、壺2、器台1、ミニ1
SX5	(10.56)	(12.24)	1.25~1.56	0.44~0.49	(9.15)	(10.73)	不明	-	N-30° - W	甕5、器台1、甌1

方位を向く。

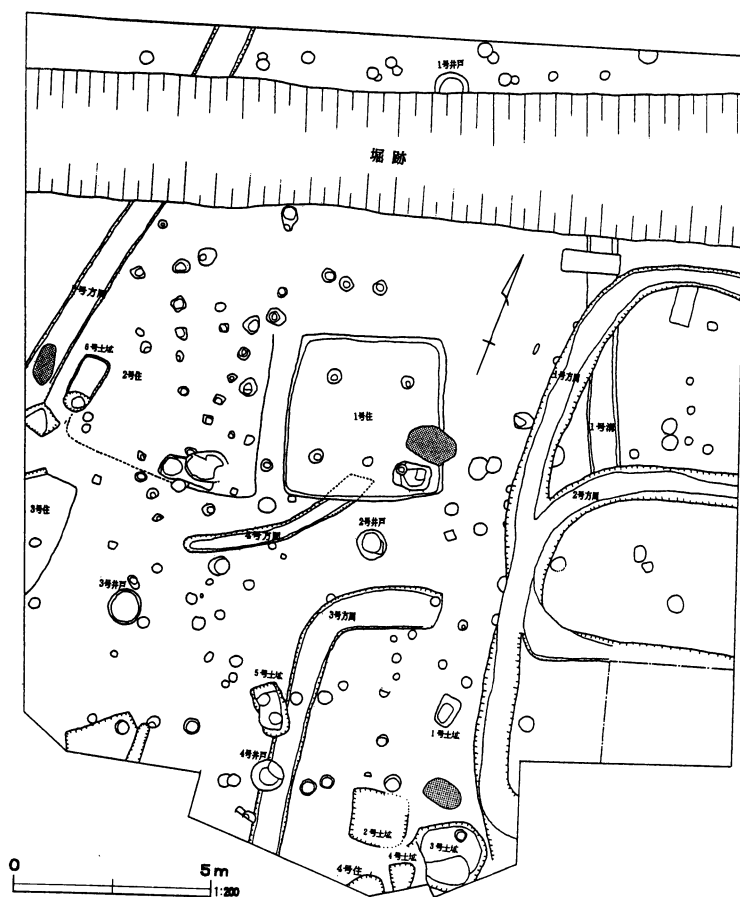
- 5 第1号周溝の内側の平坦部に「建物跡」の可能性のある規則的に配置されたピットが4本検出されている。その内のP2・4の2本からは、柱痕が確認されている。
- 6 第1号周溝は、埋土の堆積状況等から、内周の第1号溝跡から外周の第2号溝跡へと拡張されたと考えられる。
- 7 第2号周溝は、北西部コーナーに幅約4mの開口部をもつ。
- 8 周溝から出土する土器は、壺と甕がほぼ同じ割合で出土している。器種構成も高坏、器台、甑などバラエティに富む。

以上のことから、重複関係がなく、主軸方位もほぼ同じ方向を向くことから、5基の周溝は計画的に構築されたことが伺える。周溝同士の切り合いがないため、新旧関係を明確にすることができないが、第2号周溝出土土器の中で、口縁部に刻みをもち、胴が張る甕が出土していることから、5基の中でも古い様相を呈している。ただ、他の周溝から出土した土器を見てもほとんど時間差があるとは考えられない。

福田が提示した「建物跡」の目安と照合した場合、周溝の規模、出土土器、溝の規模については合致する。また、「方形周溝墓」の目安と比較した場合、出土土器の完形率が高い、整然とした群構成の2点についてほぼ当てはまることになり、どちらか一方の条件を満たす遺構は多くないのが実状である。ただ、供献土器である底部穿孔の壺が本遺跡からは1点も出土しておらず、第1号周溝のように柱穴が検出されたことを考えると、今回検出された周溝は「墓」である可能性は低く、「建物跡」の周溝であった可能性が高い。ただ、建物跡とする決定的な材料がないことから、他遺跡との比較・検討をしていく必要がある。

本遺跡の北北東1.5kmの尾崎遺跡（第52図）でも、同様の遺構が3基検出されているが、それぞれが重複しており、本遺跡との在り方とは様相を異にする。低地における「建物跡」のあり方としては、埼玉県戸田市鍛冶谷・新田口遺跡、東京都北区豊島馬場遺跡などに見られるような、入れ子状に重複が著しい群集タイプのものと、本遺跡や小沼耕地遺跡のような周溝同士が重複しないタイプがある。この場合、居住域が限られた自然堤防という立地条件から前者の集落タイプが多く見受けられる。

低地部で検出された「周溝」については、福田の認定方法により判別可能になったわけではなく、依然として遺構の認定についての課題は残されている。また、「建物跡」とされる遺構についても、竪穴の掘り込みや炉跡などが検出された遺構が少ないことから、居住施設であったのかどうか今後更に検証を重ねていかなければならないだろう。



第52図 尾崎遺跡全測図

2. 第8号井戸跡出土の木製蓋について

白井沼遺跡では、第8号井戸跡から木製の蓋が出土した。蓋は古墳時代前期の製品で、長さ43.9cm、幅26.1cm、高さ10.0cmである。下端の溝で身と組む場合、身は長さ約42cm、幅約24.4cm、口縁の厚さ約0.4cmと考えられる。

同様の木製蓋が、大阪府東大阪市新家遺跡でも出土している(中西・入江・森屋ほか1987)。蓋は弥生時代後期包含層から出土した。長さ49.8cm、幅32.3cm、高さ10.4cmで、身の受部の木片が挟まっていたという。下端の溝で身と組む場合、身は長さ約47cm、幅約30cm、口縁の厚さ約0.6cmと考えられる。

なお、新家遺跡の木製蓋は、石製・土製楕円形合子の蓋に似た資料として取り上げられている。古墳時代前期・中期の畿内・近隣地域で用いられた石製・土製楕円形合子の祖形は、新家遺跡で出土したような木製の割物蓋と曲物であるという(上原1994)。

石製・土製合子については、西谷真治氏が分類、祖形・用途の検討を行っており(西谷1970)、上記二点の木製蓋は、この分類のうち石製・土製楕円形合子の蓋の外形に近似している。新家遺跡の木製蓋は石製・土製合子の祖形のひとつだとしても、白井沼遺跡の木製蓋については、石製・土製合子の年代・地域から考えて石製合子の出現とは直接の関係がないと考えられる。

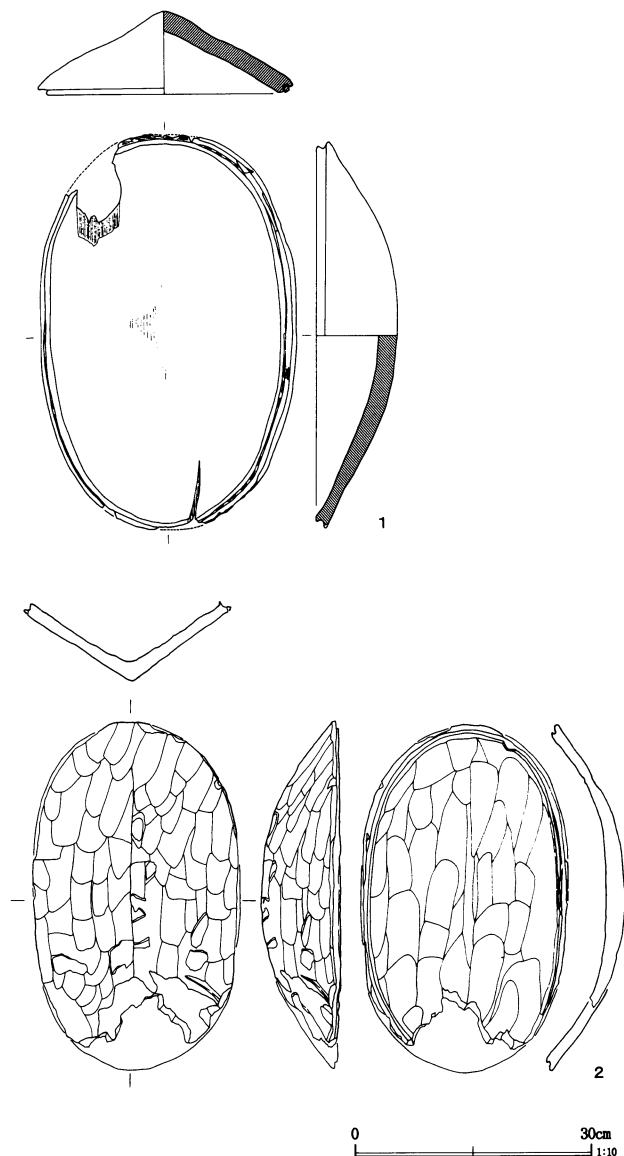
木製蓋二点を比較すると、外面中央に稜を持つ笠形の外形や、身との組み合わせ部分など形状は近似する。しかし、白井沼遺跡の木製蓋の方が小形であり、長さ・幅にはそれぞれ約6cmの差がある。高さはほぼ同じである。時期は弥生時代後期、古墳時代前期と白井沼遺跡の製品の方が新しい。

大阪府で出土した木製蓋と同様の木製蓋が埼玉県で出土したことは、弥生時代後期から古墳時代前期の間に何らかの動きがあったことを示している。しかし、それが何であるかを推測するのは困難である。

白井沼遺跡では蓋以外の木製容器は出土しなかつ

たが、埼玉県内では古墳時代前期に次のような木製容器がみられる。埼玉県行田市小敷田遺跡の盤・槽7点、台付盤・槽3点、杓子1点、高坏脚部1点(吉田1991)、埼玉県戸田市鍛冶谷・新田口遺跡の曲物底板1点、盤・槽1点などである(西口1986)。内容・量は豊富ではない。これら古墳時代前期の木製容器の種類(盤・槽、台付盤・槽、曲物、杓子)に蓋付き容器が加わることとなった。

小敷田遺跡、鍛冶谷・新田口遺跡では、木製容器が、土器に比べて器種・量ともに非常に少ない。多量の土器と少量の木製容器という割合である。しかし、古墳時代前期の埼玉県熊谷市北島遺跡のように、多量の土器とともに一定量の木製品が出土し



第53図 木製蓋の類例

ながら、木製容器がないという状況も存在する（磯崎・山本 2005 宅間 2005 山本 2005）。古墳時代前期の木製容器の使用状況は一様ではない。

白井沼遺跡はというと、木製容器が一点のみでは

あるものの、小敷田遺跡、鍛冶谷・新田口遺跡と同じく、多量な土器とともに少量の木製容器を用いていたと考えられる。

引用・参考文献

- 飯島義雄 1998 「古墳時代前期における「周溝をもつ建物」の意義」『群馬県立歴史博物館紀要』第19号 群馬県立歴史博物館
- 飯島義雄 2005 「「周溝をもつ建物」における掘り方の確認の意義—前橋台地上に立地する横手早稲田遺跡における例を中心として—」『群馬考古学手帳』15 群馬土器観会
- 飯塚武司 1999 「東日本における古墳出現期の木工集団（上）」『古代文化』第51巻第5号 古代学協会
- 磯崎 一・山本 靖 2005 『北島遺跡XⅢ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第305集
- 上原真人編 1993 『木器集成図録 近畿原始篇』奈良国立文化財研究所
- 上原真人 1994 「日常生活の道具 入れもの」『季刊考古学』第47号 雄山閣
- 岡本淳一郎 1997 「「周溝をもつ建物」について」『埋蔵文化財調査概要—平成8年度—』財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所
- 岡本淳一郎 1998 「弥生時代周溝遺構に関する一考察」『富山考古学研究』創刊号 財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所
- 及川良彦 1998 「関東地方の低地遺跡の再検討—弥生時代から古墳時代前半の「周溝を有する建物跡」を中心に—」『青山考古』第15号 青山考古学会
- 及川良彦 1999 「関東地方の低地遺跡の再検討（2）—「周溝を有する建物跡」と方形周溝墓および今後の集落研究への展望—」『青山考古』第16号 青山考古学会
- 及川良彦 2001 「関東地方の低地遺跡の再検討（3）—「周溝を有する建物跡」の再検討—」『青山考古』第18号 青山考古学会
- 及川良彦 2004 「関東地方の低地遺跡の再検討（5）—墓と住居の誤謬—」シンポジウム「方形周溝墓研究の今」資料集Ⅱ 方形周溝墓シンポジウム実行委員会
- 及川良彦 2005 「方形周溝墓群と集落群の混在からみえてくるもの」『季刊考古学』第92号 雄山閣
- 木戸春男 1999 『小沼耕地遺跡Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第247集
- 君島勝秀 1999 『外東／神田天神後／大久保条里』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第206集
- 宅間清公 2005 『北島遺跡XⅠ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第303集
- 田嶋明人 1996 「古代の食器様式をもとめて」『古代の木製食器 第1分冊 発表要旨』埋蔵文化財研究会
- 田中正夫 1991 『小沼耕地遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第100集
- 津田福治・小峰啓太郎・金子直行・福田聖他 2002 『尾崎遺跡』川島町遺跡発掘調査報告書第1集 川島町教育委員会
- 中島広頭・嶋村一志・長瀬出 1999 『豊島馬場遺跡Ⅱ』北区埋蔵文化財調査報告第25集 北区教育委員会
- 長瀬出 2000 「東京都豊島馬場遺跡における「方形周溝墓」の再検討」『法政考古学』第26集 法政考古学会
- 中西靖人・入江正則・森屋美佐子他 1987 『新家（その1）』大阪府教育委員会 財団法人大阪文化財センター
- 西口正純 1986 『鍛冶谷・新田口遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第62集
- 西谷真治 1970 「古墳出土の盒」『考古学雑誌』第55巻第4号 日本考古学協会
- 福田 聖 1999 「埼玉県における低地の周溝墓と建物跡（1）—周溝墓とは何かを探るための試み—」『埼玉考古』第34号 埼玉考古学会
- 福田 聖 2004 「埼玉県における低地の周溝墓と建物跡（7）—さいたま市・川島町・吉見町の低地遺跡について—」『埼玉考古』第39号 埼玉考古学会
- 山本 靖 2005 『北島遺跡X』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第302集
- 吉田 稔 1991 『小敷田遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第95集